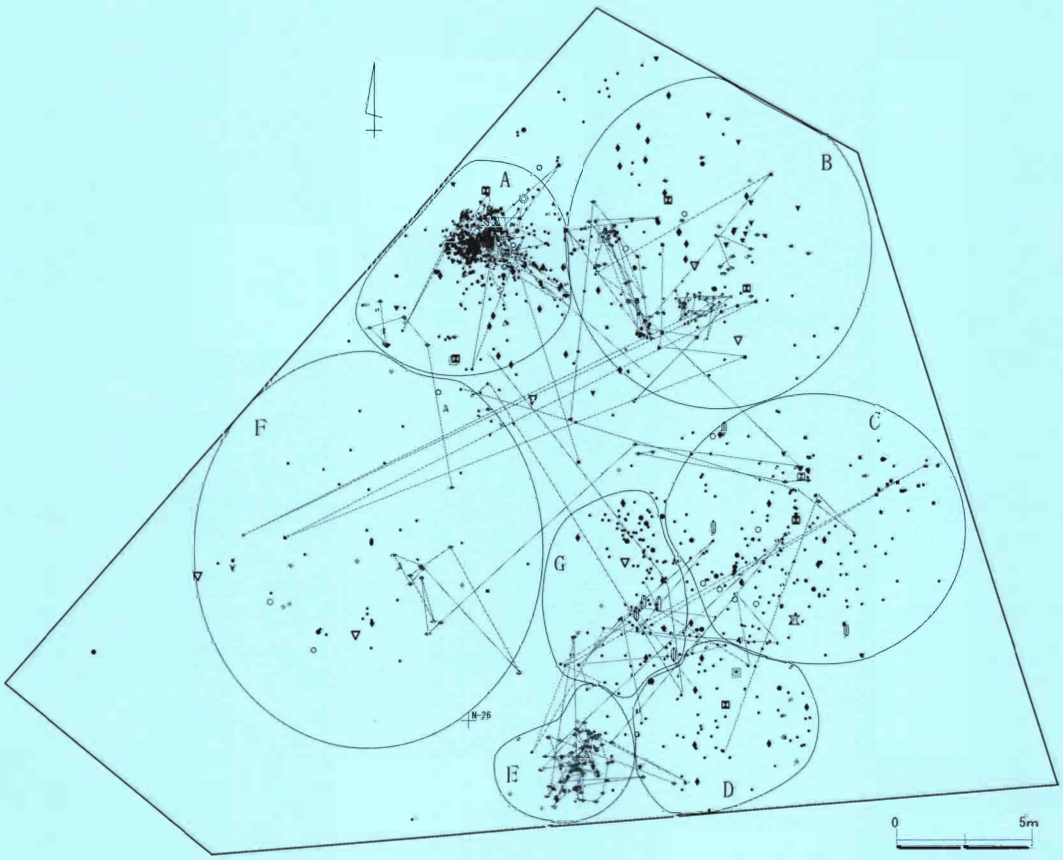
平成21年度考古学講座

かながわの
旧石器時代のムラと住まいを探る

主催　神奈川県考古学会



平成２２(2010)年３月７日

神 奈 川 県 考 古 学 会

開　催　次　第

日　時　　平成２２年 ３月 7日（日）　　午前９時３５分から午後４時４５分

場　所　　横浜市歴史博物館　講堂

開会挨拶		神奈川県考古学会 会長	岡本孝之	9：35～ 9：40
趣旨説明			鈴木次郎	9：40～ 9：45
基調講演	旧石器時代のムラと住まい	明治大学文学部教授	安蒜政雄	9：45～10：35
各論１　旧石器時代各時期のムラを探る				
ナイフ形石器文化期のムラ ①		発　表	畠中俊明	10：40～11：10
－環状ブロック群と石斧の生産－		コメント	小池　聡	11：10～11：20
ナイフ形石器文化期のムラ ②	発　表	中村喜代重・諏訪間順		11：20～11：50
－最寒冷期における活発な礫群活動－		コメント	伊藤　健	11：50～12：00
（ 昼休み ）				
ナイフ形石器文化期のムラ ③		発　表	吉田政行	13：00～13：30
－遺跡間石器接合と遊動生活－		コメント	服部隆博	13：30～13：40
槍先形尖頭器文化期のムラ		発　表	鈴木次郎	13：40～14：10
－石囲い炉をもつブロックと槍先形尖頭器の生産－		コメント	及川　穣	14：10～14：20
細石刃文化期のムラ		発　表	砂田佳弘	14：20～14：50
－細石器石器群の諸活動－		コメント	佐藤明生	14：50～15：00
各論２　旧石器時代の住まいを探る				
田名向原遺跡の住居状遺構とその性格	発　表	戸田哲也・麻生順司		15：10～15：40
		コメント	島田和高	15：40～15：50
小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群（速報）		発　表	栗原伸好	15：50～16：20
		コメント	御堂島正	16：20～16：25
講　評		愛知学院大学文学部教授	白石浩之	16：25～16：40
閉会挨拶		神奈川県考古学会 副会長	中村若枝	16：40～16：45

目　次

【基調講演】
旧石器時代のムラと住まい　安蒜政雄‥‥ 1

ナイフ形石器文化期のムラ①　－環状ブロック群と石斧の生産－　畠中俊明‥‥ 9

ナイフ形石器文化期のムラ②　－最寒冷期における活発な礫群活動－　中村喜代重・諏訪間順‥‥ 19

ナイフ形石器文化期のムラ③　－遺跡間石器接合と遊動生活－　吉田政行‥‥ 31

槍先形尖頭器文化期のムラ　－石囲い炉をもつブロックと槍先形尖頭器の生産－　鈴木次郎‥‥ 43

細石刃文化期のムラ　－細石器石器群の諸活動－　砂田佳弘‥‥ 55

田名向原遺跡の住居状遺構とその性格　戸田哲也・麻生順司‥‥ 62

小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群（速報）　栗原伸好‥‥ 69

例　言

1．本書は、神奈川県考古学会が平成22年３月７日に平成21年度考古学講座として開催する「かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る」の予稿集である。

2．本書の編集は、神奈川県考古学会講座担当の鈴木次郎が担当し、畠中俊明・栗原伸好両氏の協力を得た。

3．本書の編集にあたっては、講座担当の鈴木の他、安蒜政雄（明治大学）・畠中俊明（かながわ考古学財団）の両氏及び麻生順司・栗原伸好・砂田佳弘・諏訪間順・戸田哲也・中村喜代重・吉田政行の会員諸氏から玉稿を賜った。ご多忙中にもかかわらず快く執筆していただいた諸氏に厚くお礼申し上げる。

4．本講座の開催にあたっては、かながわ考古学財団旧石器時代研究プロジェクトチームの協力を得た。

5．本講座は、明石　新・井出智之・小山裕之・鈴木次郎が担当し、役員諸氏の協力を得た。

表紙の挿図：津久井城跡馬込地区第６文化層の遺物分布全体図（環状ブロック群）

考古学講座「かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る」の開催にあたって

日本の旧石器時代研究は、1949年の群馬県岩宿遺跡発掘調査以来60年を経過しております。神奈川県内における本格的な調査・研究は、1960年代の岡本勇・松沢亜生両氏（1965）や相模考古学研究会（1971）による遺跡分布調査と明治大学による大和市月見野遺跡群の発掘調査（明治大学考古学研究室月見野遺跡群調査団1969）をその嚆矢とし、1970年代以降多数の発掘調査が実施され、研究が進められてきました。中でも旧石器時代石器群の変遷を明らかにする編年研究は、本県においては、関東ローム層が厚く堆積しているという好条件を背景に、他地域に先行して詳細な編年が確立され、その内容は平成12年度の考古学講座において「相模野旧石器編年の到達点」として紹介されております。

これに対し、旧石器時代の住まいやムラの構成・居住様式については、当時の生活の重要な要素ではあるものの、なかなか明瞭な遺構が検出されないこともあっていまだ十分明らかにされているとはいえません。旧石器時代の人々が活動した痕跡は、礫群などの遺構とともに彼らが残した石器群の出土状況（分布状態）によって示され、当時のムラの構成や居住様式のあり方は、こうした石器群の分布状態を分析・解明することにより復原・推定することが可能となると考えられます。

今回の講座は、こうした石器群の分布状態や住まいに関連した遺構を取り上げ、旧石器時代の住まいやムラの構成などに迫ってみようと企画しました。

講座の内容は、基調講演と７件の事例発表から構成されます。

まず基調講演では、「旧石器時代のムラと住まい」について、全国的な視野から研究の現状と課題についてご紹介していただきます。その後、県内の各時期を代表する遺跡を事例として取り上げ、実際に調査を担当された研究者より旧石器時代石器群の分布状態と遺構のあり方などについて発表していただきます。後半では、住まいに関係した注目される遺構を取り上げ、その立地や規模・遺物出土状況などの特徴と遺構の性格について発表していただきます。また、各発表については、それぞれ１名の方からコメントをいただきますが、単なる発表についての感想ではなく、できる限りこれまでの調査や研究に基づいた独自の見解を述べていただく予定です。

なお、各時期の呼称については、現在、研究者間においていろいろ論議されておりますが、ここでは旧来の代表的な狩猟具による呼称方法を踏襲することとし、ナイフ形石器文化期（①～③）、槍先形尖頭器文化期、細石刃文化期と区分しております。

最後に、この講座の開催にあたり、講演・発表・コメントをお願いした方々や共催者として会場を提供していただいた財団法人横浜市ふるさと歴史財団・横浜市歴史博物館に厚くお礼申しあげます。

2010年３月7日　　神奈川県考古学会

【基 調 講 演】

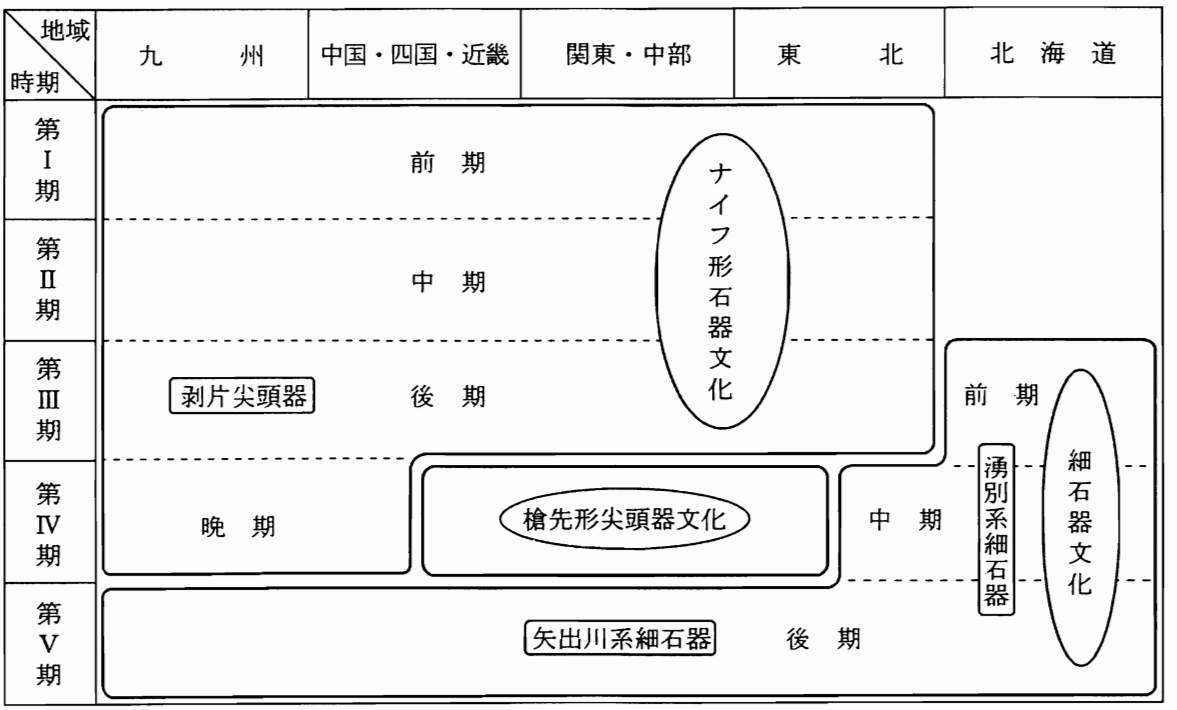
旧石器時代のムラと住まい

安 蒜　政 雄

Ⅰ　ムラと住まいの研究

日本列島の旧石器時代研究は、現在、石器の編年研究、遺跡の構造研究、方法と理論の研究、という三つの分野から進められている。第一の分野である石器の編年研究は、古さを測って石器の新旧関係を知り、その変遷と発展の諸段階および地域差を明らかにする目的をもつ。第二の分野は遺跡の構造研究で、遺跡から出土する石器の全て（石器群）を具体的に分析し、旧石器時代人の生活と社会の復原を目指している。第三の分野である方法と理論の研究は、旧石器時代研究の歩みを振り返りながら、石器の編年研究と遺跡の構造研究を統合して、日本列島の旧石器時代人類史を叙述するための、例えば黒耀石考古学（安蒜 2003･2009）など、確かな視座を模索している。

その石器の編年研究の成果にもとづいて、後期からはじまる日本列島の旧石器時代は、つぎのように大別される。古い方から順に、ナイフ形石器文化と槍先形尖頭器文化それに細石器文化、という三つの階梯である。ただし、この三つの文化階梯は、本州中央部の関東と中部を除くと、ほかの地域にはあてはまらない。なぜなら、北海道にはナイフ形石器文化がなく、槍先形尖頭器文化もまた北海道と九州にはないことによる。これは、日本列島内に地域性が生まれていた証拠でもある。



第１図　旧石器時代の文化と階梯

一方、ナイフ形石器文化は前期・中期・後期・晩期の四つの時期に、細石器文化は前期・中期・後期の三つの時期に、それぞれ区分される。そして、ナイフ形石器文化の後期・晩期と細石器文化の前期・中期が時間的に重なってくる。それらを考慮すると、日本列島の旧石器時代は、第Ⅰ期から第Ⅴ期までの五つの時期に分かれる。すなわち、日本旧石器時代には、三つの文化と五つの時期とが認められる（第１図）。

さて、ムラと住まいの研究は、遺跡の構造研究と一体化したかたちでおこなわれてきた。遺跡の構造研究は、1968年の埼玉県砂川遺跡Ａ地点の報告書から出発した。同書で、遺跡の構造を解き明かすために必要な、個体別資料分析法が示された（戸沢 1968）。ついで、1974年発刊の同遺跡Ｆ地点の報告書をとおして、その分析法にもとづく初の実践が試みられた（砂川遺跡調査団 1974）。

以後、遺跡の構造研究は、同じ原石から打ち割られたものどうしは接合により必ず過不足なく元の原石に戻るという、個体別資料の原理・原則を応用して進展した。つまり、遺跡から出土した石器類を原石の一個体ごとに分けて接合したとき、余れば搬入品で、足らないものは搬出品となる。この石器の搬出入品リストをもとにして、まず、遺跡の形成過程、遺跡間の時間連鎖と空間連鎖、集団の規模と構成などを知る手掛かりがえられるようになった。合わせて、移動生活の社会下でヒトとモノが動いた背景としての、ムラと住まいの実態を探る方向性が定められてきたのである。

Ⅱ　ムラの構えとイエの造り

１　ムラの構え

どの遺跡からも出土するブロックの一つ一つは、イエ跡と直結した遺構であった可能性がつよい。とすれば、各遺跡には、少なくとも数軒のイエが建ち並んでいたことになる。では、旧石器時代には、どんなかたちのムラが構えられていたのか。

1983年、誰もがすぐにそれとわかる旧石器時代のムラ構えが、群馬県の下触牛伏遺跡から掘り起こされた（群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986）。下触牛伏遺跡に同時に残された、直径約50メートルの円を描くようにして並んだ20余個所のブロックは、10内外のユニットに分かれると分析されている。１ブロックに５人程度の住人を想定すれば、100名をこえる大きなヒトの群れが広場を囲むようにしてイエを建ち巡らせていたことになる。そうした出土状況をみせる一連のブロック群を環状ブロック群と呼び（橋本 1989）、環状のムラという名がある（安蒜 1990）。

一方で、日本列島の旧石器時代には、環状のムラとは全く違ったムラも構えられていた。その一例を、東京都の野川流域で観察することができる。野川流域には、旧石器時代の全期間をとおして、約300個所にのぼる遺跡が残されている（下原 2006）。時期別にみると、概略、第Ⅰ期に40遺跡、第Ⅱ期が50遺跡、第Ⅲ期で110遺跡、第Ⅳ期が80遺跡、第Ⅴ期に20遺跡という内訳になる。最も遺跡分布密度のたかまった第Ⅲ期の野川流域には、一定の間隔をおいて時を同じくした遺跡が点々と連なる現象が生じていたと想定される。

そのような、川に沿って同時に存在した一連の遺跡のまとまりを、定時流域遺跡群という。定時流域遺跡群を構成する各遺跡には規模の大小がみられ、数軒から数十軒のイエのまとまりが、一つまた一つと河川の流域に並ぶ景観が浮かびあがる。こうした景観を川辺のムラと呼ぶ（安蒜前出）。いうまでもなく、定時流域遺跡群の全体が一つのムラの構えであり、個々の遺跡はそのムラの一部ということになる。

以上のように、環状のムラは、同じ場所に100名をこすヒトが集まっている。それは、大きなヒトの群れが一団となった姿ではなかったか。これに対して、川辺のムラは、大きなヒトの群れがいくつかに分かれ、それぞれが河川流域に数100メートルほどの間隔をおいて分散し、互いに別々の場所に居住した姿としてとらえられる。

2　イエの造り

屋外の地面よりも一段低く掘り下げた床面があり、屋内には地中にしっかり埋め固定した柱を立てるための柱穴が穿たれ、炉が設けられるなど、縄文時代の竪穴式住居跡と共通した床面設備を持ち合わせた旧石器時代の遺構を、住居状遺構といいならわしている。その住居状遺構は、神奈川県の田名向原遺跡例（相模原市教育委員会 2004）と群馬県の小暮東新山遺跡例（群馬県立畜産試験場遺跡調査会 1998）に代表される。

田名向原遺跡の住居状遺構には、中央に炉が２基あり、それを囲むように 12 個所の柱の穴があけられている。床面は地面よりも低く掘りくぼめられてはいないが、それにかわるかのようにして、径 10 メートルという広大な屋内と屋外との境目に置き石が巡らされている。また、小暮東新山遺跡の住居状遺構は、竪穴式の床面をもち７本の柱穴が発見され、広さは径３メートルと比較的小さい。ただし、炉はない。

両遺跡で発見された住居状遺構には、共通して、柱の穴が掘り込まれている。穴を掘って地中に固定された柱の存在からみて、組み立てと解体が容易な造りであったとは、とても考えられない。旧石器時代人は頻繁に移動する狩猟採集民であり、その狩人にむいた造りのイエであるとは到底いいがたい。この造りのイエは、移動にともない一定期間の空家状態に置かれたとしても、二度、三度と間隔をおいて住み直すこともできただろう。あるいは、再居住をみこして造られたイエの跡なのかもしれない。そうした意味で、田名向原遺跡と小暮東新山遺跡から発掘されたイエを、堅牢な造りのイエとする（安蒜 2007）。

ところで、いま、田名向原遺跡の住居状遺構から、置き石・柱穴・炉を取り除いてみよう。同様にして、小暮東新山遺跡の住居状遺構から、竪穴式床面・柱穴を取り去る。すると、他のどの遺跡からも発見されるブロックが残る。いいかえれば、田名向原・小暮東新山両遺跡の住居状遺構とは、ブロックがイエの屋内にあったことの一つの証しになるのではないか。

となると、したがって、日本列島の旧石器時代には、少なくとも、造りが異なる二種類のイエが

あったことになる。一つは、ブロックのみが発見される造りのイエ跡。もう一つが、ブロックに竪穴式床面・柱穴・炉・置き石などが付属する造りのイエ跡。こうした造りが違う二種類のイエの根本的な差は、どこにあったのか。ブロックのみのイエ跡は、柱の穴が掘り込まれていないことからみて、柱を立てて地中に固定するようなイエではなかった。この建築資材を地中に固定しない造りのイエは、組み立ても解体も容易であったに相違ない。簡便な造りのイエとする（安蒜前出)。

3　住まいの自立化

ところで、旧石器時代には、ブロックについで出土頻度が大きい遺構がある。加熱した石の余熱効果を利用して、焼く・煮る・蒸すの食物調理に用いられた設備と考えられている、礫群である。この礫群には、三つの文化と五つの時期をへる過程で、ブロックおよび炉との相関関係が認められる。

まず、ナイフ形石器文化の礫群には、二つの在り方を指摘できそうだ。一つは、ブロックの分布と礫群の分布とが重ならない傾向。これは、礫群がイエの屋外に置かれていた設備であったことを示している。第二は、ブロックの数と礫群の数とが一致しない点。これは、１個所のブロックが１基の礫群とは対応していないことを示す。

つぎの槍先形尖頭器文化になると、礫群の在り方に変化が生まれてくる。田名向原遺跡にも、その実際がみられる。田名向原遺跡からは、住居状遺構と隣り合わせて、さらに別の二つのブロックが発見されている。住居状遺構と同じ第Ｖ期に残された両ブロックは、礫群の分布と重なり合うという共通性をもつ。ブロックをイエ跡とみるとき、礫群が屋内にあったことになる。礫群の在り方は、さらに推移する。

細石器文化の礫群に目を向けてみる。細石器文化は、槍先形尖頭器文化よりも一時期遡って北海道にいち早くはじまり、槍先形尖頭器文化後の旧石器時代の終わりまでつづく。その北海道の柏台１遺跡から、礫群の消長にかかわる極めて重要な情報がえられる（北海道埋蔵文化財センター 1999)。柏台１遺跡には、「不定形剥片石器群」段階のブロック８個所と「細石刃石器群」段階のブロック７個所に分かれる、合わせて15個所のブロックがある。

全15ブロック中、13個所のブロックの中央には炉跡があり、残る一つのブロックにも炉跡があったと推定されている。一方、７個所のブロックと重なって礫群が分布し、そのどれもが不定形剥片石器群のブロックであった。なお、不定形剥片石器群には、炉跡も礫群もないブロックが一つある。細石刃石器群は、不定形剥片石器群よりも、相対的に年代が新しいという。

つまり、柏台１遺跡では、年代の新旧を問わず、１個所をのぞき、イエの屋内に炉があったことになる。しかも、より古い不定形剥片石器群のイエ８軒のうち７軒の屋内には、炉と礫群があるわけである。それに比べて、より新しい細石刃石器群のイエ７軒には、礫群がなく、炉だけがある。ここに、炉と一緒に用いられる中で、礫群が消失していく様子がよく表れている。関東平野部の槍

先形尖頭器文化をさかのぼる時期からおこる出来事であった。

以上のように、礫群には、まずナイフ形石器文化で屋外設備として存在し、つぎの槍先形尖頭器文化で屋内設備となり、やがて細石器文化では炉（跡）と併用されながら姿を消していく、という経緯がとらえられそうだ。神奈川県下の小保戸遺跡（栗原ほか 2009）やサザランケ遺跡（財団法人かながわ考古学財団 1996）も同様な経過をたどっている。礫群の消失には、炉跡の存在が大きく関与しているようにも思われる。そればかりではない。

ナイフ形石器文化の礫群は、ブロックの分布と重ならないうえ、数もブロックと一致しない。これは、礫群がイエの屋外設備であると同時に、各イエで共用され共有されていた事実を物語っている。これに対し、槍先形尖頭器文化の礫群は、ブロックの分布と重なりはじめる。この時点で礫群は、イエの屋内施設となるとともに、個々のイエの専用・専有設備ともなってくる。さらに、細石器文化の礫群も、ブロックと重なる。とはいえ、最初は、炉と組み合わせて用いられながら、次第に消失してしまう。イエの屋内に置かれる設備となった礫群が、炉と合わせ用いられながら、段階的に炉にとってかわられたかのようである。

そうした礫群の消長には、個々のイエが次第に専用の屋内設備をもちはじめ、互いに均質ながらも、自立性をつよめていく過程がみてとれる。そうした意味で、細石器文化の住まいを自立したイエと意義づけることもできそうだ（安蒜 2007）。

Ⅲ　ムラと住まい研究の視点

1　ムラと住まいの変遷

環状のムラは、日本列島の旧石器時代で一番古い、第Ⅰ期に営まれた。第Ⅰ期は、いうまでもなく、日本列島にヒトが姿を現わした時期に当たる。したがって、環状のムラは、日本最古のムラの姿でもある。現在までに発見された環状ブロック群は、約100個所にのぼる（橋本 2007）。だが、当該時期の周辺地域さらには世界各地をみわたしてみても、環状のムラが構えられた痕跡はどこにもない。環状のムラは、日本列島で生まれた独特のムラ構えであった。

第Ⅰ期に出現した環状のムラ構えは、しかし、第Ⅱ期には、姿かたちもなく完全に消え去る。それにかわり、遺跡が徐々に諸河川の流域に群在しはじめ、第Ⅲ期になると、環状のムラとは全く違った構えの、川辺のムラが登場してくる。こうして、大きなヒトの群れは、第Ⅲ期を機にして、集合して居住する環状のムラ構えから、分散して居住する川辺のムラ構えと、住まいの方式を改めた。

その川辺のムラは、いくどとなく川筋をかえながら構えつづけられていたものと思われる。川辺のムラは、日本列島の各地ばかりか、分析された事例はまだないが、周辺地域を含めた後期旧石器時代の基本的なムラの構えであったようだ。この川辺のムラは、日本列島では、第Ⅲ期以降も引き継がれ、旧石器時代の終末まで名残りをとどめる。河川の流域に２～３軒の自立したイエが並ぶ、細石器文化のムラの景観は、縄文時代のムラ構えと重なり合ってくる。その細石器文化のムラの構

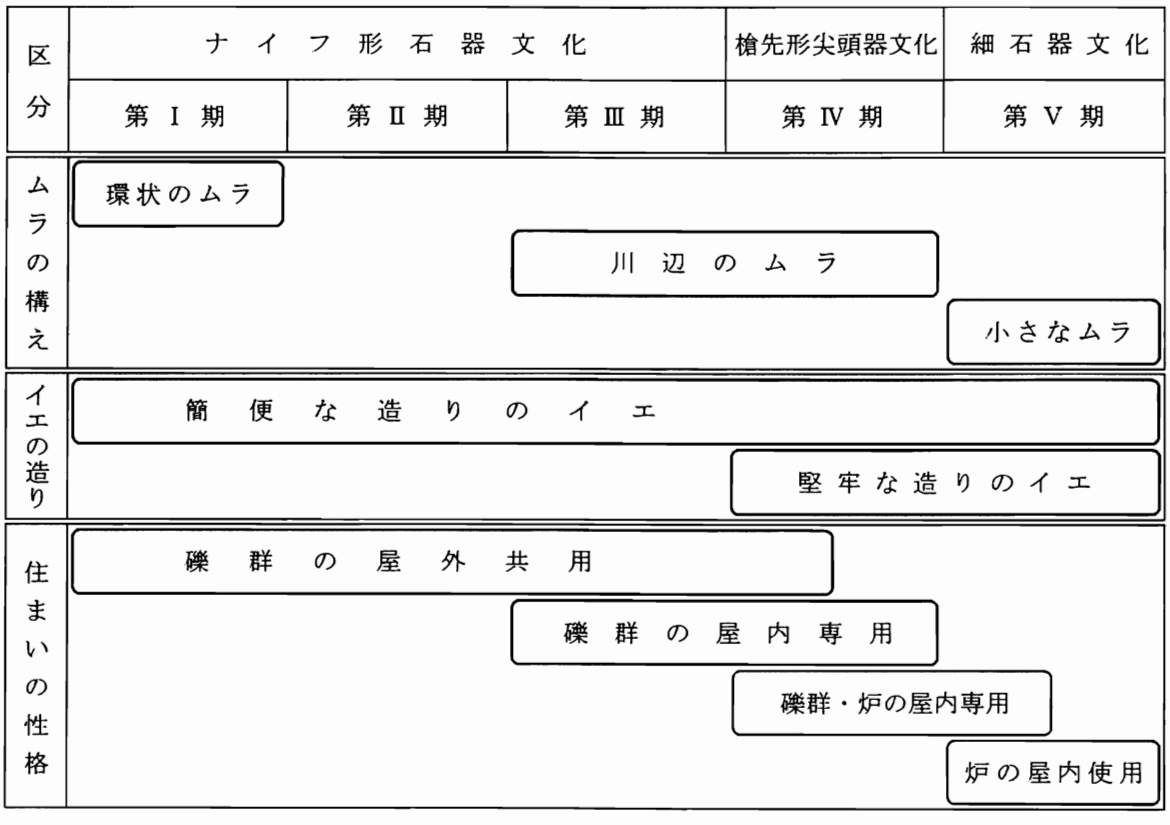
えを、小さなムラとする。

そして、環状のムラと川辺のムラは、簡便な造りのイエで構成されていた。しかし、やがて槍先形尖頭器文化になると、田名向原遺跡や小暮東新山遺跡で知られる、堅牢な造りのイエが存在しはじめる。その背景には、狩人兼石工集団が狩人集団と石工集団（石器製作者集団）とに分かれたという経緯があった（安蒜 1997）。こうして、日本列島には、簡便な造りと堅牢な造りという二種類のイエが存在しだすのである。それと時を合わせて、住まいは自立化に向かった。

2　ムラの時空連鎖と研究の課題

日本列島の旧石器時代には、少なくとも、環状のムラと川辺のムラ、それに小さなムラとに呼び分けられる、三種類のムラ構えがあった。また、イエには、簡便な造りと堅牢な造りという二種類の造りが違うイエが存在した。確かに、その三つのムラ構えと二つのイエ造りの変遷をとおして、住まいの歴史をたどることができる（第２図）。それはまた、住まいが自立化する過程でもあった。だが、そうした視点からのムラと住まい研究は、一面でなお、静止画的な歴史復原の段階にとどまっているといわざるをえない。

狩猟採集民であった旧石器時代人は、移動を繰り返す生活を営んでいた。個々の遺跡も、そうした経緯で残された居住地である。つまり、掘り出される遺跡のどれもが、移動元の遺跡であり移動先の遺跡という、ヒトの移り住みの連なりで結びついている（遺跡とムラの時間連鎖）。と同時に、



第２図　ムラと住まいの変遷

居住地は、互いにヒトの行き来や入れ替わりでつながってもいる（遺跡とムラの空間連鎖）。

すなわち、遺跡間で石器が接合するのは、移り住んだり行き来し入れ替わったりしたヒトが、原石や石器を携行し持ち運んでいた証拠である（安蒜 2006）。そうした、旧石器時代のヒトとモノの軌跡は、どの遺跡のブロックにも刻まれている。これを、正しく分析できたとき、より動態的なムラと住まい研究が可能となるだろう。だが、はたして、われわれは、旧石器時代の地層中に埋もれている遺跡やブロックの一つ一つを分離し確実に抽出できているのだろうか。

例えば、下原・富士見町遺跡には、発掘調査の時点で13遺跡の重なりが認められた（明治大学校地内遺跡調査団 2009）。したがって、本来ならば、13の石器群が地層を別々にしているはずである。だが、それら石器群の垂直分布図をみると、上下する地層の石器が接合したり、間に別の地層をはさんで石器が接合するなどする。こうした接合からは、ヒトの移り住みや行き来と入れ替わりを説明できないばかりか、同じ地層中のブロック群はおろか、ブロックの一つ一つを個別に取り出すことなどおぼつかない。

地層を区分する線引きが不適切なのか、それとも石器群が地層をこえて上下に動き混ざり合うのか。遺跡の構造研究の根底を支える、石器群の個体別資料化や石器の接合も、いずれかを判断する決め手にはならない。ちなみに、一個所でなん点かの原石を一度に打ち割り、行為の全てがそのまま遺跡に残されていたとする。当然、発掘された全石器は接合し、一連の原石が元の状態に戻る。そうだとしても、いまの水準の分析では、それら原石がみな同時に打ち割られた事実を証明する術はない。いわんや、打ち割られた原石の順番を知る手立てもない。現時点では、一群の個体別資料が共伴するか否かを確かめるための、確固とした方法論をまだ持ち合わせてはいないのである。

いうまでもなく、一遺跡あるいは個々のブロックは、ムラと住まいの復原はもとより、旧石器時代の研究にとって、最小かつ最も基本となる資料である。しかし、現実には、その個々のブロックを見極めることすら大変難しい状況にある。そうした意味で、ムラと住まい研究は、ある種の危うさと隣り合わせてもいる。この現実を、しっかりと見据え認識しなければならない。

最後に、岩宿遺跡以来の調査は、遺物の平面分布と地層断面の垂直観察という、いわば二次元発掘方式にのっとっておこなわれてきた。そして、旧石器時代の研究にかかわるだれもが、みな等しく精緻な遺物のドットマップと地層の柱状図を共有することができた。だが、もはや、それのみでは、ブロックの抽出と遺跡の成り立ちの解明はかなわない。ブロックの立体的な分析を可能とする、遺跡の三次元発掘法の新たな開発が急務である。

参考文献

安蒜政雄　1990「先土器時代人の生活空間－先土器時代のムラ－」『日本村落史講座』2　pp. 3-22　雄山閣

安蒜政雄　1997「旧石器時代の集団－南関東の移動生業集団と石器製作者集団－」『駿台史学』100　pp. 147-172　駿台史学会

安蒜政雄　2003「黒耀石と考古学－黒耀石考古学の成り立ち－」『駿台史学』117　pp. 175-183　駿台史学会

安蒜政雄　2006「旧石器時代の集落構成と遺跡の連鎖－環状ブロック群研究の一視点－」『旧石器研究』2　pp.69-80　日本旧石器学会
安蒜政雄　2007「旧石器時代の住まい」『住まいの考古学』　pp.5-43　学生社
安蒜政雄　2009「環日本海旧石器文化回廊とオブシディアン・ロード」『駿台史学』135　pp.147-168　駿台史学会
栗原伸好・鳥羽康一・木村吉行　2009「小保戸遺跡」『石器文化研究』15　pp.53-55　石器文化研究会
群馬県埋蔵文化財調査事業団　1986『下触牛伏遺跡』
群馬県立畜産試験場遺跡調査会　1998『小暮東新山遺跡－旧石器時代住居跡の調査－』
財団法人かながわ考古学財団　1996『宮ヶ瀬遺跡群Ⅵ　サザランケ(No.12)遺跡－宮ヶ瀬ダム建設にともなう発掘調査－』
相模原市教育委員会　2004『田名向原遺跡Ⅱ－史跡田名向原遺跡保存整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告及び研究調査報告』　相模原市埋蔵文化財調査報告31
下原裕司　2006「野川流域の旧石器時代遺跡の分布と変遷」『「野川流域の旧石器時代フォーラム」講演会・公開シンポジウム資料集』　pp.67-70　調布市教育委員会・三鷹市教育委員会・明治大学校地内遺跡調査団
砂川遺跡調査団　1974『埼玉県所沢市砂川先土器時代遺跡－第二次調査の記録－』　所沢市教育委員会
戸沢充則　1968「埼玉県砂川遺跡の石器文化」『考古学集刊』4-1　pp.1-42　東京考古学会
橋本勝雄　1989「AT降灰以前における特殊な遺物分布の様相」『考古学ジャーナル』309　pp.25-32　ニューサイエンス社
橋本勝雄　2007「環状ユニット(ブロック群)の特質とその意義」『日本考古学協会第73回総会 研究発表要旨』　pp.94･95　日本考古学協会
北海道埋蔵文化財センター　1999『千歳市柏台1遺跡－一般国道337号新千歳空港関連工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書』北海道埋蔵文化財センター調査報告書138
明治大学校地内遺跡調査団　2009『下原・富士見町遺跡の調査－明治大学付属明治高等学校・明治中学校の新校舎建設に伴う発掘調査の概要－』

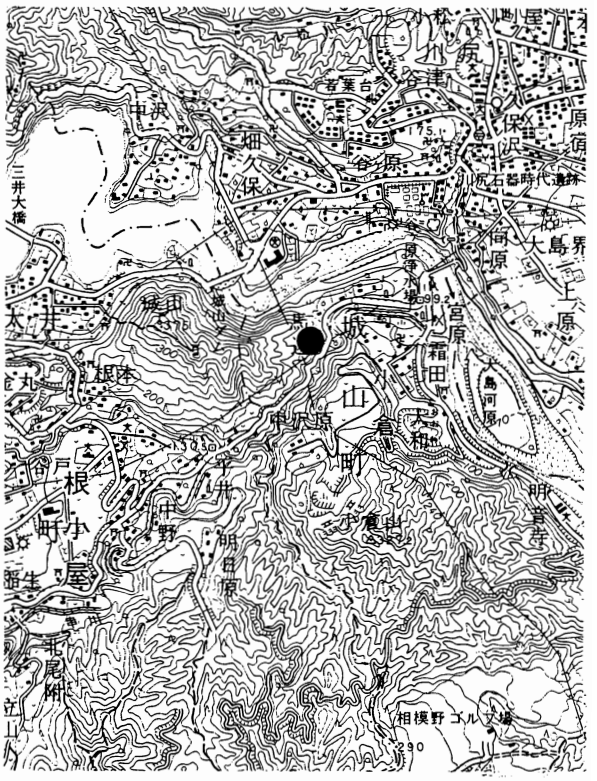
ナイフ形石器文化期のムラ ①

－環状ブロック群と石斧の生産－

畠中　俊明

１　はじめに

神奈川県では、1960年代後半から大規模な開発に伴う発掘調査の増加により旧石器時代の遺跡数は増え続け、旧石器時代研究における全国でも屈指のフィールドとなった。相模野台地は富士山を供給源とする関東ローム層の良好な堆積により、石器群の層位的な把握が容易であることから、編年研究でも全国的な指針となってきた。ところがその反面、あまりにもローム層の堆積が厚いため、古い時代の石器群を調査するには、より深く掘る必要があり、斧を伴う相模野第Ⅰ期やⅡ期前半の石器群となるとその数は激減する。

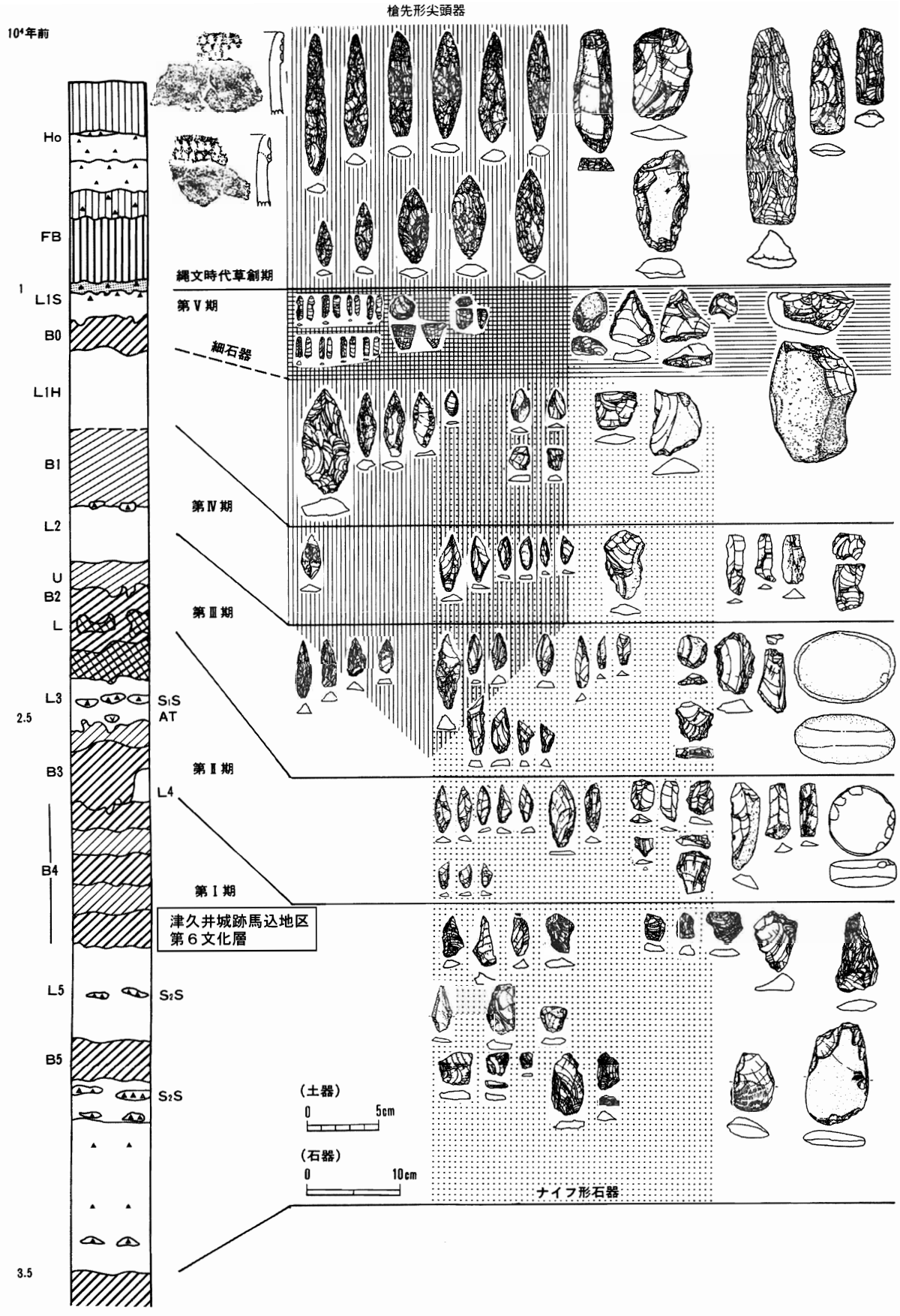


第１図　遺跡位置図（1/50,000）

1980年代後半の群馬県下触牛伏遺跡の調査から、当概期の石器群は平面分布において環状ブロック群を呈するという特徴が明らかとなり、その数は全国でも２００例にも及ぶという。特に近年、近隣の千葉県や東京都でもその数が増加している。しかしながら神奈川県内では、前述した理由からかこれまで環状ブロック群を呈する石器群の報告例はなく、今回の調査によって初めて当概期の環状ブロック群が確認された。本石器群からは16（12）点もの斧状石器が出土し、石斧製作の跡を彷彿とさせる接合資料等も得られた。ここでは、津久井城跡馬込地区の調査成果をもとに環状ブロック群の様相を検討してみたい。

２　遺跡概要

津久井城跡馬込地区は相模原市城山町小倉字馬込135-1外に所在し、中世戦国期の津久井城が築かれた城山（375m）の東端に位置する。本遺跡の調査では、戦国期と考えられる空堀や土塁状の高まりを伴った曲輪が確認されており、近世の大規模な造成の跡なども発見された。縄文時代～弥生時代では、陥穴状の土坑が多数検出され、良好な狩り場であったことが想像される。



第２図　相模野編年表（綾瀬市史一部改変）

旧石器時代の調査では、粗密の差はあるもののＢ０層～Ｂ４層まで、７枚の文化層が発見された。旧石器時代の石器は重層的に出土しているものの、ＡＴ下位のＢ４層相当出土の石器が量・質とも圧倒的に多い。Ｂ４層相当の石器群では、台形様石器、基部加工ナイフ形石器、打製石斧や局部磨製石斧が出土している。神奈川県内において、これらの石器群が出土した例は少なく、綾瀬市吉岡遺跡群や大和市大和配水池遺跡、藤沢市大庭根下遺跡や№399遺跡など数えるほどであり、今回の発見は質・量とも県内では他に類を見ない。

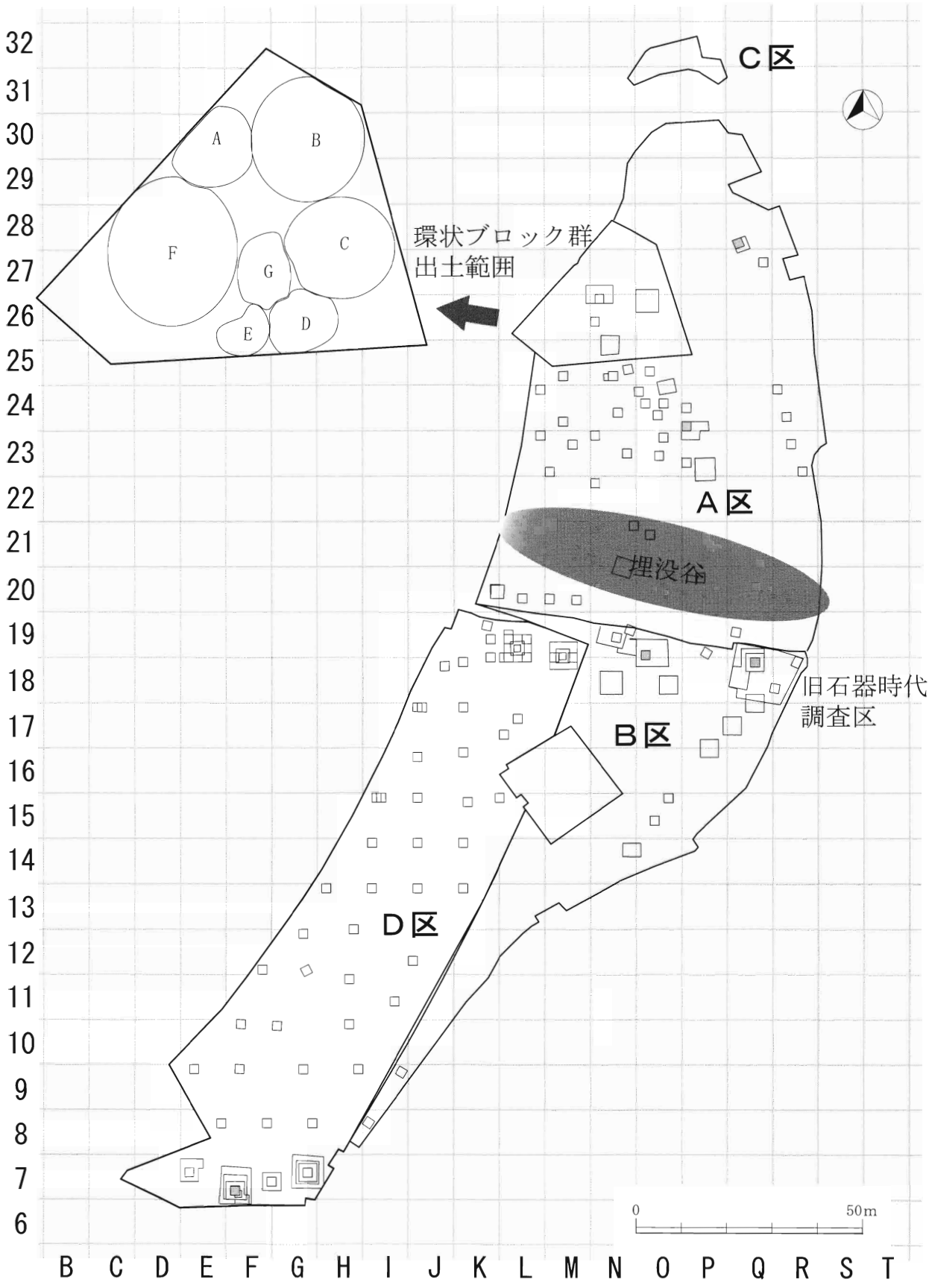
本遺跡の東側には串川が流れ、深い谷が刻まれており、谷を挟んだ対岸にはＢ１層中から環状礫群が発見され話題となった、小保戸遺跡が直線でおよそ300ｍの距離を隔てて存在する。津久井４町（平成18年度に相模原市に合併）は、これまで旧石器時代の遺跡が稀薄な地域であったが、近年実施された津久井広域道路やさがみ縦貫道などの大規模な建設に伴う発掘調査から、旧石器時代の遺跡数は増加しつつあり、今後新たな遺跡の発見も期待される。

３　遺跡周辺の地理的環境

本遺跡は、地形的には小仏・中津山地から続く城山の東縁部に位置し、地形面では月夜野面に相当するという。遺跡の東には相模平野が広がり、相模川によって形成された河岸段丘が続く。最も古い第６文化層の石器群が出土した標高は145ｍ前後で、遺跡の東を流れる串川の河床との比高差はおよそ50ｍを測る。現在の相模川は、遺跡の北東約800ｍの辺りで回り込むようにして南下するが、第６文化層の石器群が残された当時の流路は、今よりも本遺跡の近くを流れ、串川と合流して南下していたと考えられる。当概期の石器群は、相模川と串川の合流地点付近に形成されていたものと推察される。

調査区の北側Ａ区のＬ～Ｏ－２５～２８グリッド付近は、戦国時代と考えられる曲輪の構築により、ローム層の上部１～1.5m程が削平されていた。石器の大半は、このエリアから出土しており、その９割以上はＡＴ降灰以前の土層中から出土した。ＡＴ降灰以前のローム層の堆積は、極めて不安定であり、縦方向に小規模な断層が多数見られる。環状ブロック群が発見された平場の土層堆積の観察から、現在では北側に傾く地形も、ＡＴ降灰前後の頃までは、南側方向に緩やかに傾斜している様子が観察できた。Ａ区の南側Ｋ～Ｒ―19～21グリッド列付近からは、縄文時代に埋まったと思われる埋没谷が発見され、恐らく旧石器時代は沢であったと思われる。

段丘面形成直後の馬込地区周辺は不安定な状態が続き、崖崩れを繰り返していた様子が窺える。そのことは、大量の自然礫が石器群に伴って流れ込んでおり、石器群が形成される以前の地層には数十センチにも及ぶ礫層が堆積していることからも明らかである。その後、ある程度ローム層の堆積が一端安定した後に第６文化層の石器群が残されたと考えられる。石器群の垂直分布では、およそ１．５ｍの幅で出土しており、相模野基本層序に対比して概ねＢ４層相当の中位付近にピークがみられる。

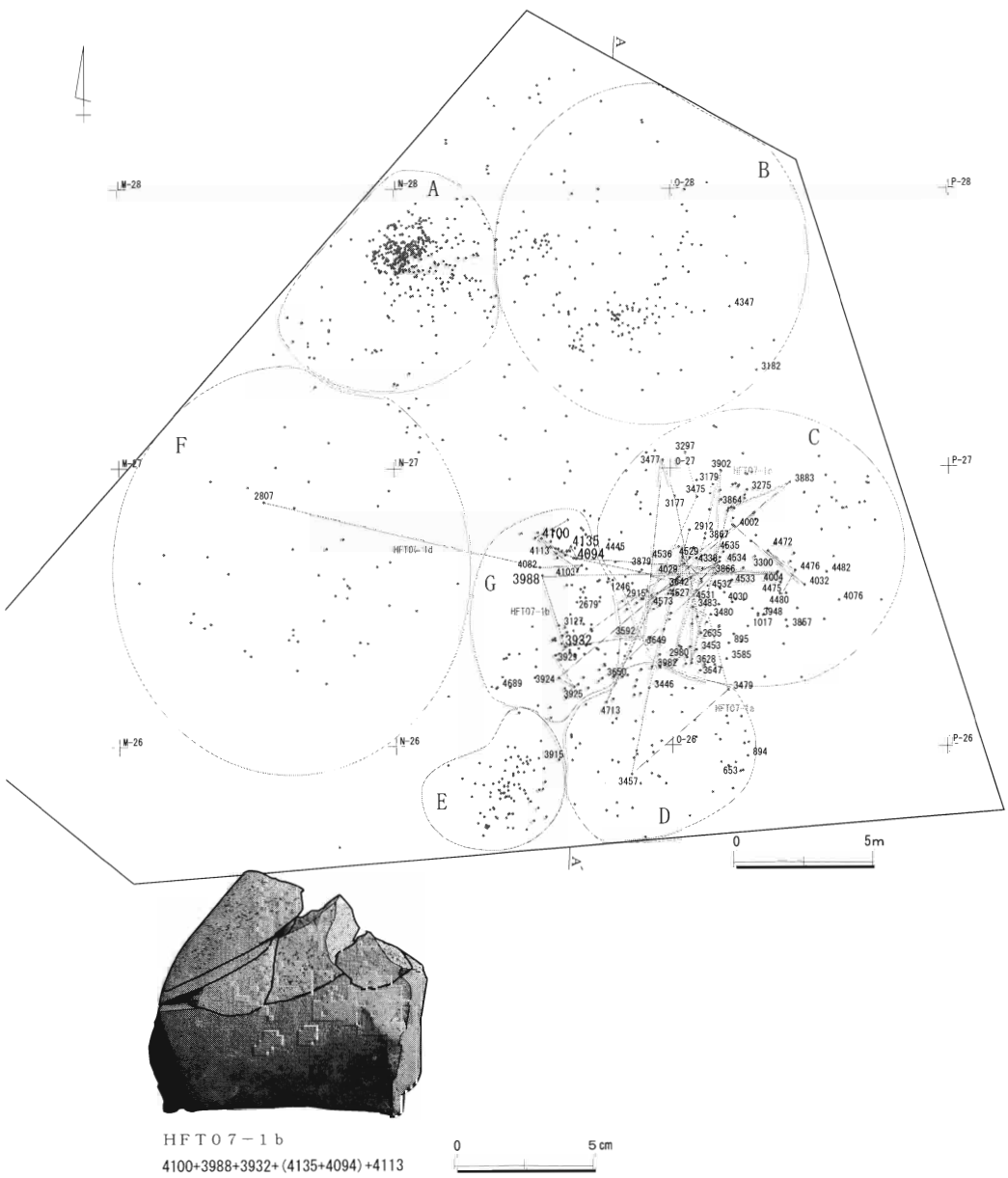


第３図　旧石器時代調査区配置図

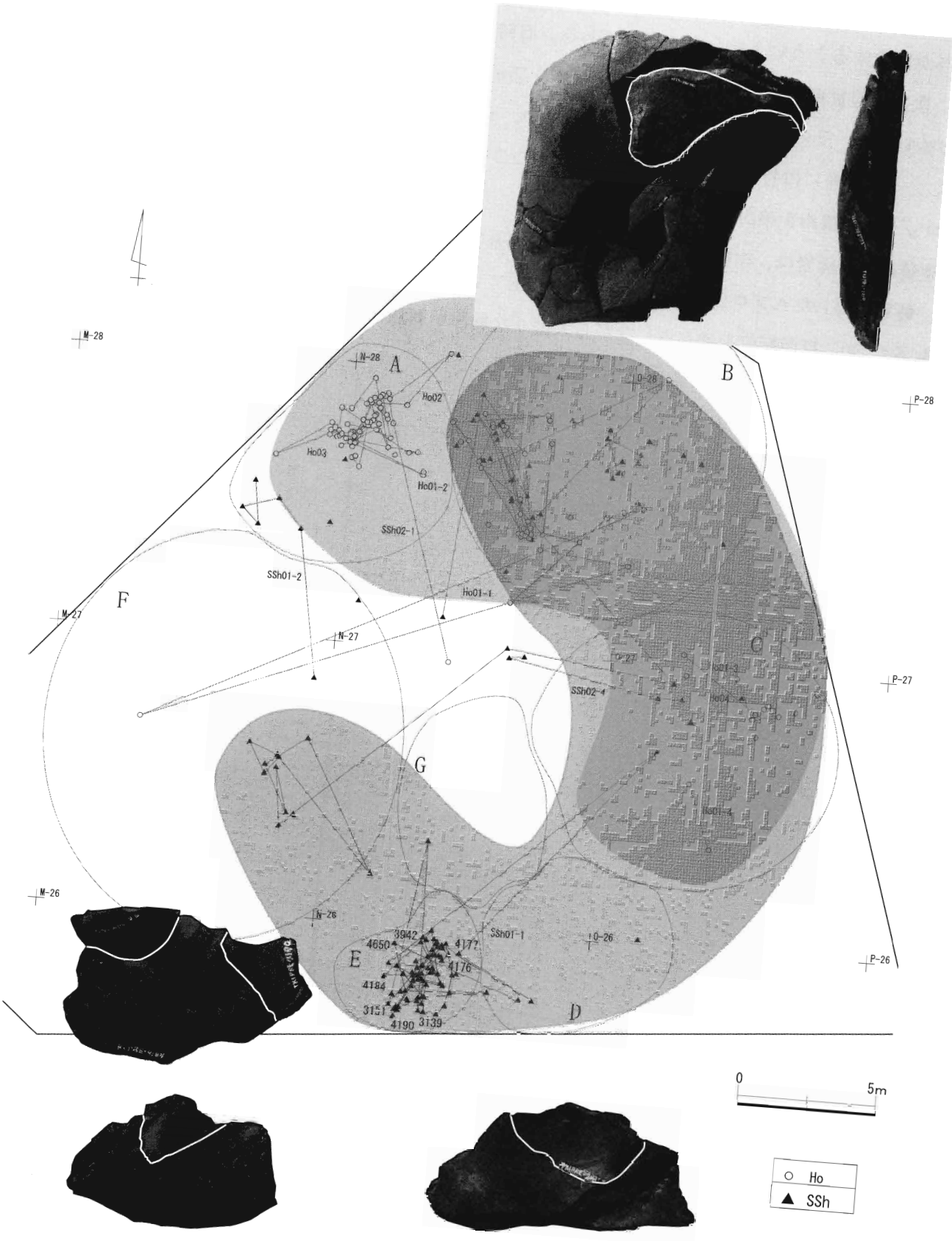
4　ブロック群の検討

環状ブロック群が形成されているＡ区の第６文化層からは1357点の石器が出土しており、実に約62％が接合するとういう接合率の高さである。石材別では891点、約65％が硬質細粒凝灰岩製である。次いで珪質頁岩製が147点、約11％、ホルンフェルス製が127点、約９％、黒曜石製が48点、約3.5％であり、その他の石材は30点にも満たない。石器石材は、石器製作工程や器種決定に深く関与し、その分布には特徴的な偏りがみられた。ここでは、主な石材の分布や接合関係などから環状ブロック群の様相を検討してみたい。

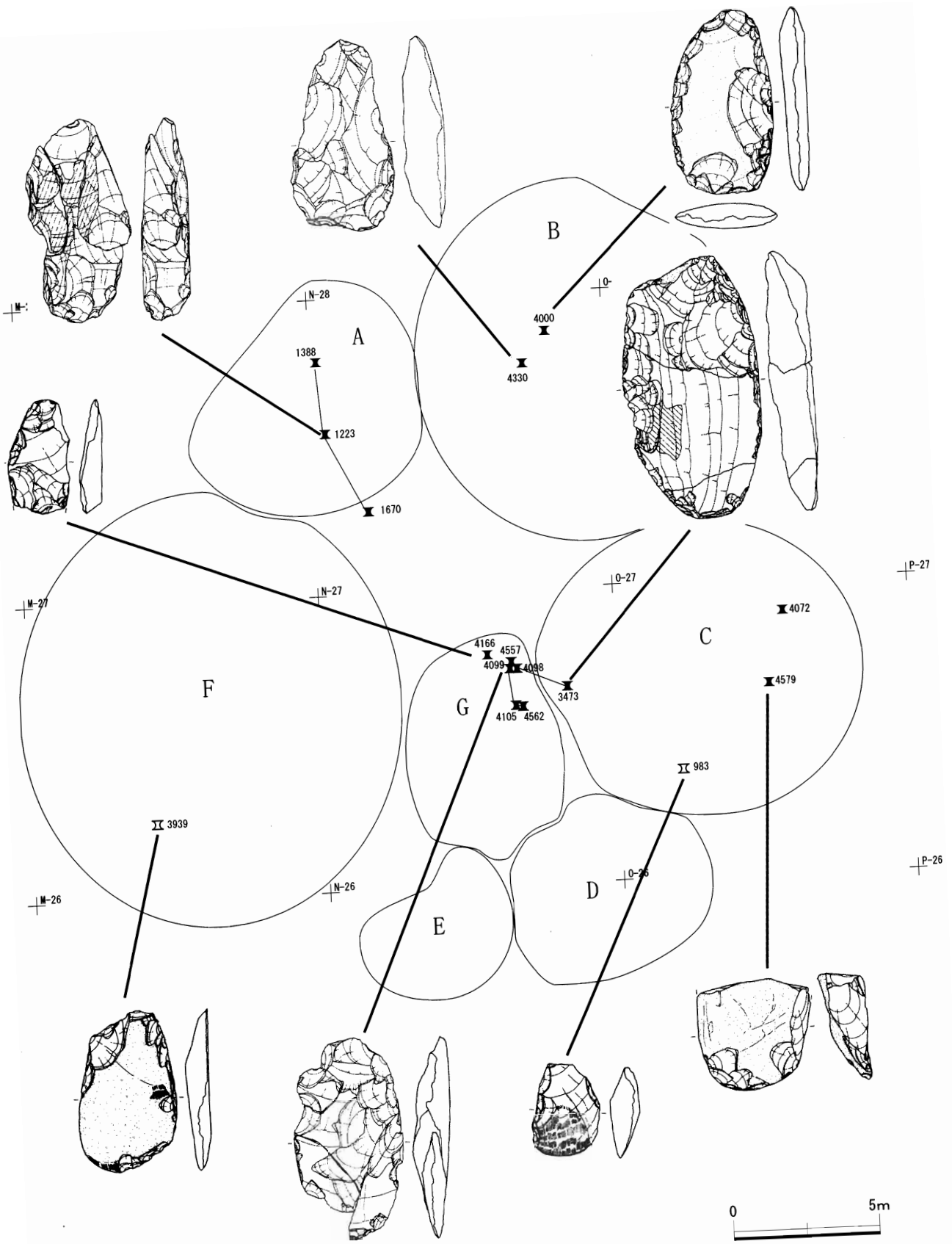
硬質細粒凝灰岩は、相模川に多くみられる在地系の石材である。ブロック群の各ブロックに分布し、最も充実したＡブロックから最も多く出土している。Ａブロックでは、礫にまで復元できる資料も多く、90°打面転位を繰り返しながら大振りな剥片が剥離される資料が目立つ(HFT01・HFT05)。



第４図　硬質細粒凝灰岩とHFT07-1b分布状況



第５図　ホルンフェルスと珪質頁岩分布状況

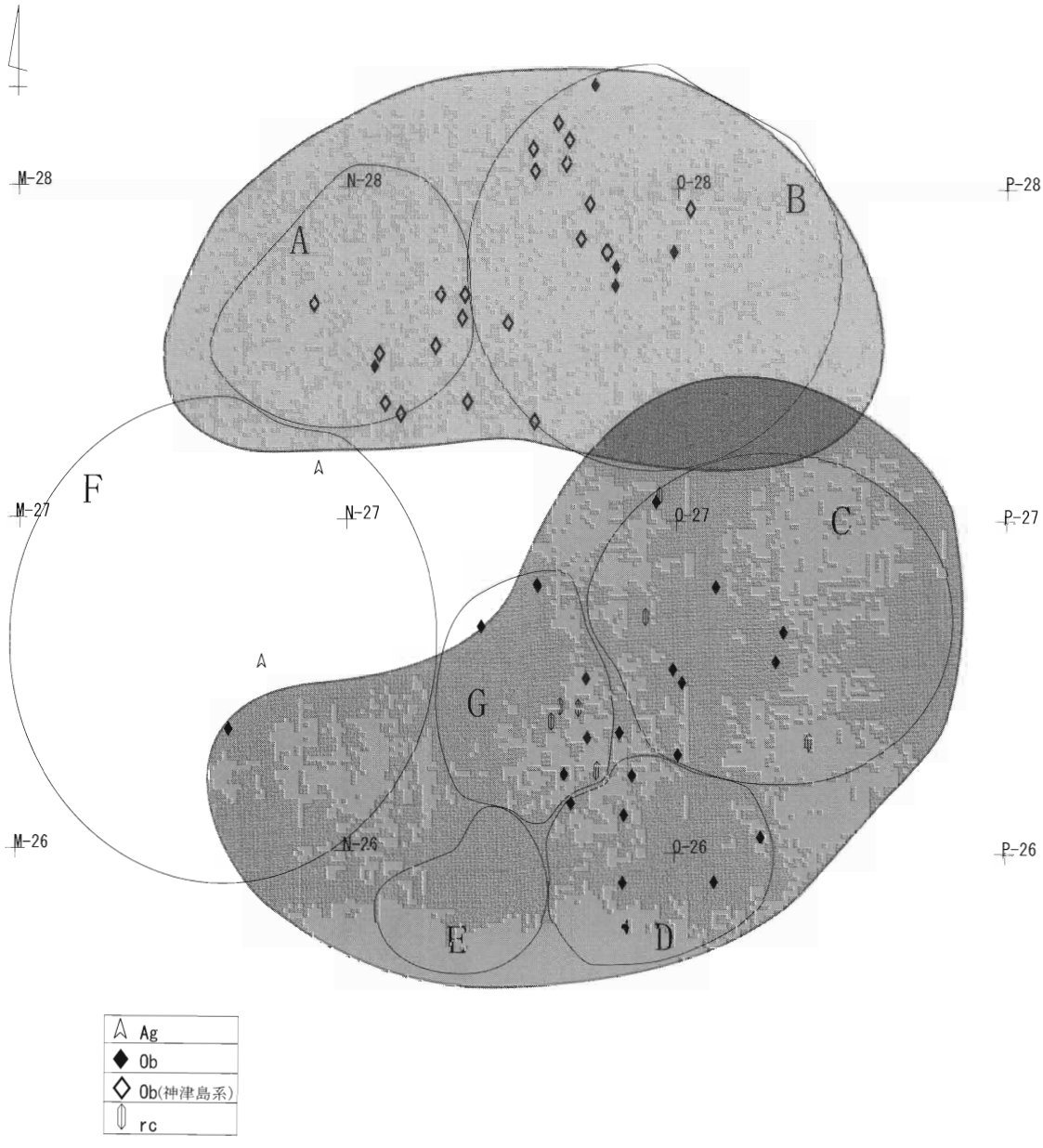

A
B
C
D
E
F
G
N-28
O-
M-27
N-27
O-27
P-27
M-26
N-26
O-26
P-26
1388
1223
1670
4000
4330
4072
4579
4166
4557
4099
4098
4105
4562
3473
983
3939
0
5m

第６図　石斧分布状況

Ｂブロックでは、両設打面から連続的に縦長剥片を剥離する資料がみられる（HFT06）。Ｃブロックから Ｇブロックでは、大型の礫を分割し、頻繁な打面転位を繰り返して剥片剥離するものや分厚い剥片を素材とし、その腹面側から小形幾何形の剥片を剥離するものなど一母岩に複数の剥片剥離技法がみられる資料が存在する（HFT07）。このように硬質細粒凝灰岩は、広範囲に均質に分布するも、各ブロックにおいて剥片剥離技術に差異が見られる。

石器石材分布の偏りが最も顕著なのは、Ａ・Ｂブロックのホルンフェルスとｅブロックの珪質頁岩（ＳＳｈ０１）の偏在である。

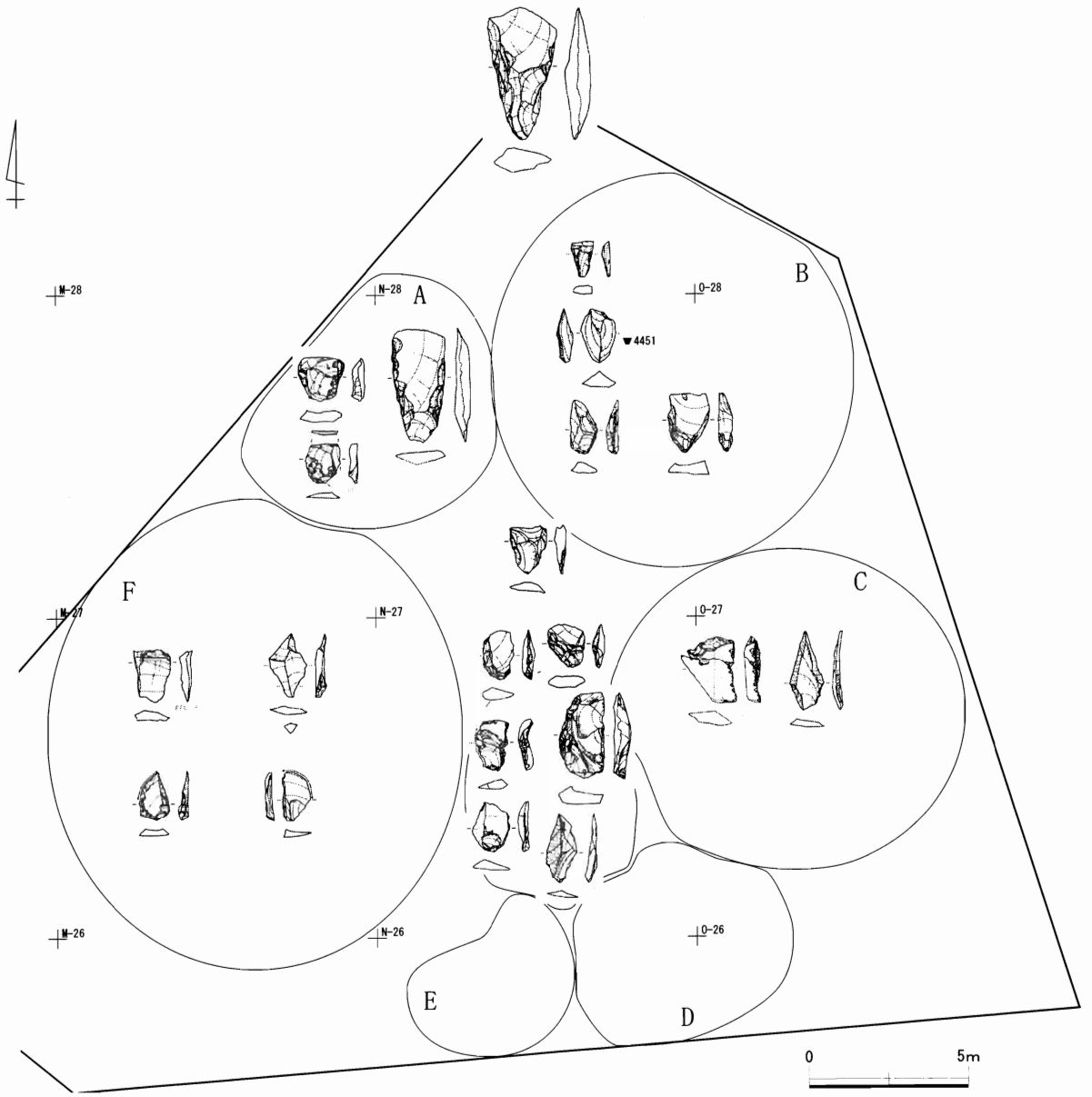
ホルンフェルスのＨｏ０１－１はＢブロック、Ｈｏ０２及び０３はＡブロックを中心に接合し、密集する。一方珪質頁岩ではＳＳｈ０１とした資料が、Ｅブロックを中心に実に64点も接合している。Ｅブロックでは、珪質頁岩とチャートが密集しており、量的に明らかに突出して出土している



第７図　石器石材分布（遠隔地石材）

が、ホルンフェルスは皆無である。ホルンフェルスは、相模川にて入手可能な在地系の石材でありながら、硬質細粒凝灰岩とは異なり、やや偏った分布が見られる。その分布は北側Ａ・Ｂブロックに集中し、南のＤ・Ｅブロックからは、ほとんど出土していない。一方、珪質頁岩は、ＳＳｈ０２とした資料はＢブロックでホルンフェルスと共存するものの、ＥブロックのＳＳｈ０１は南に偏り、ホルンフェルスとは全く対局に分布している。両者の剥片剥離工程は全く異なり、それぞれがあたかも場所を違えて異なる機能のブロックを形成しているように見える。

ホルンフェルスは、その大半が石斧製作の際に剥離された薄手の剥片類であり、珪質頁岩は、やや厚手で小形なものが目立つ。ところで、遺跡内における石斧類の分布をみると、Ｅ・Ｄブロックには存在しないものの、その他のブロックではほぼ均等に分布し、中央のＧブロックに欠損品も含め、集中する傾向が読みとれる。



第８図　ナイフ形石器・台形様石器の分布状況

黒曜石は、出土点数が48点と少なく、本遺跡内で明確な剥片剥離工程を復元できる資料は無いが、その分布に興味深い特徴がみられた。黒曜石は、Ｅブロックを除く全てのブロックから出土した。これらの黒曜石の産地同定分析を実施した結果、その分布は見事に北と南に分かれた。北側のＡＢブロックでは、神津島の恩馳島系が占め、南のＣ・Ｄ・Ｇブロックでは、霧ヶ峰や和田峠といった信州産の黒曜石が分布していた。また、所謂遠隔地系の石材では、本遺跡内においてほとんど剥片剥離作業の痕跡は認められず、接合資料も少なく、製品の状態で搬入される資料が目立った。その多くは、ナイフ形石器や台形様石器といった狩猟具である。ナイフ形石器や台形様石器は、Ｅ・Ｄブロックを除く全てのブロックでみられ、Ｇブロックでは石斧同様、数量的にやや突出した状況が看取された。

５　ま と め

これまで、主要な石材と器種の環状ブロック群内における分布状況を通して、その特徴を捉えてみた。それらの検討結果を踏まえて、本遺跡における環状ブロック群が、どのような性格の石器群であるのか考察してみたい。

まず、環状ブロック群内の60％以上にも及ぶ接合率の高さから、本ブロック群の存続期間は、恐らくさほど長くはないと思われる。それは、個々の母岩においてほぼ最初の礫にまで復元できる資料が多く、ブロック内にて大半が消費し尽くされている状況からも窺える。第二に、ホルンフェルスや黒曜石の分布にみられるように、南北にて対峙する分布状況が看取される。それはあたかも異なる二集団がそれぞれ南北に占有し、共存する様子を想定し得る。第三にＥブロックに見られるように、ＳＳｈ０１といった特定石材がほぼ一括消費されている。ＡブロックとＥブロックは接合率が78％と突出しており、本ブロック内で一気に石材消費された状況が想像できる。これらのブロックは、接合する剥片類の数は多いが、製品はそれほど多くない。一方、中央のＧブロックは、一括消費される資料はほとんど見られないものの、石材種はバラエティに富み、石斧やナイフ形石器などの製品も集中する様子が窺える。こうした状況証拠を繋ぎ合わせた結果、本ブロック群は、異集団が、それほど長くはないある一定期間共存し、分業して石器制作を行った作業空間を反映しているものと推察される。

本稿の執筆に際し、鈴木次郎氏をはじめ、旧石器プロジェクトの方々には、多大なるご協力を賜った。末筆ながら心より感謝申し上げる次第である。

参考・引用文献

米澤　宏　1981　「相模川中流域・道志川流域の河岸段丘」　関東の四紀８

橋本勝雄　1993　「環状ユニット（環状ブロック群）の全国分布とその意義」環状ブロック群-岩宿時代の集落の実像にせまる-　第１回　岩宿フォーラム／シンポジウム

矢島國雄　1996　「第２章　先土器時代」　綾瀬市史９

小菅将夫　2006　「赤城山麓の三万年前のムラ-下触牛伏遺跡-」

ナイフ形石器文化期のムラ ②

－最寒冷期における活発な礫群活動－

諏訪間　順・中村喜代重

１　は じ め に

相模野台地を中心とする神奈川県内の旧石器時代石器群は、段階Ｉから段階Ｘまでに編年的に区分されている(諏訪間1988)。年代的には、およそ3.5万年前から1.5万年前の段階Ｘまでの2万年間に相当する。これらの石器群は、すべて後期旧石器時代に相当し、地球規模の環境変動を示す酸素同位体ステージ3の後半からステージ2に位置する。ステージ3と2の境界は、2.8万年前に降灰したＡＴ火山灰を目安とし前後に区分され、ステージ3はやや温暖な気候、ステージ2は寒冷な気候と考えられている。

神奈川県内の旧石器時代を通史的に見ると､時期によって遺跡の数や規模に増減が認められるが、このうち遺跡の数や規模が増大する時期は､Ｂ２層に出土層位を持つ相模野段階Ｖ石器群である(小池2001)。この時期の特徴は、石器分布の広がりとともに焼礫が集中する「礫群」がどの遺跡でも普遍的に確認されるようになることである。この時期の遺跡数や遺跡内での石器ブロックの数や規模の増加、礫群の普遍化・増加などは、石器群の変化に加え、遺跡構造の変化として捉えることが可能であろう。

さて、Ｂ２層の堆積した時期はステージ２の前半期に相当し、後期旧石器時代の中でも最も寒冷な時代と考えられている。活発な礫群を用いた活動や暮らしはどのようなものであったのか、相模野段階Ｖ石器群を代表する柏ヶ谷長ヲサ遺跡Ｂ２層出土の石器群と礫群の分布から考えてみよう。

２　柏ヶ谷長ヲサ遺跡Ｂ２層出土石器群

柏ヶ谷長ヲサ遺跡は、相鉄線かしわ台駅前の目久尻川が大きく蛇行し、北に張り出した台地の先端部に位置する(第１・２図)。発掘調査は、区画整理事業に伴い1981年～1982年にかけて行われた(堤編1997)。

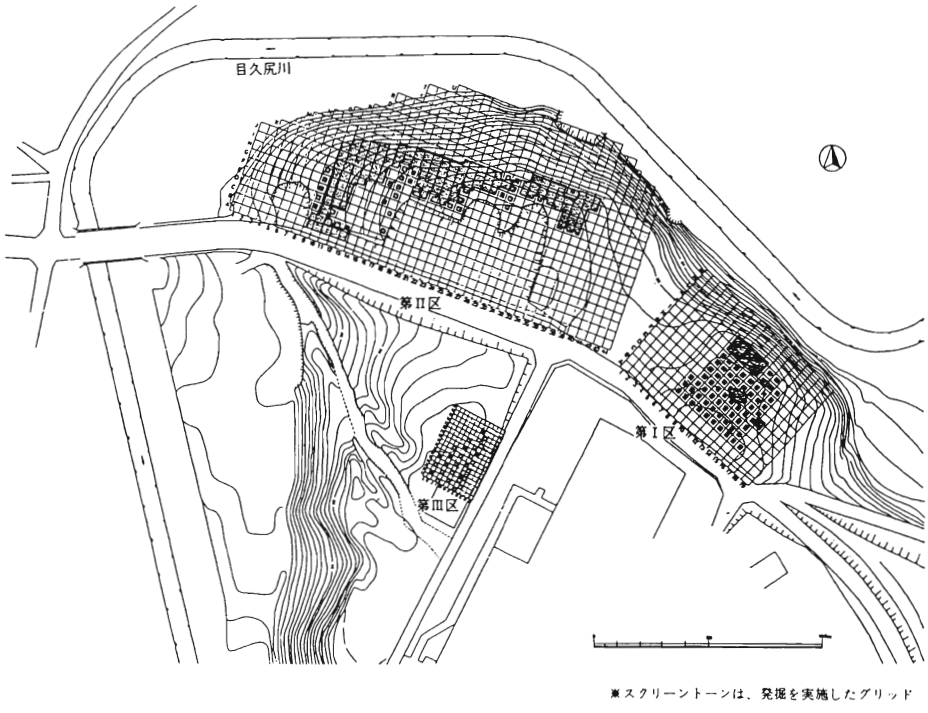
柏ヶ谷長ヲサ遺跡では、富士黒土層下底から縄文時代草創期にあたる文化層１枚と、立川ローム層中より13枚の旧石器時代の文化層が層位的に検出されており（第３図)、相模野台地における有数の旧石器時代遺跡として知られている。ここでは、Ｂ２層中から出土した第Ⅵ文化層から第Ｘ文化層の石器群と礫群･配石を取り上げる。

第Ⅵ文化層

第Ⅱ区のＢ２Ｌ層上面に出土層準を持つ石器群で、２か所の石器ブロックとそれに重複して８か

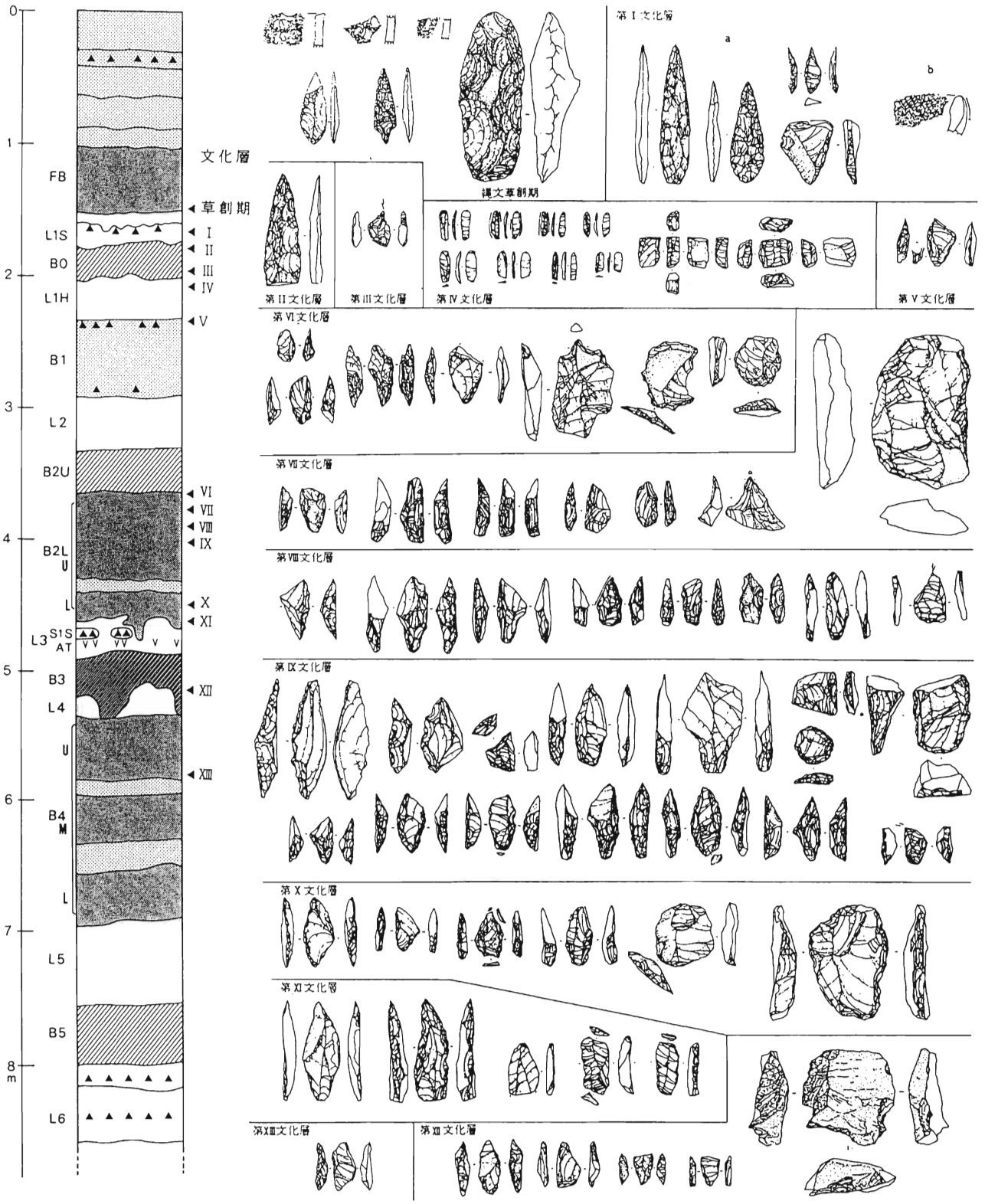
1　橋本
2　下九沢山谷
3　月見野ⅢC
4　月見野上野
5　深見諏訪山
6　草柳一丁目
7　上和田城山
8　栗原中丸
9　柏ヶ谷長ヲサ
10　報恩寺
11　寺尾
12　小園前畑
13　早川天神森
14　地蔵坂
15　上土棚
16　代官山
17　上草柳
18　下鶴間長堀

第１図　相模野台地の地形区分と遺跡分布



※スクリーントーンは、発掘を実施したグリッド

第２図　柏ヶ谷長ヲサ遺跡全体図



第３図　柏ヶ谷長ヲサ遺跡の層位と文化層

所の礫群が検出された（第６図）。遺物の分布は東西20m以内と狭い。
石器組成は、ナイフ形石器12点、錐状石器１点、削器３点、掻器１点、楔形石器１点、磨石２点、剥片、砕片、石核の計182 点で構成される。

石材構成は、黒曜石140 点、硬質細粒凝灰岩35点、ガラス質黒色安山岩６点などで構成され、この内黒曜石の原産地は、畑宿132 点、柏峠２点となっており、畑宿が全体の９４％と主体を占めている。

石材の主体は、畑宿産の黒曜石と丹沢産硬質細粒凝灰岩であり、遺跡からの距離は50キロ圏内という近在地石材で構成されている。

第Ⅶ文化層

第Ⅰ区Ｂ２Ｌ層上部に出土層準を持つ石器群で、３か所の石器ブロックとそれに重複して11か所の礫群が検出された（第６図）。

石器組成は、ナイフ形石器９点、錐状石器１点、削器３点、斧形石器１点、石核９点など234 点で構成されている。

石材構成は、黒曜石179 点、硬質細粒凝灰岩45点、ガラス質黒色安山岩１点、チャート１点、安山岩１点で構成されている。黒曜石の原産地は、柏峠１７５点、畑宿３点であり、柏峠産が全体の９８％と主体を占めている。第Ⅵ文化層では畑宿産が主体を占めているのとは対照的である。

第Ⅷ文化層

第Ⅱ区Ｂ２Ｌ上部を出土層位とし、７か所の石器ブロックが礫群15か所、配石５か所と重複して検出された（第６図）。１号ブロックでは、大きな扁平の石（台石）の周辺に敲石、磨石、石核などを配置した特異な遺構が発見され注目される（第５図）。

石器組成は、角錐状石器２点、ナイフ形石器23点、彫刻刀形石器３点、錐状石器１点、削器７点、石核46点、磨石12点、台石１点など1,121点によって構成される。

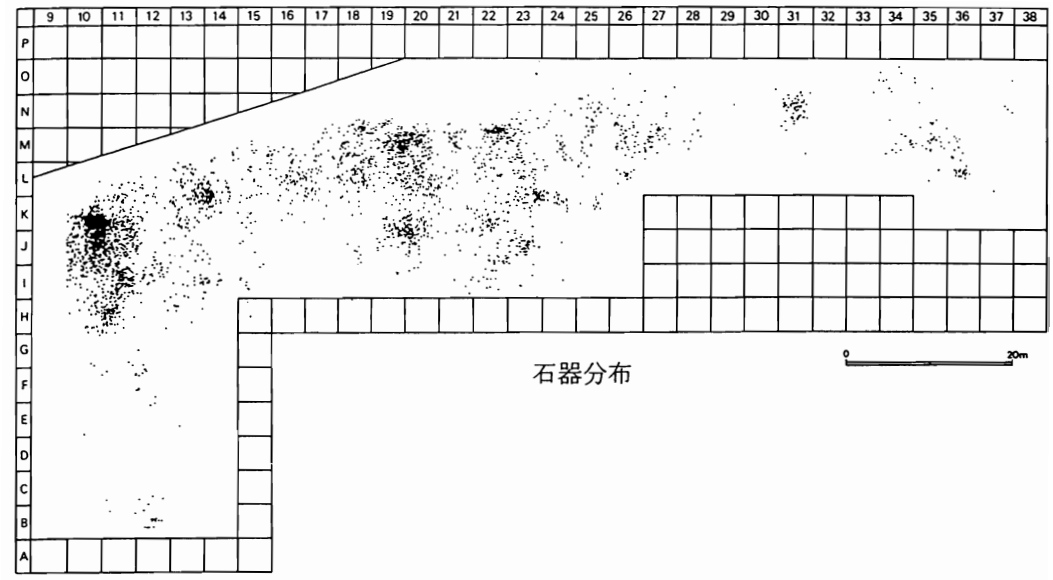
石器石材は、硬質細粒凝灰岩、ホルンフェルス、黒曜石、ガラス質黒色安山岩が多く使われ、これにチャート、珪質頁岩、メノウなどが若干含まれる。

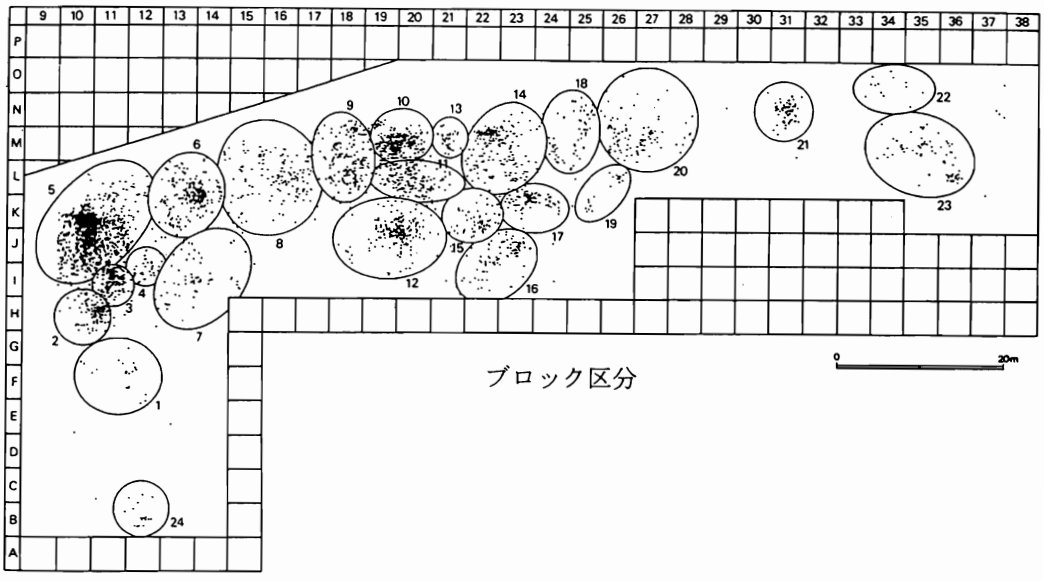
第Ⅸ文化層

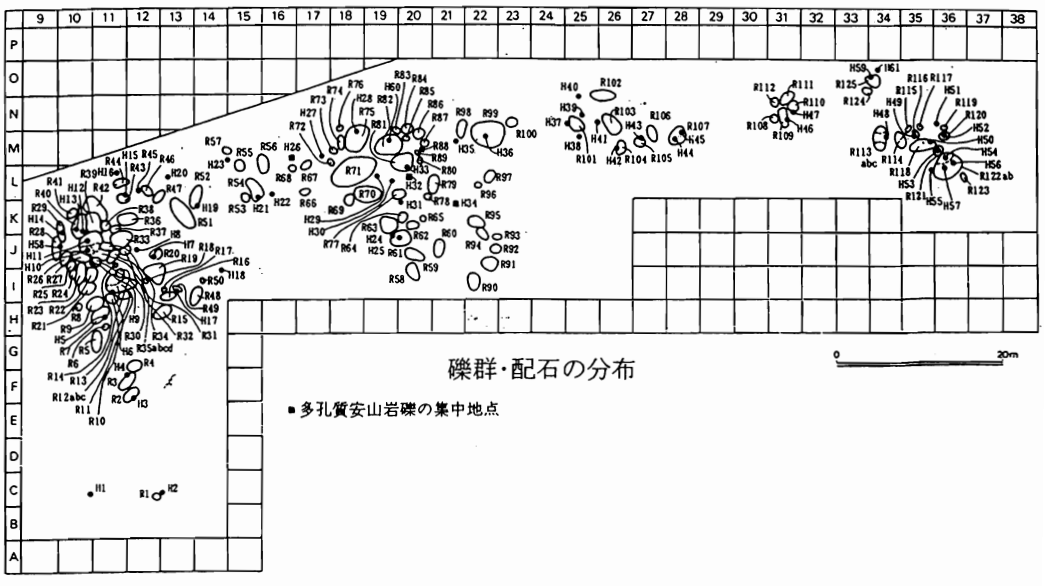
Ｂ２Ｌ層中部に出土層準を持つ石器群で、第Ⅱ区全域に分布の広がりを持ち、24か所の石器ブロックと125 か所の礫群、60か所の配石が検出された（第４・５図）。このうち８号ブロックなど数箇所の多孔質安山岩の礫集中が認められる。東西120mにも及ぶ帯状の分布を示す。

石器組成は、尖頭器２点、角錐状石器２点、ナイフ形石器113 点、彫刻刀形石器１点、錐状石器１点、削器26点、掻器11点、楔形石器３点、石核124点、磨石48点など計2,855 点で構成される。ナイフ形石器は、基部加工、端部加工、一側縁加工、二側縁加工など当該期のナイフ形石器の全ての形態がそろっているが、これらには国府型ナイフ形石器も含まれている。

石材構成は、黒曜石1,164点、硬質細粒凝灰岩926点、ガラス質黒色安山岩442点などで構成され







第４図　第Ⅸ文化層の遺物分布(1/900)

る。この内黒曜石1,120点の産地は、柏峠616点、畑宿489点、和田峠2点、霧ヶ峰2点、蓼科1点、神津島2点、高原山8点と分析されている。この時期は、伊豆・箱根系黒曜石が主体を占めることが特徴であるが、それ以外の原産地が認められることは注目される。特に高原山産の黒曜石が搬入されていることは、相模野では初めてのケースとして注目される。また、ガラス質黒色安山岩の産地も箱根産が主体となっているものの、利根川産や大洗産も若干認められた。

第Ｘ文化層

Ｂ２Ｌ層下部黒色帯上面に出土層準を持つ石器群で、第Ⅱ区に４か所の石器ブロックと17か所礫群、10か所の配石が検出された。

石器組成は、角錐状石器２点、ナイフ形石器13点、削器６点、掻器３点、石核27点などの計279点で構成される。

石材構成は、黒曜石124 点、硬質細粒凝灰岩82点、ガラス質黒色安山岩51点、チャート14点などで構成される。黒曜石の原産地は、柏峠59点、畑宿64点とほぼ変わらないものの、重量では畑宿が80%を占めている。

３　柏ヶ谷長ヲサ遺跡の遺跡の成り立ち

柏ヶ谷長ヲサ遺跡から出土した礫は、保坂康夫氏によって、900g 以上の礫を配石、それ以下を礫群として区分され報告された（保坂1997)。そして、礫は、礫の焼け、重量、完形度、石質、付着物の観察、礫群は、平面分布、礫数、総重量、平均重量、重量分布、完形礫数、完形度分布などの詳細な検討が行われている。その結果、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の各文化層の礫群は次の3つ類型に区分された。

①高密度で輪郭が明瞭な密集型

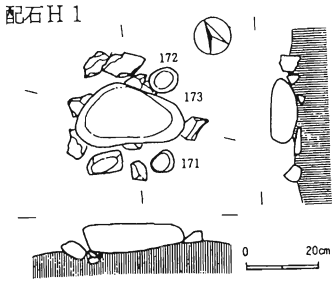
②比較的高密度な密集部を持ち周辺に礫の分散分布を持つ集中型

③明瞭な集中部を持たず全体に礫が分散して分布する分散型

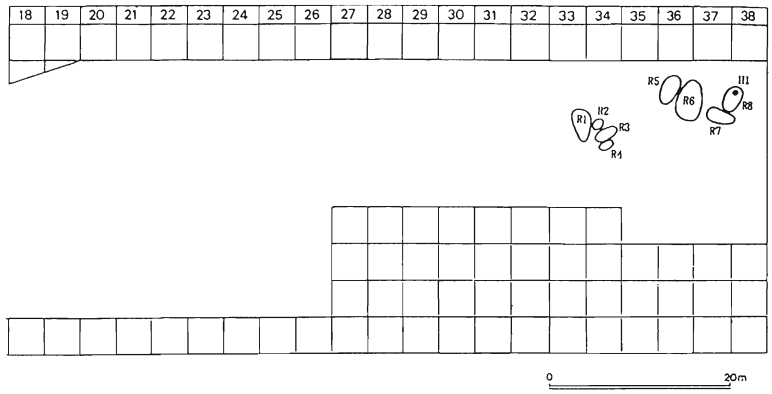
第１表は、各文化層の石器ブロック数、礫群の型による区分、配石数を一覧にしたものである。

	石　器		礫	礫　群			配　石
	石器点数	ブロック数	礫点数	密集型	集中型	分散型	
第Ⅵ文化層	181	2	172		5	3	1
第Ⅶ文化層	234	3	885		9	6	3
第Ⅷ文化層	234	7	451	2	10	6	5
第Ⅸ文化層	2,855	24	3,004	3	60	70	61
第Ｘ文化層	279	4	153		1	16	10

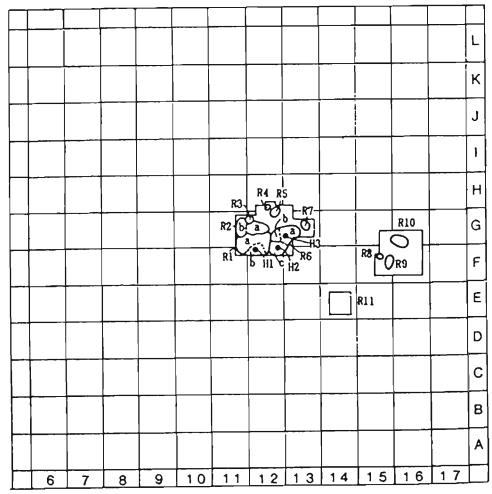
第１表　石器ブロック・礫群・配石集計表



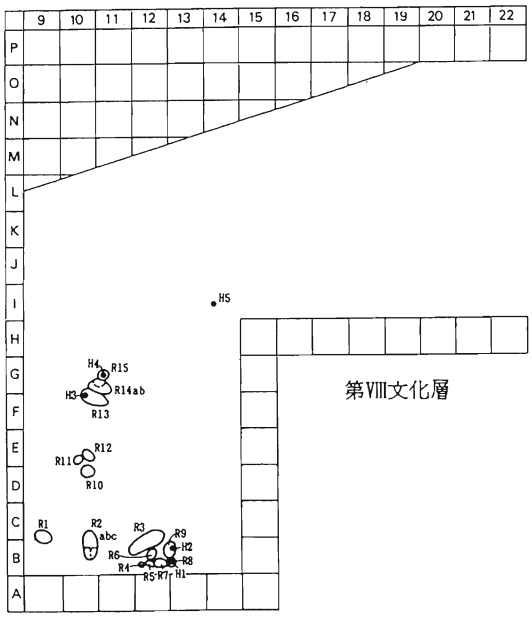
第５図　第Ⅷ文化層配石(1/20)



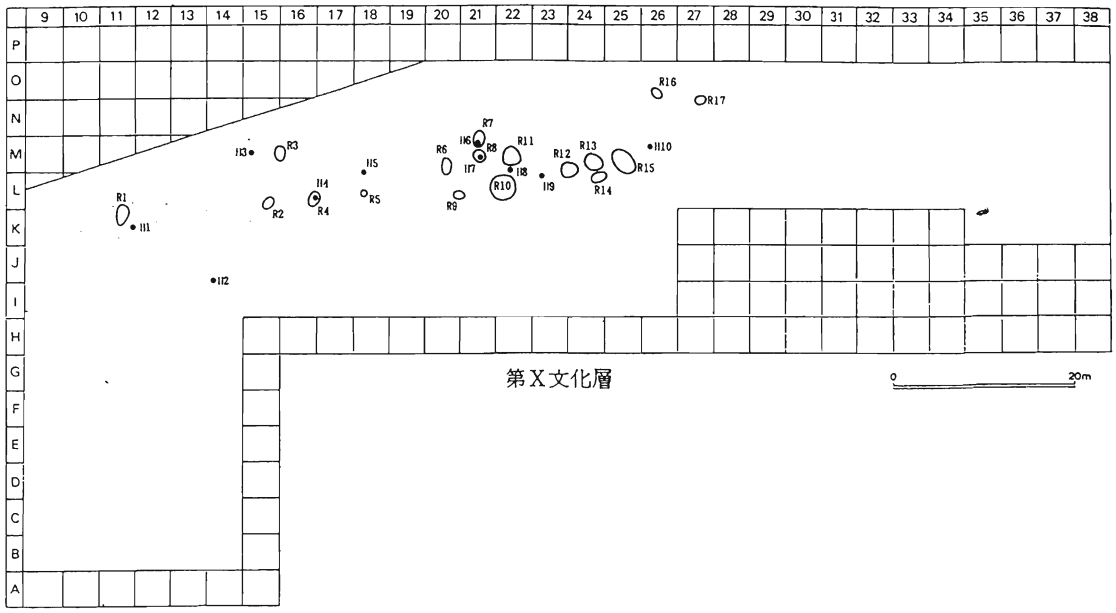
第Ⅵ文化層



第Ⅶ文化層



第Ⅷ文化層



第Ｘ文化層

第６図　第Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ・Ｘ文化層の礫群分布(1/800)

また、礫群の構成礫を完形度(完形礫の状態と比べどのくらいの大きさの礫なのか)により、完形、９割前後、７割前後、５割前後、３割前後、１割前後の6段階に区分し、各礫群別にⅠ類：完形礫が最も多いもの、Ⅱ類：9割から５割以上が最も多いもの、Ⅲ類：５割未満が最も多いもの、の３類型に区分し文化層ごとの傾向が検討された。そして、Ⅰ類の礫群は30点未満、Ⅱ類は50点未満、Ⅲ類は50点以上という類型ごとに礫数との相関があることが指摘されている。

配石としたものは、報告では焼礫、非焼礫の区分をせず、900g 以上の礫を一律に配石としたものであるが、礫群から50cm離れた分布を示す配石は、時代が新しくなるにつれ、礫群と分布が重なる例が増加し、礫群の構成礫であったことをうかがわせる。また、配石としたものの中には、多孔質安山岩の磨石も含まれており、段階Ⅴの遺跡の特徴的なあり方を示している。

礫群は、いずれも赤変したり、火ハネやタール状の付着物を持つ礫によって構成されており、火を使う、焼石料理などに用いられた遺構と考えられる。使用後、遺棄され、その後の散乱や、次の居住者の再利用などにより、使用時の状態をとどめていないと思われるが、一定の数量と重量を持つことから、残存していた場所の比較的近くで、一括して使用されていたと推定される(小野1976)。

柏ヶ谷長ヲサ遺跡Ｂ２層から検出された各文化層の礫群は、礫群の遺棄した状況をしめす密集型を除くと、集中型、分散型ともに礫の複数回の使用により破損した状況を示していると考えられる。

さて、柏ヶ谷長ヲサ遺跡の石器ブロックと礫群の分布状況からは、各文化層によって、規模、分布範囲も異なり、時期によって、この遺跡での居住のあり方が異なっていた可能性がある。

旧石器時代の遺跡を構成する石器分布と礫分布のあり方は、およそ次の４類型に区分して説明ができる。

Ⅰ類：石器集中と礫集中が重複する場合

Ⅱ類：石器集中と礫集中が重複しないが、隣接し存在する場合

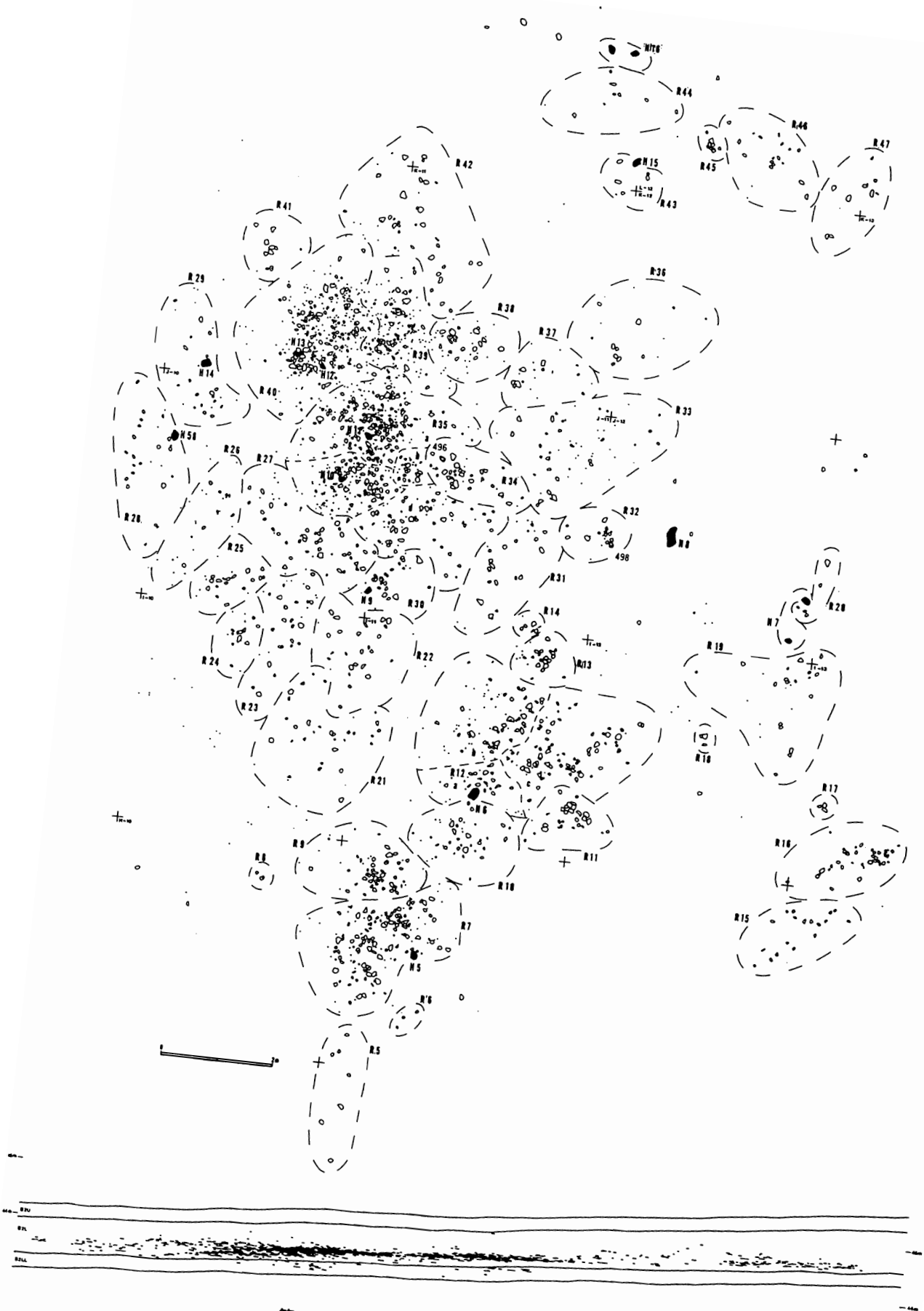
Ⅲ類：石器集中が礫集中と絡まず、石器集中のみで存在する場合

Ⅳ類：礫集中が石器集中と絡まず、礫集中のみで存在する場合

柏ヶ谷長ヲサ遺跡のＢ２層の文化層のあり方を当てはめてみた場合、第Ⅵ・Ⅷ・Ⅸ・Ⅹ文化層は、おおむねⅠ類の石器集中と礫集中が重複するあり方をみせている。一方、第Ⅶ文化層のみが、Ⅱ類にあたり、石器集中と礫集中が重複しないが、隣接し存在するあり方をみせている。ただ、第Ⅶ文化層は、開発の関係で調査範囲が部分的であり、分布の一部分のみであることに留意する必要がある。いずれにしても、ここで確認できた石器と礫の分布は、重複もしくは隣接することということであり、石器製作や石器を使用した活動と礫群を用いた生産活動は、それぞれ単独で行われたということではなく、同時、もしくは連続して行われた結果を反映したものと理解できる。双方の活動は当時の集団にとって日常的で普遍的な生業活動、すなわち「暮し」そのものであったといえる。

次に、遺物の分布のあり方から、遺跡の形成について考えてみよう。

第Ⅵ～Ⅹ文化層の石器と礫の分布のあり方から、小規模な遺物分布を示す第Ⅵ文化層を類型Ａ、



第７図　第Ⅸ文化層礫群・配石平面図(1/100)

第Ⅵ文化層よりも１ランク大きな遺物分布を示す第Ⅷ・Ⅹ文化層を類型Ｂ、2855点の石器と3004点の礫が120ｍを越える大規模な広がりとして捉えられた第Ⅸ文化層を類型Ｃとして、仮に区分してその成り立ちを考えてみる。

類型Ａとした第Ⅵ文化層は、石器ブロック２、礫群８、石器181点、礫172点という小規模な遺物分布で、これを単独もしくは2～3の世帯集団(家族)の1～2回程度の居住・生産活動の痕跡として捉えてみよう。

類型Ｂは、類型Ａの累積の結果とするか、類型Ａを上回る規模の世帯集団の居住・生産活動の痕跡とみなすか、ここでは２つの仮説を提示できる。そして、類型Ｃとした第Ⅸ文化層は、ＡＴ降灰以前の環状ブロック群の形成要因として指摘される複数の世帯集団が一堂にこの場所に集結した結果とみる考え方と、見かけ上、大規模に見える遺物分布は、類型Ａや類型Ｂの遺物分布を残した世帯集団が、繰り返しこの場所を利用した結果とする考え方の二通りが考えられる。第Ⅸ文化層には、環状ブロック群のような同時性を示すブロック間の頻繁な接合関係は認められないことや多孔質安山岩の配石を同一地点への回帰を前提に、計画的に保管･配置されたものと考えた場合、後者の小規模な世帯集団の頻繁な回帰的利用によって形成されたものと考えたほうが妥当であろう。

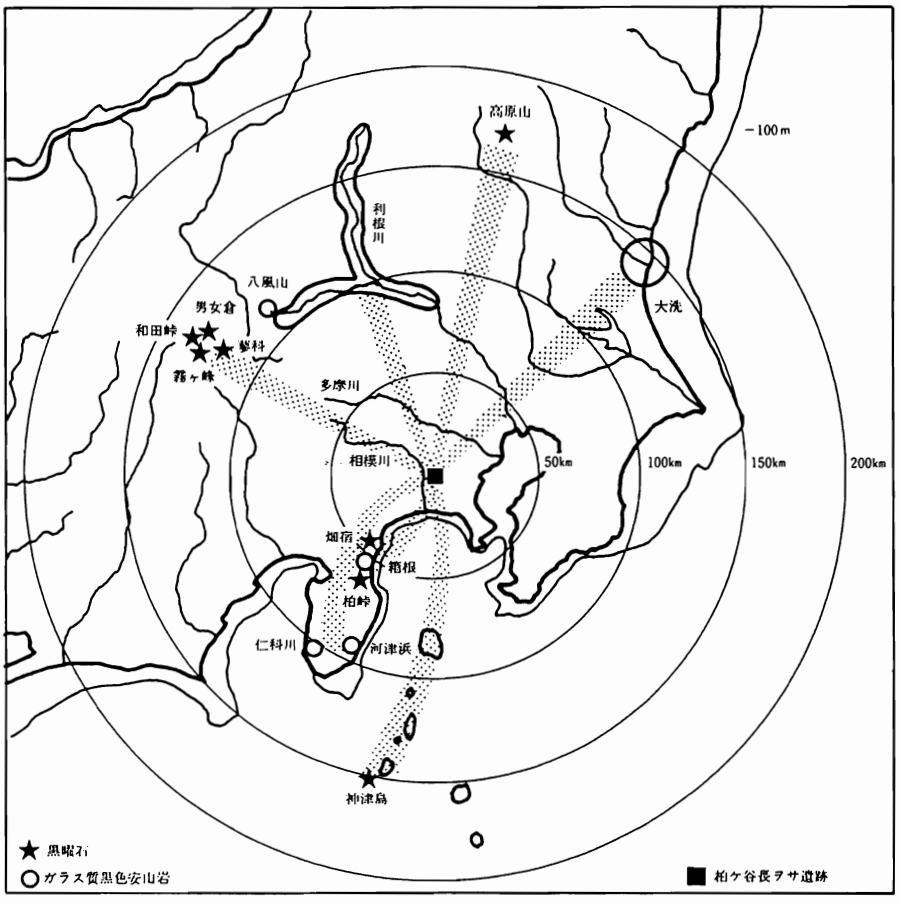
柏ケ谷長ヲサ遺跡は、目久尻川流域で最も張出地形が発達した場所に位置し、狩猟採集や居住する場所として適していたことが伺える。第Ⅸ文化層にみる見かけ上の大規模な遺跡の広がりは、同時にこれだけの石器や礫群が残されたということではなく、移動生活を繰り返しながら何度もこの場所に立ち寄った結果、形成された大規模遺跡と考えられる。第８図に2.5万年前の柏ヶ谷長ヲサ遺跡の様子を提示した。

４　最寒冷期の相模野台地の遺跡群

柏ヶ谷長ヲサ遺跡Ｂ２層石器群の石器石材は、箱根畑宿産や伊豆柏峠産の黒曜石と丹沢産硬質細粒凝灰岩、箱根産ガラス質黒色安山岩の三石材でほぼ占められている。これらの石材採集地は、最も遠い柏峠までが約70km であり、日常的な狩猟採集や石材採集などを行う行動領域は、相模野台地を中心として、丹沢や箱根・伊豆など半径70ｋｍ程度と考えられる。

その中で、柏ヶ谷長ヲサ遺跡第Ⅸ文化層では、数は少ないものの、信州産黒曜石や大洗産ガラス質黒色安山岩など、150km を越える遠隔地から持ちこまれた石材も認められており（第９図)、石器や礫群などの規模と併せて考えると、本遺跡が交通や情報が集まる拠点的な遺跡であったことを示している。それにしても、段階Ⅴになると遺跡数が急激に増加することは、礫群の増加や大規模化などとともに、頻繁な移動生活を送る集団の遺跡(キャンプ)への回帰性の高さを物語っている。遺跡数の増加は、相模野台地に限らず、武蔵野台地や大宮台地でも同様な傾向がある。一方、信州の中部高地や北関東地方では、段階Ⅴに対比される石器群は極めて少ないことが指摘できる。特に北関東の赤城山麓では、AT 降灰以前の石器群の密集地帯として知られているが、段階Ⅴに対比さ

第８図　2.5万年前の柏ヶ谷長ヲサ遺跡の原風景（画：さかいひろこ）



第９図　柏ヶ谷長ヲサ遺跡と利用石材産地

れる石器群は岩宿遺跡第Ⅱ文化層以外にはほとんど認められない。当時の大宮台地と赤城山麓から続く館林台地とは地形的にも連続するものであり、寒冷化や浅間火山噴火の影響などの環境悪化に伴い、集団の南下があったと考えられる。すなわち、この時期には関東・中部の集団の南関東地方沿岸部への移動、集中があったものと考えたい。こうした視点は当時の集団の行動領域や交通関係を反映したと考えられる石材構成の極端な在地化のあり方からも支持されるであろう。

本稿は柏ヶ谷長ヲサ遺跡の報告書（堤隆編1997）を基に執筆した。使用した図版は、全て報告書の転載である。

参考文献

小野正敏　1979「先土器時代の遺跡群と集団」『日本考古学を学ぶ（3)』有斐閣

工藤雄一郎　2008「40～15ka の石器群の年代と古環境」『第6回講演・研究発表・シンポジウム予稿集　日本列島の旧石器時代遺跡－その分布･年代・環境－』日本旧石器学会

小池　聡　2001「相模野台地の立地と文化層」『相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会

柴田　徹　1997「柏ケ谷長ヲサ遺跡出土のガラス質黒色安山岩についての岩石学的考察」『柏ケ谷長ヲサ遺跡』柏ケ谷長ヲサ遺跡調査団

諏訪間順　1988「相模野台地における石器群の変遷について－層位的出土例の検討による石器群の段階的把握－」『神奈川考古』24　神奈川考古同人会

諏訪間順　1996「Ⅴ～Ⅳ下層段階の石器群の範囲―最終氷期寒冷期に適応した地域社会の成立―」『石器文化研究』5　石器文化研究会

諏訪間順　2001「相模野旧石器編年の到達点」『相模野旧石器編年の到達点』神奈川県考古学会

諏訪間順　2002「相模野台地旧石器編年と寒冷期の適応過程」『科学』72-2　岩波書店

諏訪間順　2006「相模野台地における黒耀石利用の変遷」『黒耀石研究』4号　明治大学黒耀石研究センター

諏訪間順・堤　隆1997「柏ヶ谷長ヲサ遺跡における旧石器時代石器群」『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団

堤　隆編　1997『柏ヶ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団

望月明彦　1997「蛍光Ｘ線分析による柏ケ谷長ヲサ遺跡出土の黒曜石製石器の産地推定」『柏ケ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団

矢島國雄・鈴木次郎1976「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』1　神奈川考古同人会

山本　薫　1997「神奈川県海老名市柏ケ谷長ヲサ遺跡における石器石材の入手について」『柏ケ谷長ヲサ遺跡』柏ヶ谷長ヲサ遺跡調査団

ナイフ形石器文化期のムラ ③

－遺跡間接合と遊動生活－

吉 田　政 行

１　は じ め に

今日、各遺跡で出土した旧石器時代資料の分析において、接合作業は欠くべからざる作業となっているが、その接合関係が遺跡をまたいで確認された例が、神奈川県綾瀬市に所在する吉岡遺跡群Ｂ区出土石器群と藤沢市に所在する用田鳥居前遺跡出土石器群との遺跡間接合である。筆者はこれまでに、遺跡間接合資料にみられる旧石器時代人の行動について考える機会を持った(吉田2001、2010、吉田ほか2003)。本稿ではそれら拙稿を踏まえて、吉岡－用田の事例から、列島におけるナイフ形石器文化期の遊動生活についてその一端を推定してみる。

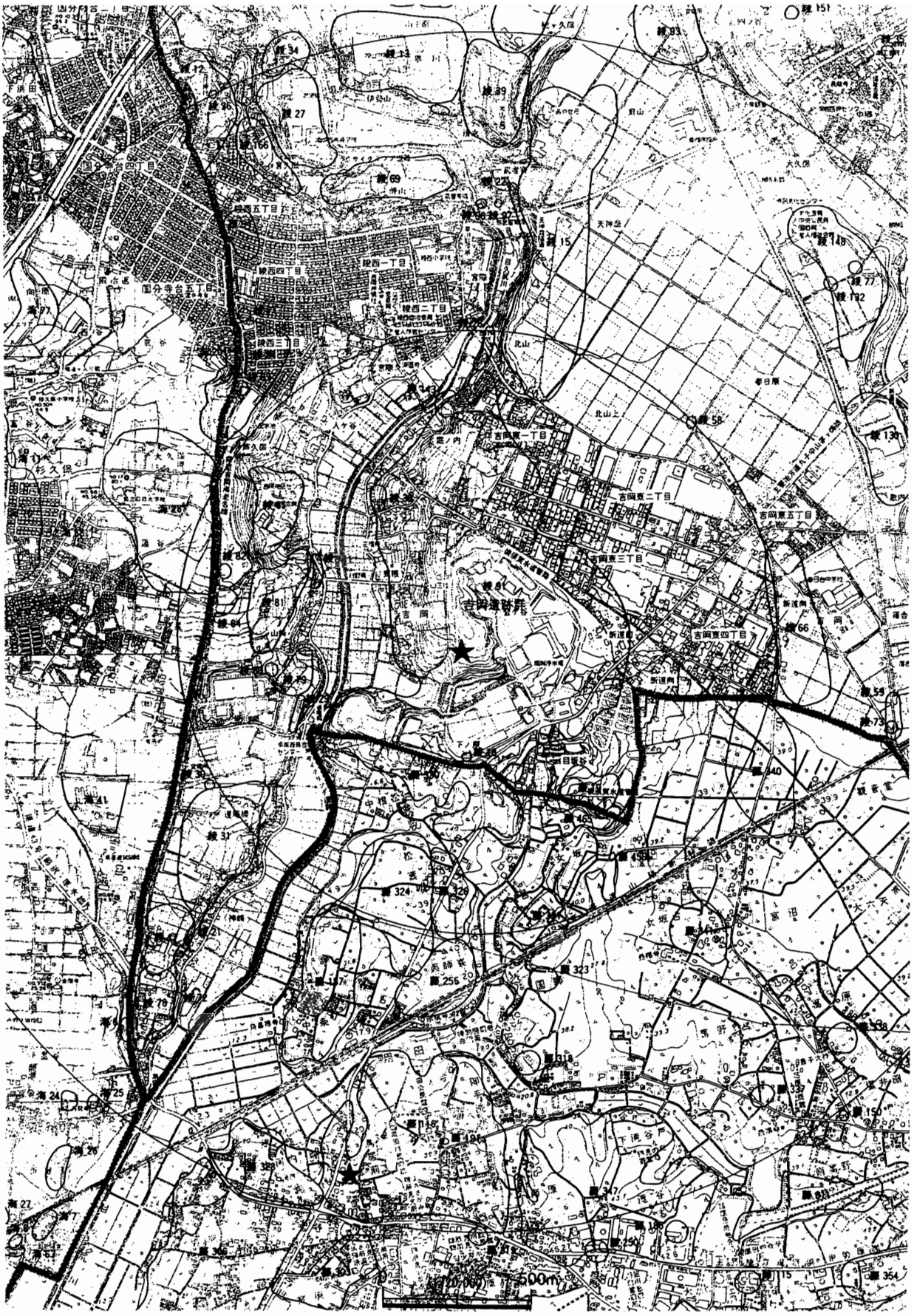
２　吉岡遺跡群Ｂ区の石器群

吉岡遺跡群は神奈川県県央部の綾瀬市に所在し、高座丘陵の西端、目久尻川左岸に立地している(第１図)。当該遺跡では、１次調査ならびに２次調査によって、旧石器時代の複数時期にわたる遺物が確認され、ＡＴ火山灰降下以前、相模野台地のローム層におけるＢ４層下位からローム漸移層に至る多数の遺物群が設定された(砂田ほか1998、吉田ほか2003)。　遺跡間接合が確認されたのは、第２次調査において遺物群Ⅳとして報告している資料群である(第２～６図)。占地面はＢ１層下部であったと考えられ、礫群1基を伴う石器集中1とした一群に含まれる。二つから三つの密集部が想定され、合計732点の石器が含まれる(礫石器を除くと727点)。主体的に組成する石材は硬質細粒凝灰岩などの凝灰岩類であり、黒曜石の産地には、望月明彦により和田鷹山群など和田エリアの複数の産地が推定されている(望月2003)。

３　用田鳥居前遺跡の石器群

用田鳥居前遺跡は神奈川県県央部の藤沢市に所在し、地形面としては吉岡遺跡群同様、高座丘陵の西端、目久尻川左岸に立地している(第１図)。この遺跡においても、１次調査ならびに２次調査により旧石器時代の複数時期にわたる遺物が確認されており、ＡＴ火山灰降下以降、相模野台地のローム層におけるＢ２層下位からローム漸移層に至る複数の文化層が設定されている(栗原ほか2002、新開ほか2006)。

遺跡間接合が確認されたのは、第１次調査で第Ⅳ文化層として報告されている資料群である(第２・６図)。占地面はＢ１層下部であったと考えられ、第3石器集中地点として記載される一群に含



第１図　両遺跡の位置（★印が石器群出土位置、吉田ほか2003を改変）

まれる。二箇所の炭化物集中を取り囲む小規模な石器集中であり、合計43点の石器が含まれる(礫石器破片を除くと26点)。硬質細粒凝灰岩、珪質頁岩、碧玉(黄玉石)などの石材が利用される。

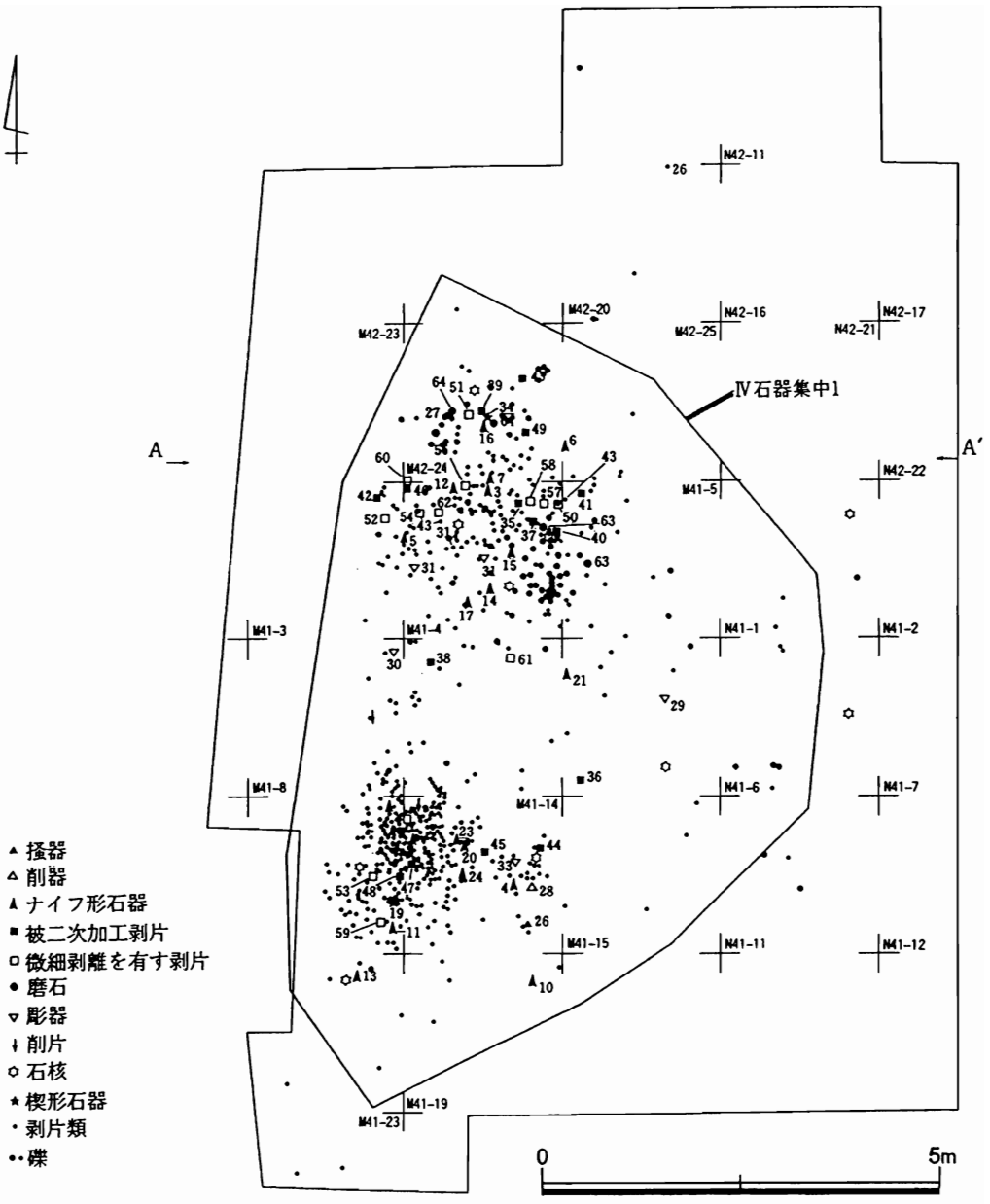
4　遺跡間接合資料を含む石器群の遺物分布

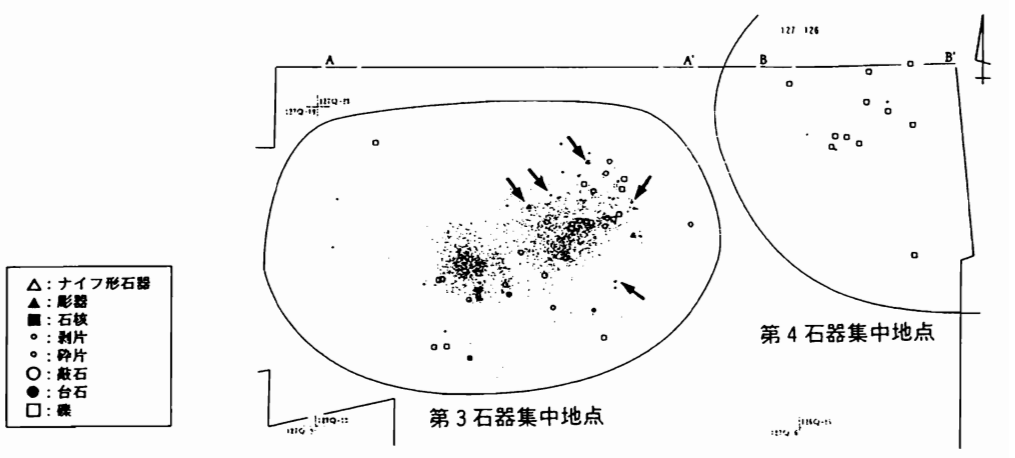
次に、遺跡間接合資料を含むこれらの石器群の遺物分布を確認する。先に若干触れたところではあるが、接合資料が含まれる吉岡遺跡群Ｂ区における石器集中１は、礫群の平面・垂直分布が、石器集中北部の分布に重なることから、礫群1基を伴い、長径約10mの広がりに、二つから三つの密集部が想定されるものであった(第２図)。石器の数量は多量であり、器種、石材(母岩)ともに種類は多様であった。また、密集部間での接合関係も多数確認されており、遺跡間接合が認められた三つの母岩のうち二つの母岩でも確認されている(第３図)。硬質細粒凝灰岩の母岩Ⅳ１では、多数の接合資料で構成される接合個体において、密集部をまたいだ接合関係が認められることから、各密集部は同一の集団により、近接した時間に残されたと考えられる。このことから、吉岡遺跡群の石器集中１の遺物分布は高密度で規模の大きい遺物分布といえる。一方、用田鳥居前遺跡における第３石器集中地点は、２箇所の炭化物集中が認められているが、石器については、長径約４mの広がりで、散漫な出土状況であった(第２図)。礫石器の破片を除くと石器の数量は30点に満たず、用田鳥居前遺跡第３石器集中地点の遺物分布は低密度で規模の小さい遺物分布といえる。

5　吉岡遺跡群Ｂ区の石材・石核消費

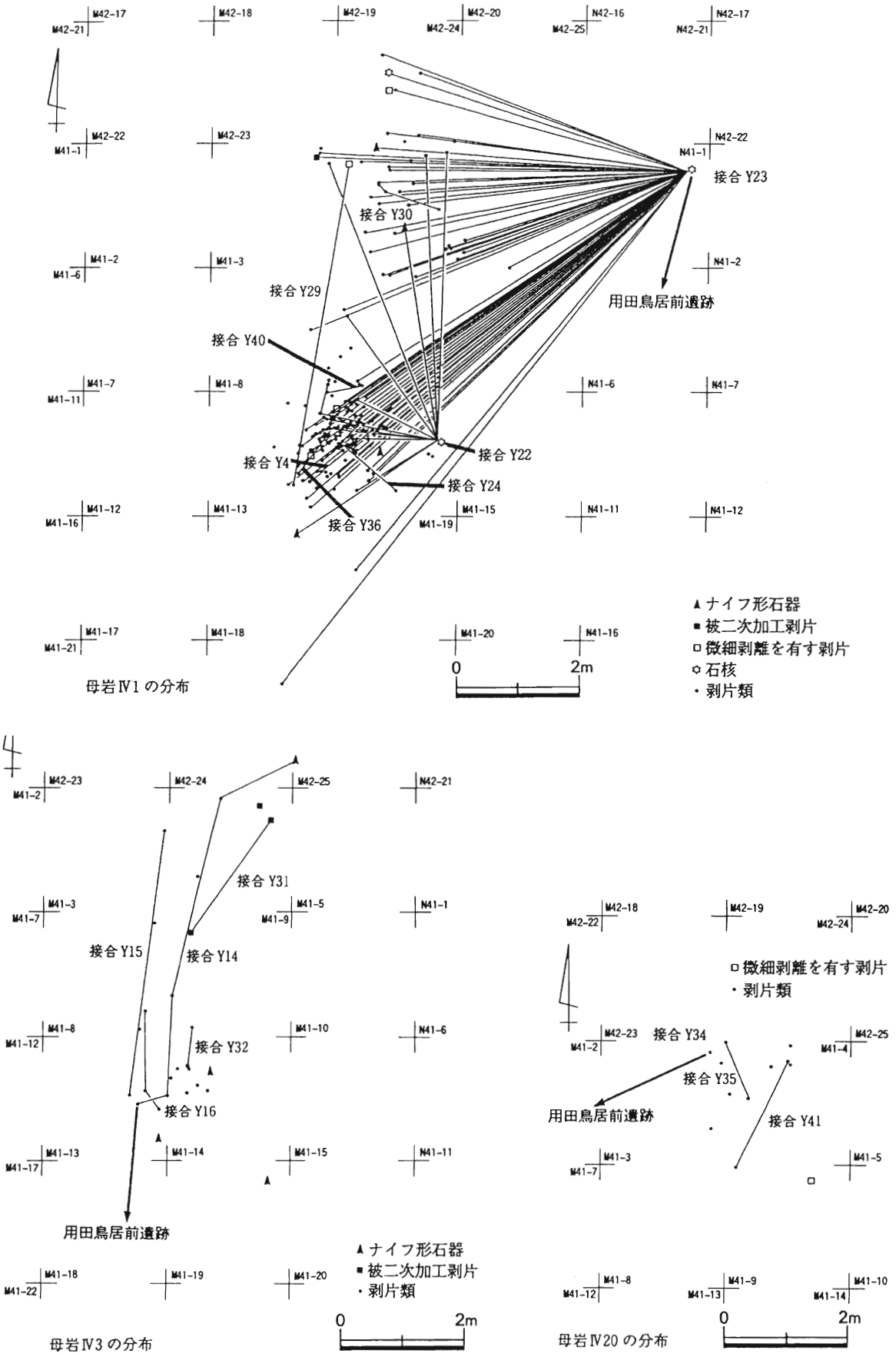
次に、高密度で規模の大きな遺物分布を示している吉岡遺跡群Ｂ区における石材・石核消費のあり方を見てみる。石材には、硬質細粒凝灰岩、碧玉(黄玉石、赤玉石)、ホルンフェルス、珪質岩、チャート、珪質頁岩、硬質頁岩、黒曜石、安山岩が利用されている。接合はすべての石材で確認され、それらのほとんどは吉岡遺跡群においてなされた剥離作業の結果によるものと考えられる。接合個体・資料は石材(原料)の消費過程をあらわしていると考えられるが、本稿では接合個体について、島田和高が、「個々の原料をもとに遺跡でとりおこなわれた石器製作が、原料が消費され始める始点と残核となる終点とのあいだでの、どの時点に相当するかという観点」から個体別資料の分類に関して提示した、「消費途次原料」と「消費完了原料」という呼称を援用する(島田1996)。

では、実際に、吉岡遺跡群Ｂ区で出土した接合個体をどうであろうか。本稿では、遺跡間接合が確認された三つの石材、硬質細粒凝灰岩、碧玉(黄玉石)、珪質頁岩について確認する。硬質細粒凝灰岩製接合個体には、消費完了原料を示す個体(第４図)と消費途次原料を示す個体(第５図４～８)がともに認められる。接合資料に石核が含まれる消費完了原料では、とりわけ、第４図１・３・４は、原礫面を広く残す資料が多数含まれ、１・４は原石状態にまで復元される個体である。これらの接合個体から、長径15～20cmの原石が原料として選択されていたと考えられる。さらに、持ち込まれた原石を使って、石核準備作業から剥片剥離作業の最終段階まで、吉岡遺跡群Ｂ区で行ってい

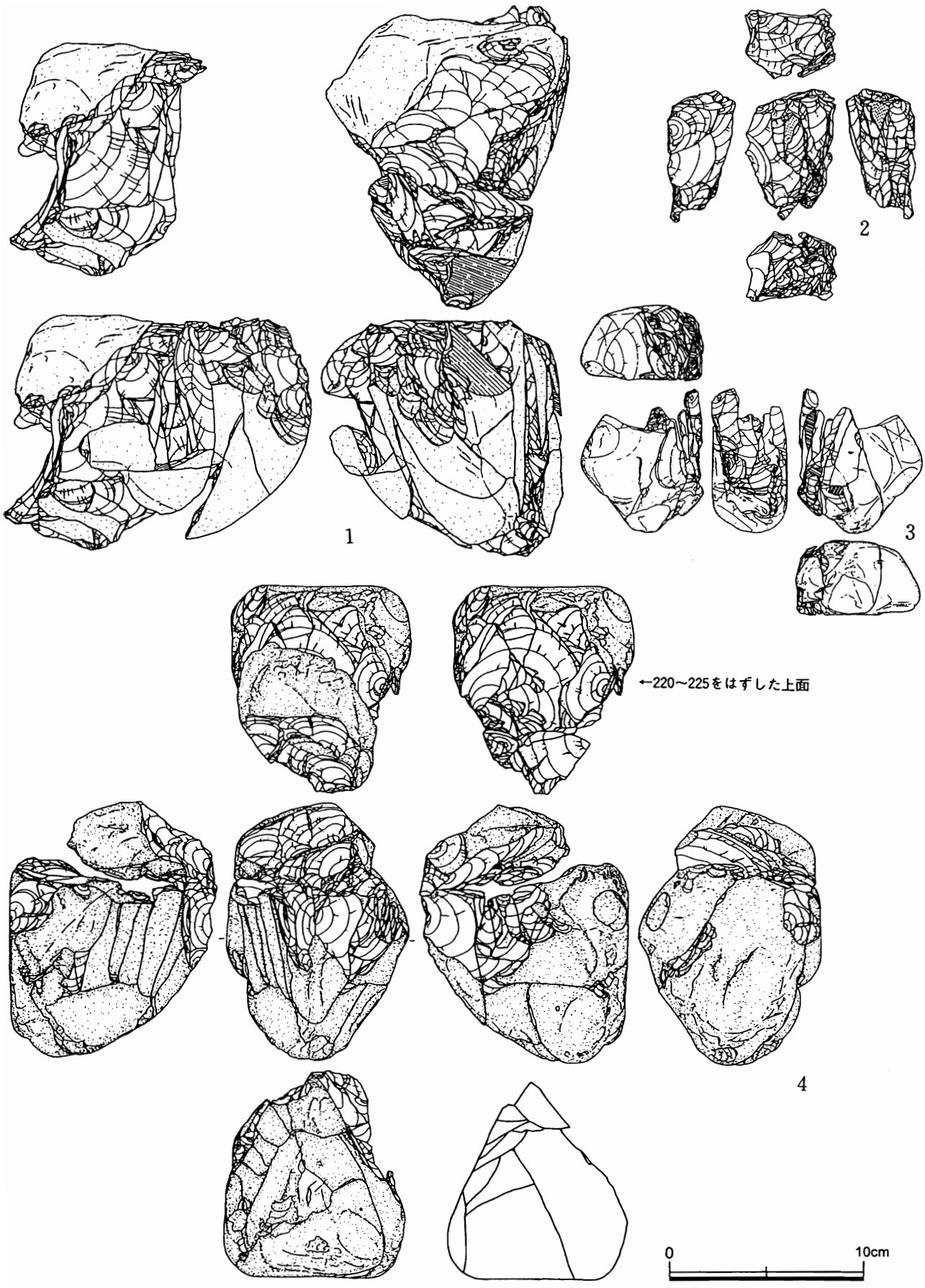




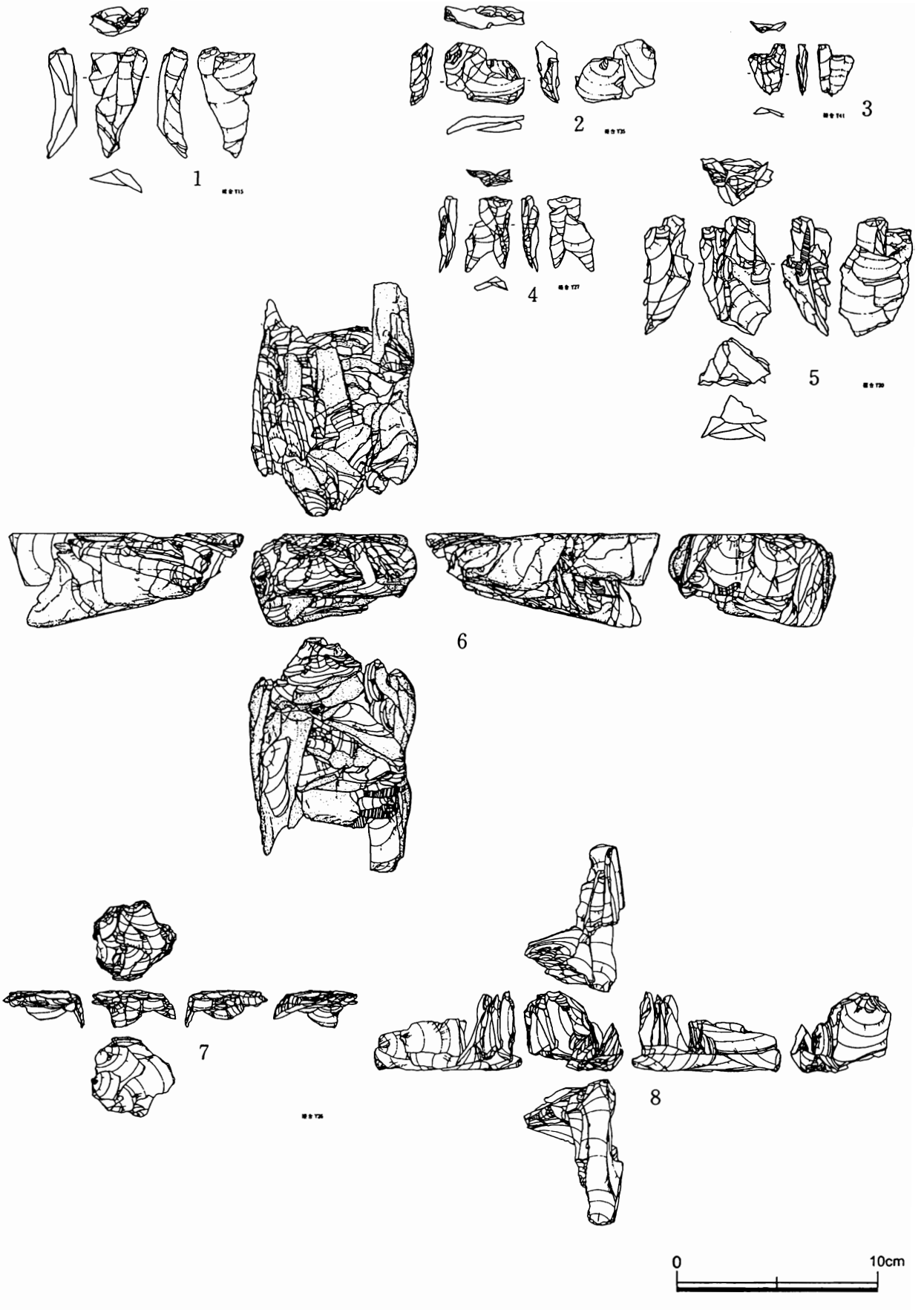
第２図　吉岡遺跡群Ｂ区（上）と用田鳥居前遺跡（下）の遺物分布



第３図　遺跡間接合資料を含む母岩別資料の分布



第４図　吉岡遺跡群Ｂ区における接合個体（１）



第５図　吉岡遺跡群Ｂ区における接合個体（２）

たと考えられる。あわせて、消費途次原料と考えられる第５図４～８のような接合個体が存在する。

碧玉(黄玉石)製接合個体と珪質頁岩製接合個体には、石核を伴う消費完了原料を示す接合固体は見られない。いずれも消費途次原料を示す個体である。碧玉(黄玉石)では対向打面による剥離作業の途中を示す個体である(第５図１)。珪質頁岩では、石核調整に伴うと考えられる接合個体(第５図２)や単打面による剥離作業の途中を示す個体(第５図３)が認められる。

６　吉岡－用田の石材・石核消費

遺跡間接合は上述したとおり次の三つの石材（母岩別資料）について確認された(第６図)。

A　硬質細粒凝灰岩

両遺跡で合計106点（1071.24ｇ）からなり、消費完了原料の様相を示す接合個体である。90°もしくは180°の打面転位を伴う消費がおこなわれていたと考えられる。その手順は、原礫を分割した後、各分割個体で石核を消費する方式であり、接合によって、原石獲得後の消費初期段階と考えられる状態にまで復元された。

B　碧玉（黄玉石）

両遺跡で合計6点（38.1ｇ）からなり、消費途次原料の様相を示す接合個体である。石核は含まれていないが、対向打面による石核消費によって剥片生産をおこなっていたと考えられる。

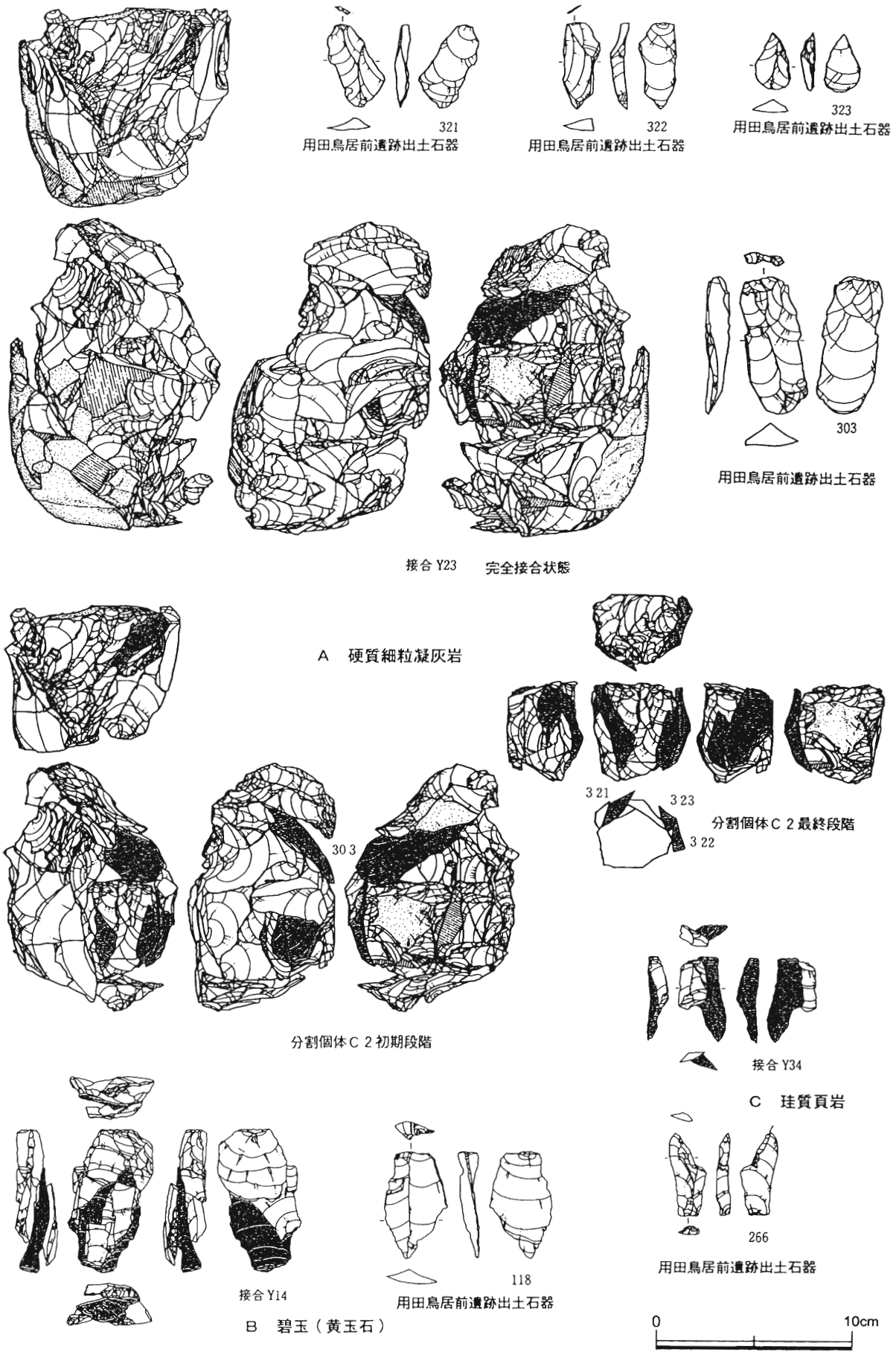
C　珪質頁岩

両遺跡で合計2点（5.7ｇ）からなり、消費途次原料の様相を示す接合個体である。こちらも石核は含まれていないが、対向打面による石核消費をおこなっていたと考えられる。

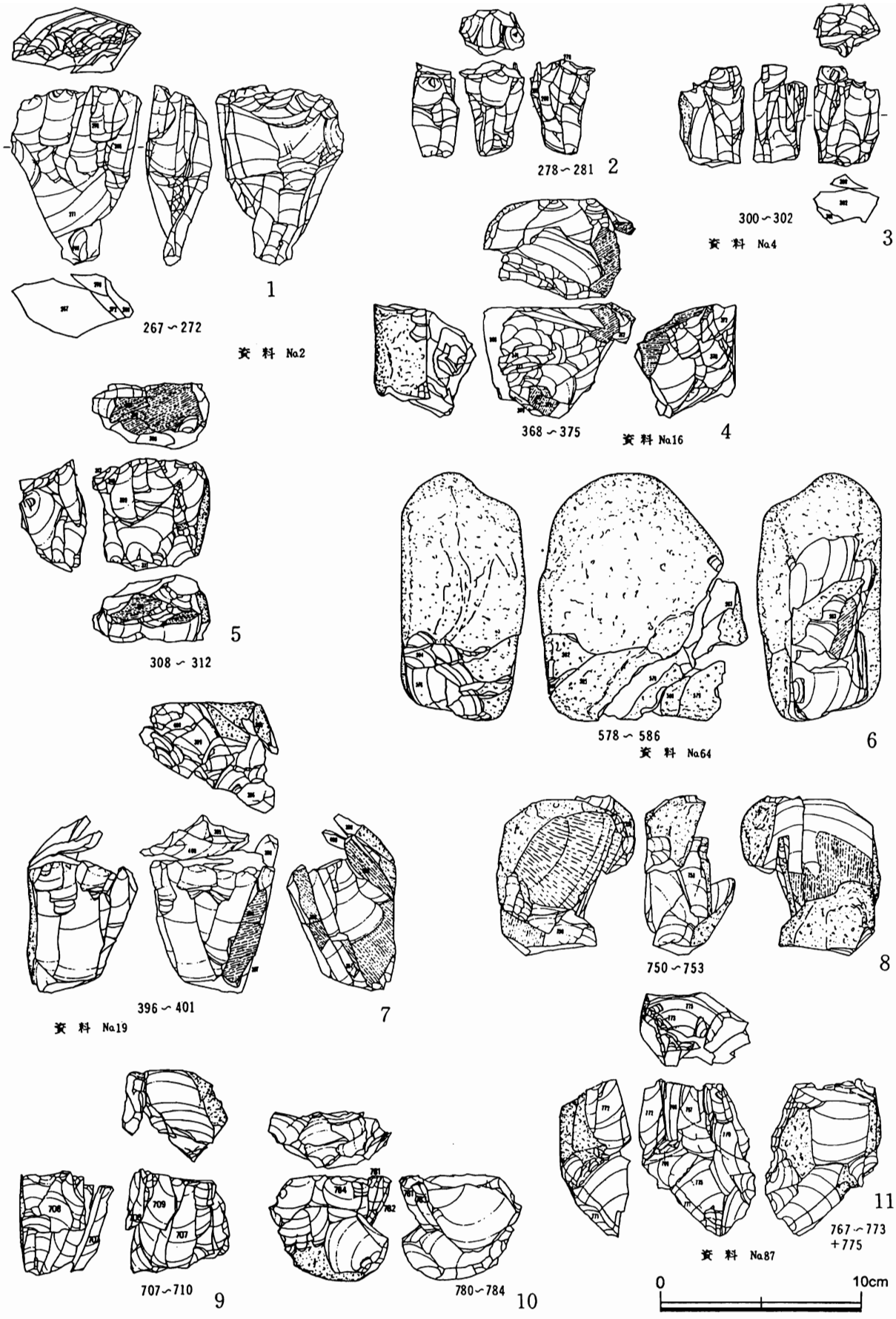
このように、硬質細粒凝灰岩では、消費完了にいたる行動が認められる一方、碧玉(黄玉石)や珪質頁岩では、消費の途中段階の行動が認められた。さらに、碧玉(黄玉石)製の個体と珪質頁岩製の個体については、吉岡だけでなく、用田を経ても、まだ消費の途中であったと考えられる。

７　栗原中丸遺跡の石材・石核消費

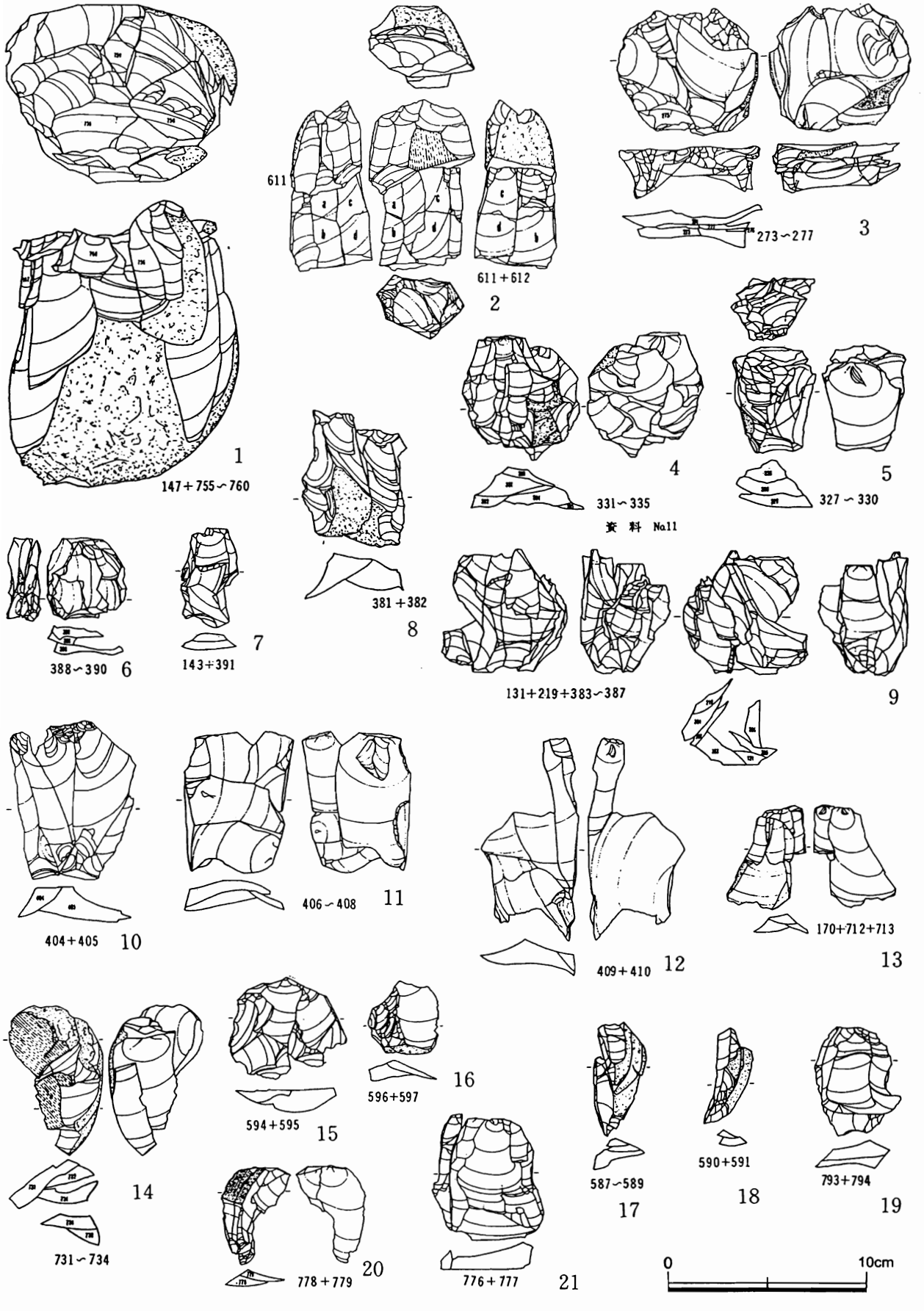
ここで、吉岡遺跡群同様、目久尻川流域で、同時期の多量の石器が出土している栗原中丸遺跡第Ⅴ文化層における石材・石核消費のあり方にふれる(第７・８図)。本遺跡では多数のブロックが設定されており、それらの時間差についても想定されるところではあるが、本稿では、全体を対象とし、接合個体を中心に確認する。当遺跡第Ⅴ文化層石器群の石材には硬質細粒凝灰岩が主として用いられている(鈴木1999)。硬質細粒凝灰岩製接合個体には、吉岡遺跡群Ｂ区同様、消費完了原料を示す個体(第７図、第８図１)と消費途次原料を示す個体(第８図３～21)がともに認められる。消費完了原料を示す接合個体では、原石に近い状態にまで復元されるものも存在する。凝灰質頁岩製の接合個体には、消費完了原料を示す接合個体が認められ、分割された石核の接合が確認されている(第８図２)。



第６図　吉岡－用田の遺跡間接合個体（吉田ほか2003を改変）



第７図　栗原中丸遺跡における接合個体（１）



第８図　栗原中丸遺跡における接合個体（２）

８　吉岡－用田から見える遊動生活

相模野で同一の地形面にある吉岡－用田遺跡間の接合事例は、遺物量、母岩数、石器集中の規模など、大規模な石器集中を構成する資料と小規模な石器集中を構成する資料との間での接合関係といえる。硬質細粒凝灰岩は大規模な石器集中で、石核準備、剥片生産、利器の製作まで実施し、持ち込んだ石材をほとんど消費し、少数の利器や利器の素材となる剥片を持ち出した。その一方、碧玉や珪質頁岩は少量消費し、利器、利器素材、石核を他所へ持ち出したと考えられる。さらに、吉岡と用田では共通しない母岩が存在することから、集団の一部が、石材補充のために、西側の河原や相模野面の露出礫層へ赴き、石材採取したのち、採集狩猟などの目的で小規模な石器集中が残される遺跡(野営地：用田)で活動し、石器を放棄したのであろう。その後、再び、大規模な石器集中が残される遺跡(本拠地：吉岡)へ戻ったと考えられ、同じ目久尻川流域にある栗原中丸遺跡も吉岡遺跡群Ｂ区同様、硬質細粒凝灰岩を多量に持ち込み、石材消費する集団の本拠地として機能していたと考えられ、周辺には用田的野営地が存在したと考えられる(吉田2010)。

謝　辞

あの衝撃的な事件が発覚したのが西暦2000年であった。その同じ年の夏、筆者は遺跡間接合という貴重な事実に遭遇する機会に恵まれた。そして10年後の今回、遺跡間接合に関して、再び、発表の機会をいただいた。末筆ではあるが、本講座の機会を与えてくださり、準備運営にもあたられた鈴木次郎氏に感謝申し上げるとともに、日々ご教示いただいている(財)かながわ考古学財団および神奈川県教育委員会生涯学習文化財課の諸氏に感謝申し上げる。

引用文献

栗原伸好ほか　2002　『用田鳥居前遺跡』かながわ考古学財団調査報告128　財団法人　かながわ考古学財団。

新開基史ほか　2006　『用田鳥居前遺跡Ⅱ』かながわ考古学財団調査報告185　財団法人　かながわ考古学財団。

鈴木次郎　1999　「寺尾・栗原中丸両遺跡の石器石材の再検討」『研究紀要４　かながわの考古学』財団法人　かながわ考古学財団　110-133頁。

砂田佳弘ほか　1998　『吉岡遺跡群Ｖ』かながわ考古学財団調査報告38　財団法人　かながわ考古学財団。

望月明彦　2003　「吉岡遺跡群Ｂ区出土黒曜石製遺物の石材産地推定」『吉岡遺跡群Ｘ』かながわ考古学財団調査報告153　財団法人　かながわ考古学財団　257-281頁

吉田政行　2001　「吉岡遺跡群Ｂ区からみた遺跡間接合」『研究紀要６　かながわの考古学』財団法人　かながわ考古学財団　4-5頁。

吉田政行　2010(印刷中)　「遺跡間接合資料にみる旧石器時代人の活動痕跡」『比較考古学の新地平』『比較考古学の新地平』刊行委員会　13-23頁。

吉田政行ほか　2003　『吉岡遺跡群Ｘ』かながわ考古学財団調査報告153　財団法人　かながわ考古学財団。

槍先形尖頭器文化期のムラ

－石囲い炉をもつブロックと槍先形尖頭器の生産－

鈴 木　次 郎

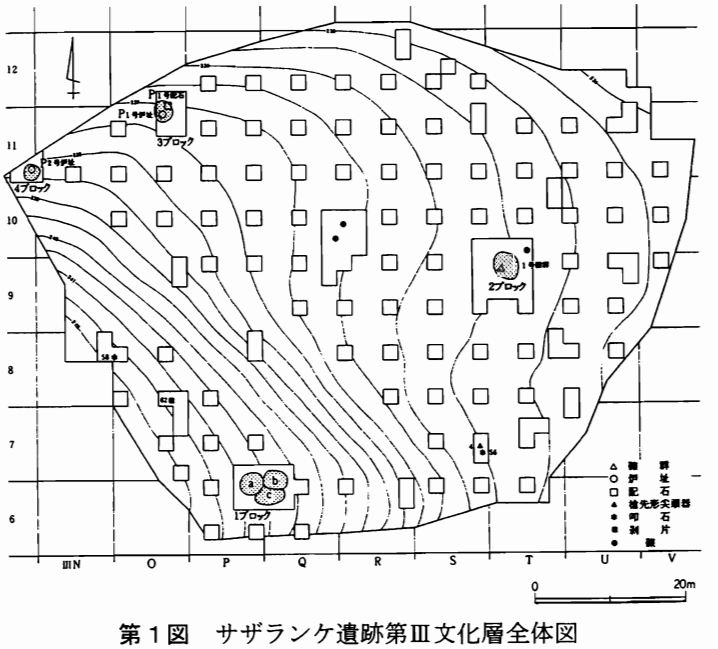
１　はじめに

槍先形尖頭器は、ビュルム氷期最寒冷期の相模野第Ⅲ期（Ｂ２層）にナイフ形石器に共伴して出現し、Ｌ１Ｈ層の相模野第Ⅴ期には、中心的な狩猟具はナイフ形石器から槍先形尖頭器に交代して槍先形尖頭器文化ともいえる石器群の様相を示す。本稿では、Ｌ１Ｈ層出土の槍先形尖頭器石器群の分布状態について対照的なあり方を示す宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第Ⅲ文化層と寺尾遺跡第Ⅱ文化層を検討し、槍先形尖頭器文化期の集落構成を探ってみたい。なお、ここでは遺物分布の平面的なまとまりについてブロックと呼称し、複数のブロック間の石器接合関係や個体別資料の共有関係などにより同時存在が想定されるブロック群についてユニットと呼称することにする。

２　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層のブロック

宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡は、東丹沢山塊の中津川とその支流早戸川の合流点に形成された小規模な段丘上に立地する。第Ⅲ文化層の石器群は、Ｌ１Ｈ層の上部～中位に出土層位をもち、槍先形尖頭器38（接合前の資料数47）、削器１（同４）、加工痕のある剥片４、使用痕のある剥片４、礫器１、叩石３、台石１、磨痕のある礫１、剥片・砕片2,758の合計2,811点（同2,823点）の石器から構成される。また、これを石材別にみると、ガラス質黒色安山岩が８個体以上2,351点と83％を占め、以下、硬質細粒凝灰岩３個体267点、凝灰質頁岩１個体175点、黒曜石４個体13点、硬質中粒凝灰岩２個体６点、流紋岩１個体６点、安山岩３個体３点、中粒凝灰岩１個体１点、硬質砂岩１個体１点の合計25個体以上2,823点からなる。

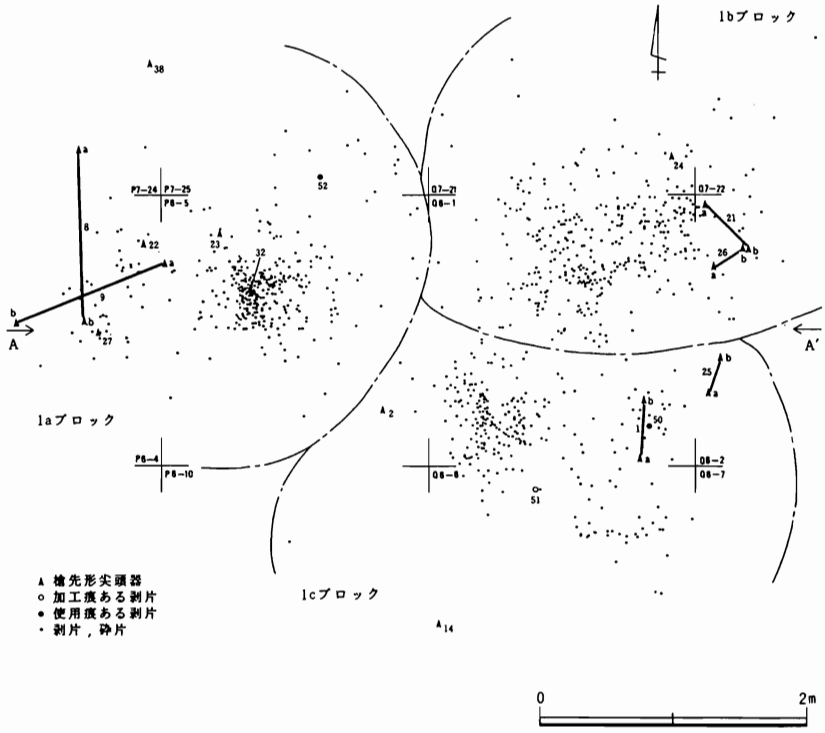
第Ⅲ文化層のブロックは、４箇所検出されているが、それらは独立丘陵（台地）状を呈する遺跡の縁辺部近くに点在し、もっとも近接する第３ブロックと第４ブロックは18ｍの距離を隔て、それ以外のブロックは40～60ｍほど離れている（第１図）。



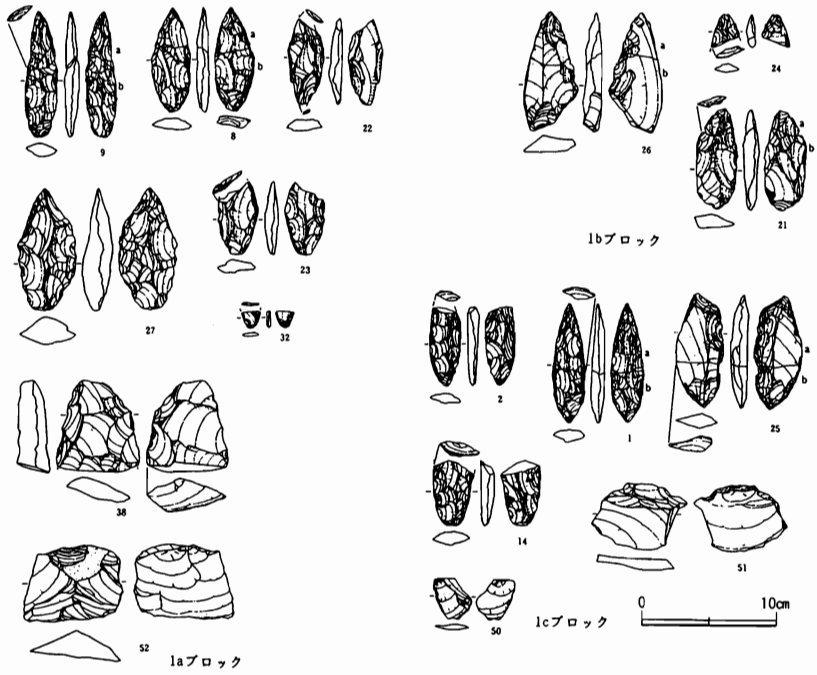
第１図　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層全体図

各ブロックの特徴

第１ブロック（第２・３図）は、南側縁辺部に近い上段に位置し、東西６ｍ×南北４ｍの広がりをもち、炉址や礫群などの遺構は検出されなかったが、石器とともに多量の炭化物が検出された。出土石器は、槍先形尖頭器14（接合後の点数で、資料数は20)、加工痕のある剥片１、使用痕のある剥片２、剥片・砕片1,430（平均重量1.36ｇ）の合計1,453点から構成される。その大半を占める剥片・砕片は、槍先形尖頭器の製作時に生じた石屑がほとんどで、槍先形尖頭器の素材の可能性のある剥片も少数みられる。また、槍先形尖頭器も製作途上の未成品（多くは欠損して放棄したもの）が中心で、出土石器のほとんどすべてが槍先形尖頭器の製作に関わる資料である。第１ブロックは、さらにａ～ｃの３箇所の小ブロックに区分されるが、いずれも槍先形尖頭器を集中的に製作したことを示している。なお、槍先形尖頭器や加工痕のある剥片・使用痕のある剥片といった石器は、剥片・砕片の集中部から離れたブロックの外縁部近くに分布する傾向が認められる。

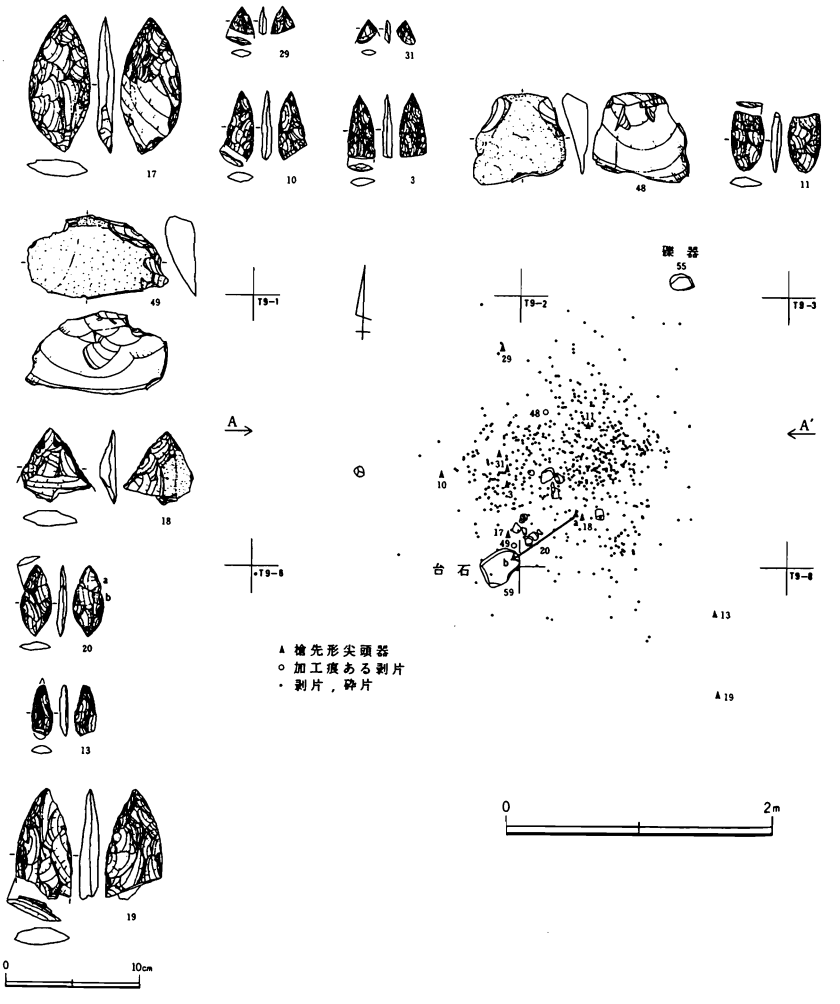


第２図　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層第１ブロック遺物分布図



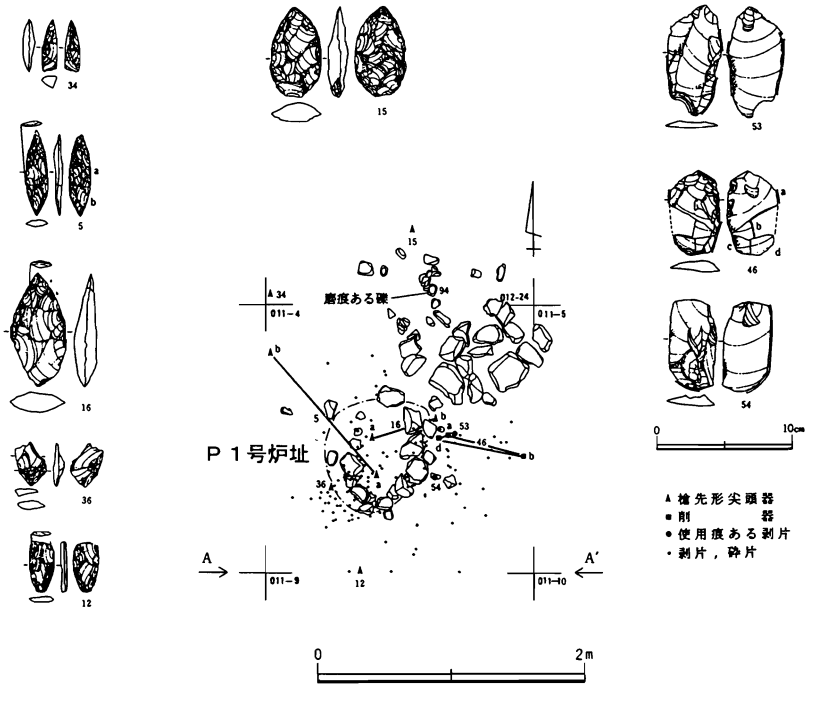
第３図　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層第１ブロック出土石器

第２ブロック（第４図）は、下段中央のやや東寄りに位置し、径約３ｍの広がりをもち、礫群１基を伴う。出土石器は、槍先形尖頭器11（資料数12）、加工痕のある剥片２、礫器１、台石１、剥片・砕片712（平均重量0.82ｇ）の合計728点から構成され、やはりその大半が槍先形尖頭器の製作時に生じた石屑である。石器の分布状態をみると、槍先形尖頭器や加工痕のある剥片・台石・礫器は、やはりブロックの外縁部に分布する傾向が認められる。礫群は、拳大以下の焼け礫13個体24点から構成される小規模なもので、石器の濃密な分布域の南側の比較的散漫な分布域に位置する。



第４図　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層第２ブロック遺物分布図と出土石器

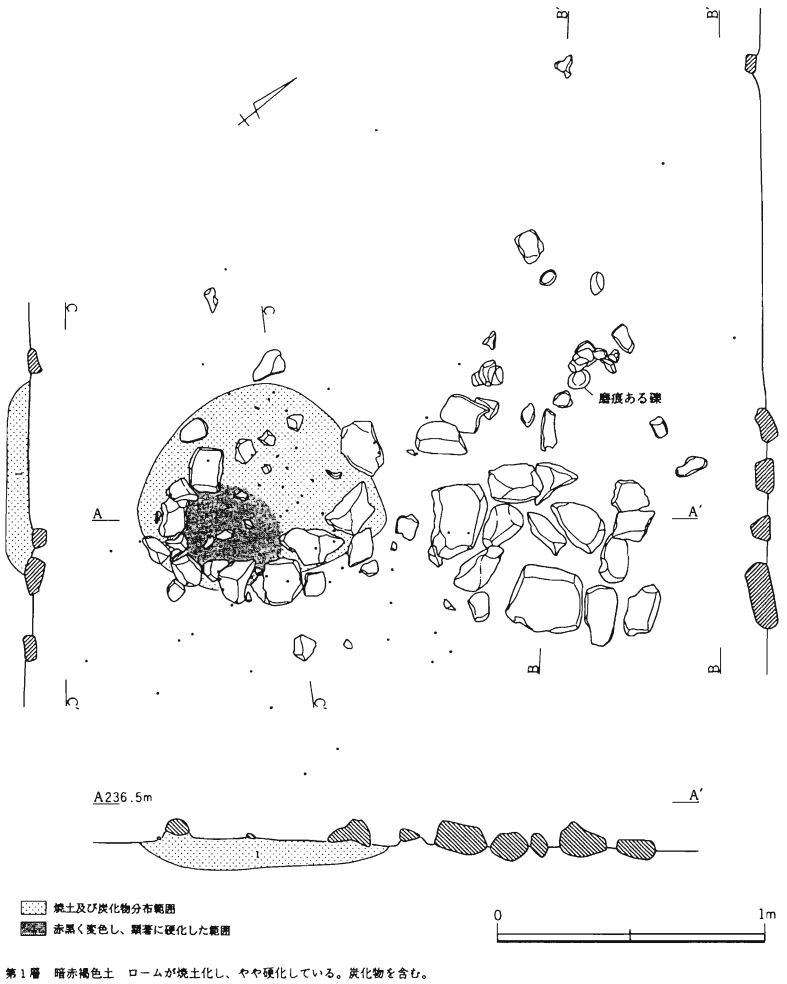
第３ブロック（第５図）は、台地下段の北側縁辺部近くに位置し、径２ｍほどの比較的散漫な石器の分布を示し、石囲い炉・配石・礫群各１基を伴う。出土石器は、槍先形尖頭器６（資料数８）、削器１（資料数４）、使用痕のある剥片２、磨痕のある礫１、剥片・砕片140（平均重量0.76ｇ）の合計155点から構成され、剥片・砕片の点数は比較的少ないものの同じく槍先形尖頭器の製作時に生じた石屑を中心とした内容である。石器



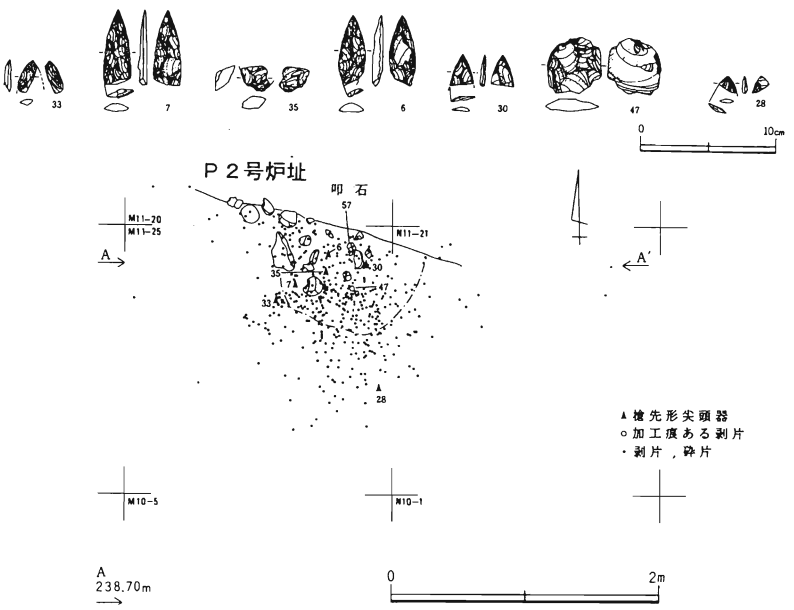
第５図　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層第３ブロック遺物分布図と出土石器

の分布域は、石囲い炉とほぼ重なり、石囲い炉のそばで槍先形尖頭器の製作（加工）を行ったことを示している。また、槍先形尖頭器や削器などの石器は、石囲い炉のすぐそば、あるいはブロックの外縁部から出土している。石囲い炉（第６図）は、1.0m×0.7mの規模をもち、拳大から幼児頭大の川原石20点ほどが段丘崖に向かう北側を開口部としたコの字状もしくはU字状に配置され、石囲いの奥側（南側）が顕著に熱を受けた痕跡を残す。石囲い炉の北には、人頭大から幼児頭大の川原石16点が密集して配置された配石と、拳大の礫19点が散漫に分布する礫群が位置するが、配石の性格は不明である。

第４ブロック（第７図）は、第３ブロックの南西18mの同じく下段の北側縁辺部に位置し、径４mほどの分布範囲を示し、石囲い炉１基を伴う。出土石器は、槍先形尖頭器６、加工痕のある剥片１、叩石１、剥片・砕片475（平均重量0.66ｇ）の合計483点から構成され、他のブロック同様、槍先形尖頭器の製作に関連した石器群である。石器の分布域は、やはり石囲い炉とほぼ重なり、石器の濃密な集



第６図　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層Ｐ１号炉址



第７図　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層第４ブロック遺物分布図と出土石器

中部は炉石のすぐ南側を中心に認められることから、石囲い炉のそばで盛んに槍先形尖頭器の製作を行ったことを示している。石囲い炉は、一部壊されて全容は明らかではないが、焼土の西側に幼児頭大の川原石６点が配置され、その東側焼土範囲の中心部に礫片が分布する。

これら４箇所のブロックは、いずれも槍先形尖頭器の製作を盛んに行っているということで共通している。しかも主要な石材のガラス質黒色安山岩は、礫面を残す剥片が少ないことから原石から剥片剥離を行った形跡は認められず、本遺跡には原石を粗割した大形剥片や槍先形尖頭器の素材となる剥片の状態で持ち込まれたものと考えられる。また、ブロックによって製作した槍先形尖頭器の数量や剥片・砕片の大きさに反映される槍先形尖頭器製作の工程的な違いも認められる。４箇所のブロックのうち1,430点と群を抜いて多量の剥片・砕片を出土した第１ブロックは、製作した槍先形尖頭器が多いだけでなく、素材と考えられる剥片をもつことや、剥片・砕片の平均重量が1.36ｇと他のブロックに比べて２倍近いことから、素材の作出と細部加工の初期工程から最終工程まで一貫して行ったいわば槍先形尖頭器の拠点的な生産場所という性格をもつ。そして、

ブロック	資料No.	石材	槍先形尖頭器	削器	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	剥片	砕片	礫器	叩石	台石	磨痕ある礫	合計
1	2	硬質細粒凝灰岩	2				102	161					265
	3	ガラス質黒色安山岩	16		1	2	239	902					1160
	5	ガラス質黒色安山岩						2					2
	11	硬質中粒凝灰岩					4	1					5
	12	ガラス質黒色安山岩	2				2	10					14
	単	黒曜石					3						3
	単	ガラス質黒色安山岩					2						2
	単	硬質細粒凝灰岩					1						1
	単	硬質中粒凝灰岩					1						1
	計		20	0	1	2	354	1076	0	0	0	0	1453
2	3	ガラス質黒色安山岩	6				32	190					228
	4	ガラス質黒色安山岩	1				13	70					84
	5	ガラス質黒色安山岩	3				40	162					205
	7	ガラス質黒色安山岩	1				53	94					148
	8	ガラス質黒色安山岩	1				22	36					59
	9	ガラス質黒色安山岩			2								2
	単	中粒凝灰岩									1		1
	単	安山岩							1				1
	計		12	0	2	0	160	552	1	0	1	0	728
3	3	ガラス質黒色安山岩	7				28	112					147
	5	ガラス質黒色安山岩	1										1
	10	流紋岩		4		2							6
	単	硬質砂岩										1	1
	計		8	4	0	2	28	112	0	0	0	1	155
4	1	凝灰質頁岩					78	97					175
	3	ガラス質黒色安山岩	6		1		57	225					289
	5	ガラス質黒色安山岩					1	7					8
	6	黒曜石						10					10
	単	安山岩								1			1
	計		6	0	1	0	136	339	0	1	0	0	483
外	3	ガラス質黒色安山岩	1				1						2
	単	硬質細粒凝灰岩								1			1
	単	安山岩								1			1
	計		1	0	0	0	1	0	0	2	0	0	4
合計			47	4	4	4	679	2079	1	3	1	1	2823

第１表　サザランケ遺跡第Ⅲ文化層ブロック別個体別資料表

このブロックだけが礫群や石囲い炉といった居住生活の遺構が残されていないことも注目される。これに対して、第２ブロック～第４ブロックでは、礫群や石囲い炉を伴い、こうした遺構と一部重なるように剥片・砕片の濃密な分布が認められることから、礫群や石囲い炉のそばで槍先形尖頭器の製作（加工）が行われたことを示している。また、各ブロックの活動範囲を考える上で考慮すべき点として、槍先形尖頭器などの石器は、剥片・砕片の濃密な分布の外側を中心に出土する傾向が共通してみられることが指摘される。

個体別資料のあり方からみた各ブロックの関係とユニット

次に、各ブロックの個体別資料のあり方（第１表）をみると、各ブロックとも箱根産を中心とするガラス質黒色安山岩を主要石材としており、特に第２ブロックでは礫器と台石の２点を除く剥片石器のすべてがガラス質黒色安山岩を石材とする。この石材は完全な個体識別が困難であり、単体資料２点を含む７個体が識別されたが、資料№５を除きいずれも分布が１箇所のブロック内に限られる。唯一資料№５は、４箇所のブロックに分布し、各ブロックが関連していることも想定される。一方、ガラス質黒色安山岩以外の石材をみると、第１ブロックでは硬質細粒凝灰岩１個体265点、硬質中粒凝灰岩１個体５点、柏峠産黒曜石３個体３点、第３ブロックでは流紋岩１個体６点、第４ブロックでは凝灰質頁岩1個体175点、和田峠産黒曜石1個体10点がみられ、いずれも分布は１箇所のブロック内に限られ、ブロック間での個体の共有関係は認められない。

それでは、これらの４箇所のブロックの関係をどのように理解したらよいだろうか。各ブロックは、いずれもガラス質黒色安山岩を主要石材として槍先形尖頭器の製作を行っており、その共通した内容と、わずか１例（資料№５）ではあるがブロック間で個体別資料を共有することから同じ集団により残されたブロックと考えられる。しかし、４箇所のブロックは同時に残された一つのユニットとしてとらえられるのか、あるいは回帰的な移動を行って何回かの居住により残された複数のユニットとしてとらえられるのか二通りの想定が可能である。仮に前者とした場合、下段の石囲い炉や礫群を伴う第２～４ブロックは日常的な居住ブロックで、上段に位置する第１ブロックは、各ブロックの構成員が集合して素材から製品に至るまで一貫して製作を行った槍先形尖頭器の拠点的な生産場所と考えることもできる。この場合、このユニットを残した集団は、３家族程度の集団と想定されが、同時に存在した４箇所のブロックは何故大きな距離を隔てて点在しているのかという問題があり、むしろ４箇所のブロックが時間差をおいて残されたとする後者の方が妥当と考えられる。この場合、ブロック間の距離と共伴する遺構の共通性から第３ブロックと第４ブロックが同時に存在したユニットの可能性はあるものの、距離的に隔絶した第１ブロック、第２ブロックは別々のユニットとして捉えられる。そして、これらのユニットを残した集団は、１～２家族程度の小規模な集団と想定される。第１ブロックは、槍先形尖頭器の拠点的な生産場所としての性格をもつユニットであり、石囲い炉や礫群は残されていないが、炭化物の濃密な分布が認められることから一定期間居住したことは十分考えられる。

3　寺尾遺跡第Ⅱ文化層のブロック

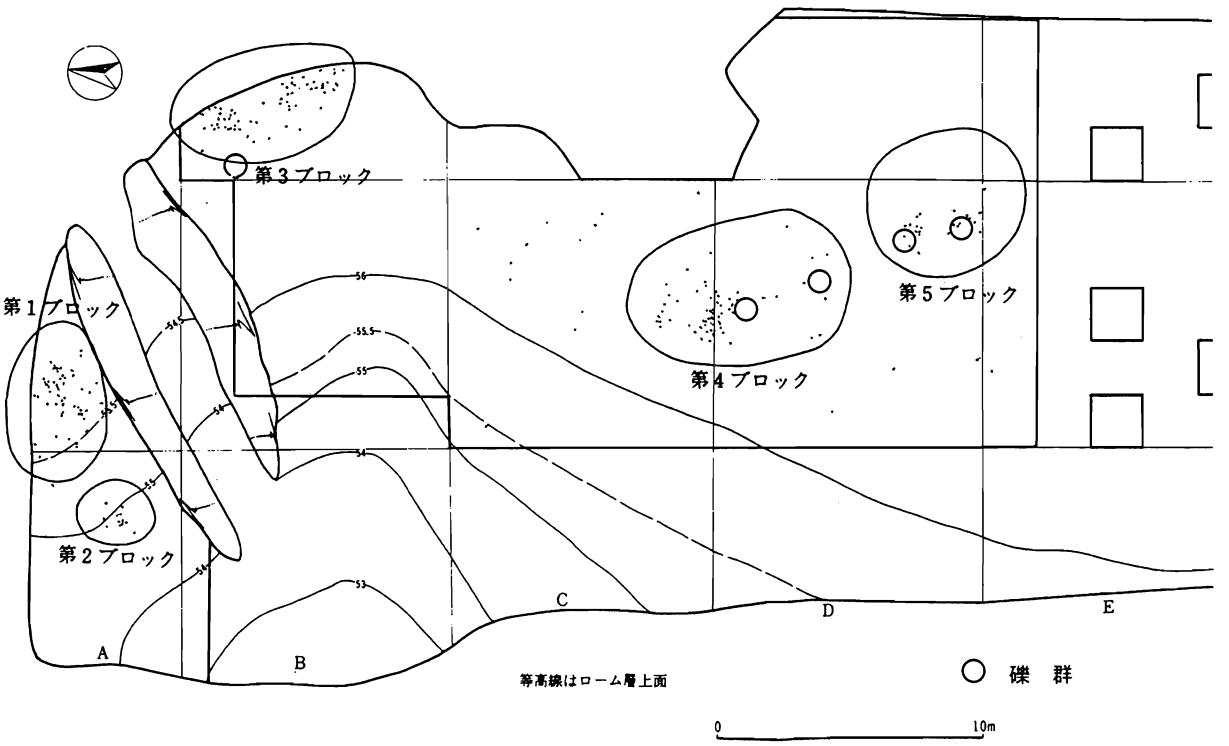
綾瀬市寺尾遺跡は、引地川支流比留川東岸の丘陵尾根上に立地する旧石器時代前半から縄文時代初頭に及ぶ重層遺跡である。第Ⅱ文化層の石器群は、Ｌ１Ｈ層の中位～下位に出土層位をもち、槍先形尖頭器８、ナイフ形石器１、削器６，加工痕のある剥片７、使用痕のある剥片１、剥片・砕片192、石核２の合計 217点の石器から構成される。

第Ⅱ文化層のブロックは、丘陵尾根上の東西20m×南北40mの範囲に、谷地形を囲むように５箇所のブロックが弧状に分布している。各ブロック間の間隔は、１～２mから最大12mまでみられるが、最大距離（12m）をもつ第３ブロックと第４ブロックの間には、ブロック外として取扱った９点の石器や礫が散在しており、この地点も何らかの活動を行った場所と想定される（第８図）。

各ブロックの特徴

石器の分布状況は、第１～４各ブロックでは濃密な分布はみとめられず数十点の石器が比較的散漫に分布しており、第５ブロックは礫群の周辺から９点の石器が出土しただけである。また、遺構としては、第３～５各ブロックから小規模な礫群が検出され、第１ブロックからは礫群としては取り扱っていないが、４点の礫が出土し、そのうちの１点は第３ブロックの礫群構成礫と接合する。

出土石器は、第５ブロックを除き各ブロックとも少数の槍先形尖頭器や削器・加工痕のある剥片等と数十点の剥片・砕片から構成され、槍先形尖頭器を中心とした石器製作作業を行っていたことが確認される。しかし、10点以上の剥片・砕片をもつ個体は各ブロックとも１～２個体（合計７個体）で、最大でも36点に過ぎない。このことから、各ブロックとも槍先形尖頭器の素材作出から細



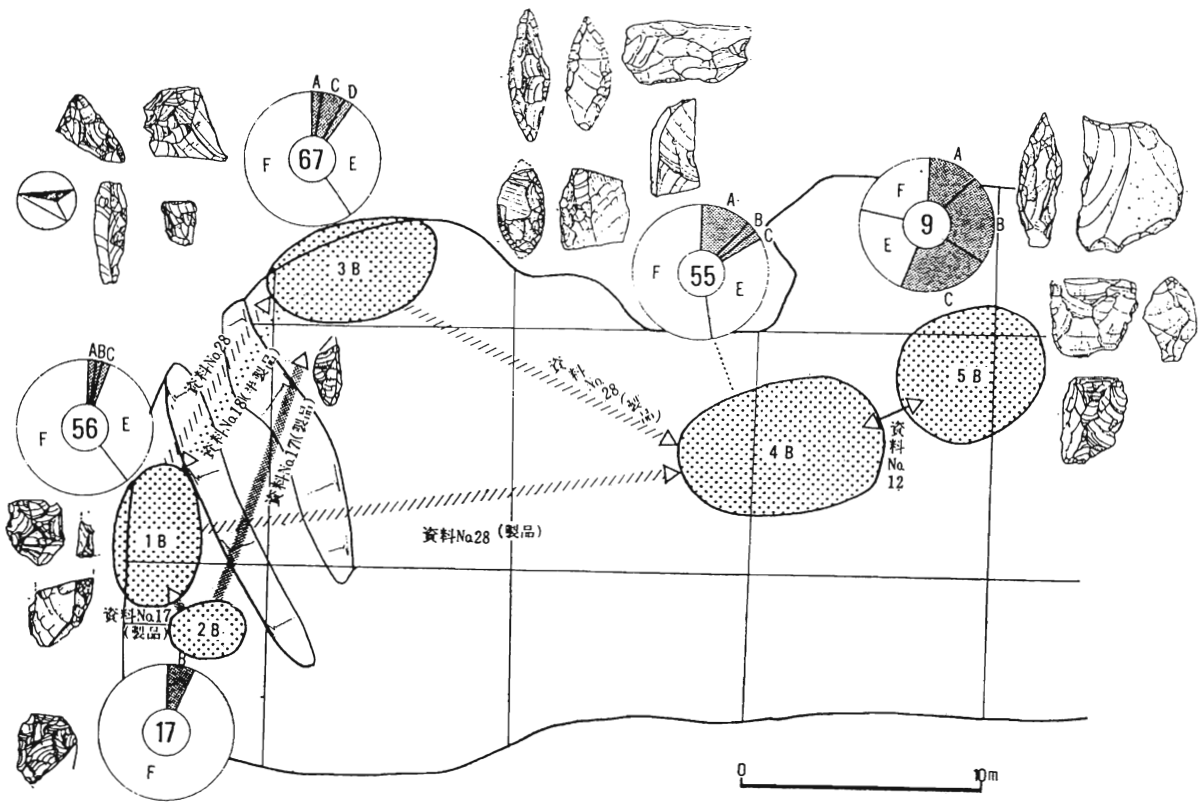
第８図　寺尾遺跡第Ⅱ文化層全体図

部加工の最終工程までの一貫した製作作業を行ってはおらず、個体毎に槍先形尖頭器の素材作出工程、あるいは細部加工の最終工程といった一部の製作工程の作業が行われただけである。一方、第５ブロックの出土石器は、槍先形尖頭器・ナイフ形石器・削器など８個体９点で、いずれも他の遺跡やブロックで製作された石器が持ち込まれ残されたものである。

個体別資料のあり方からみた各ブロックの関係とユニット

寺尾遺跡第Ⅱ文化層の217点の石器群は、石材別にみると、チャート（Ch）10個体（115点）、ホルンフェルス（Ho）５個体(51点)、硬質細粒凝灰岩（HFT）９個体（24点）、黒曜石（Ob）３個体（20点）、ガラス質黒色安山岩（GAn）２個体（７点）の合計29個体の個体別資料に分類される（第２表）。このうち21個体は、１箇所のブロック（個体によりブロック外を含む）に分布するだけであるが、チャート５個体（資料№18～21・28）とガラス質黒色安山岩（資料№８）・硬質細粒凝灰岩（資料№12）・黒曜石（資料№17）各１個体の合計８個体は、それぞれ２箇所から４箇所のブロックに分布し、５箇所のブロック全体が相互に関連していることを示している（第９図）。

個体別資料ごとの石材消費のあり方をみると、まず特定の１ブロック内で石器製作が行われた個体別資料としては、第１ブロックの資料№６（Ho）、第２ブロックの資料№17（Ob）、第４ブロックの資料№12（HFT）・資料№29（Ho）の４個体があり、いずれも槍先形尖頭器の加工を行ってい



凡例　Ａ尖頭器、Ｂ削器、Ｃ加工痕ある剥片、Ｄ使用痕ある剥片、Ｅ剥片、Ｆ砕片
（円グラフ内数字は出土点数を示す）

第９図　寺尾遺跡第Ⅱ文化層のブロックと個体別資料関連図

るが、資料№.６・29の２個体は当該ブロックのみに石器が分布するだけあり、資料№.17は、石器製作を行った第２ブロック以外に第１・５各ブロックから削器や剥片が出土している。また、複数のブロックで石器製作が行われた個体別資料としては、資料№.18（Ch）・資料№.28（Ch）の２個体があり、ともに第１ブロックと第３ブロックで槍先形尖頭器の加工が行われ、そのうち資料№.28は第４ブロックに槍先形尖頭器と削器が搬入されている。一方、資料№.１～５、７～11、15、16、20～23、27の17個体は、遺跡内のどのブロックでも石器製作を行った痕跡が認められず、他の遺跡から石器が持ち込まれたものである（第２表）。

このように、寺尾遺跡第Ⅱ文化層の５箇所のブロックは、各ブロック間で複数の個体別資料の共有関係が認められ、同時に残された一つのユニットとして理解される。第１～４各ブロックでは石材１個体～３個体の小規模な石器の加工が行われてブロック間で石器の供給・交換が行われ、第５ブロックでは他のブロックや遺跡で製作された石器が持ち込まれ、使用されていた。

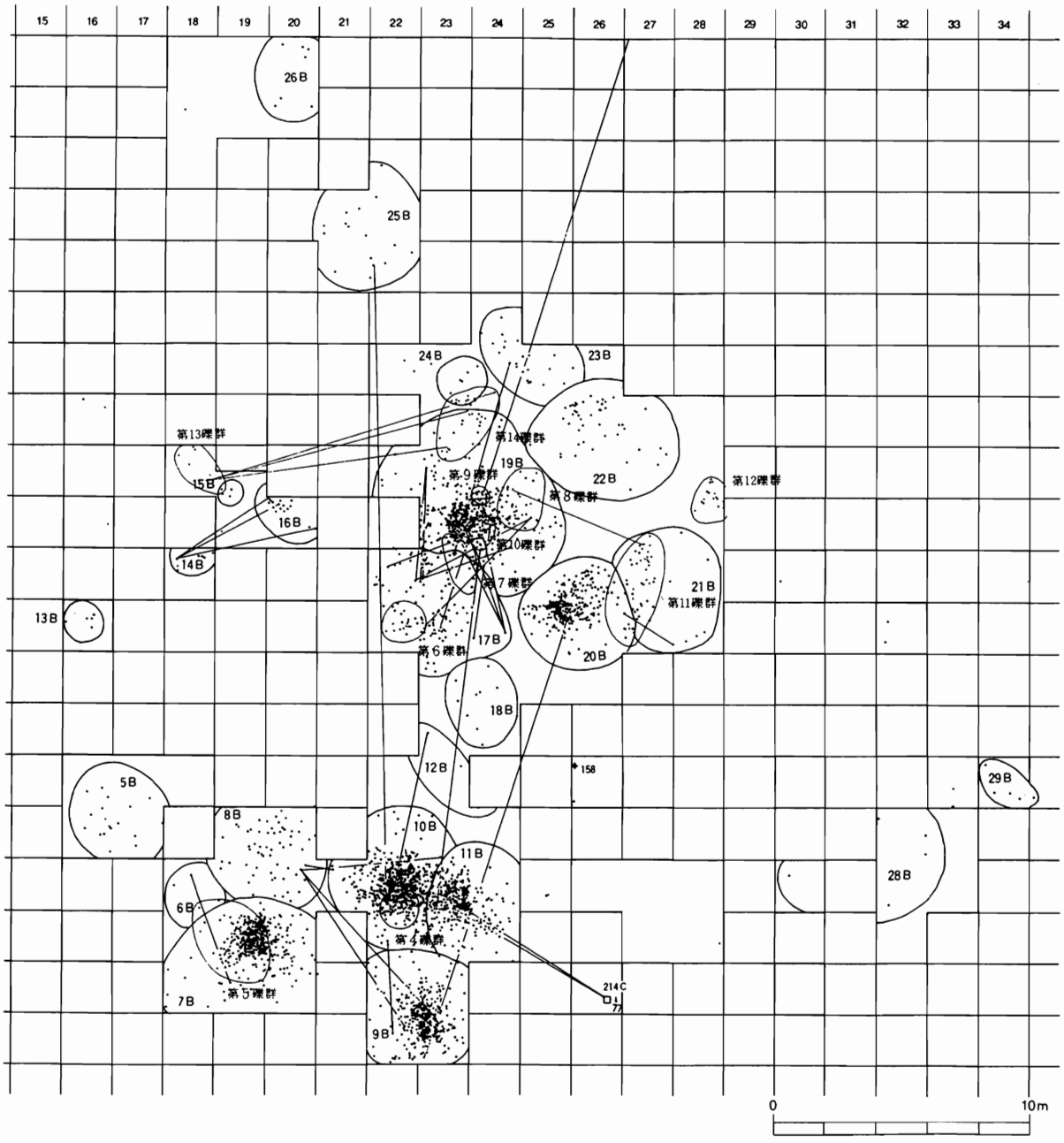
ブロック	資料№.	石材	槍先形尖頭器	ナイフ形石器	削器	加工痕ある剥片	使用痕ある剥片	剥片	砕片	石核	合計
1	6	ホルンフェルス						3	9		12
	7	ホルンフェルス						2	1		3
	17	黒曜石			1						1
	18	チャート				1		1	4		6
	19	チャート							2		2
	23	チャート						1			1
	24	チャート							1		1
	25	チャート							1		1
	28	チャート	1					11	16	1	29
	計		1	0	1	1	0	18	34	1	56
2	2	硬質細粒凝灰岩							1		1
	17	黒曜石			1				14		15
	28	チャート							1		1
	計		0	0	1	0	0	0	16	0	17
3	8	ガラス質黒色安山岩							1		1
	18	チャート	1			1		7	29		38
	19	チャート					1	3			4
	20	チャート				1					1
	21	チャート						1			1
	26	チャート							1		1
	28	チャート						10	10	1	21
	計		1	0	0	2	1	21	41	1	67
4	12	硬質細粒凝灰岩	1						10		11
	13	ガラス質黒色安山岩				1			3		4
	14	硬質細粒凝灰岩							1		1
	20	チャート						1			1
	27	硬質細粒凝灰岩	1								1
	28	チャート	1		1			3			5
	29	ホルンフェルス	1					9	22		32
	計		4	0	1	1	0	13	36	0	55
5	8	ガラス質黒色安山岩				1		1			2
	9	ホルンフェルス			1						1
	11	硬質細粒凝灰岩	1								1
	12	硬質細粒凝灰岩							1		1
	15	黒曜石				1					1
	17	黒曜石						1			1
	21	チャート							1		1
	22	チャート			1						1
	計		1	0	2	2	0	2	2	0	9
外	1	硬質細粒凝灰岩						3			3
	2	硬質細粒凝灰岩						2			2
	3	硬質細粒凝灰岩						1			1
	4	硬質細粒凝灰岩			1						1
	5	硬質細粒凝灰岩						1			1
	6	ホルンフェルス						1			1
	10	ホルンフェルス				1					1
	16	黒曜石	1								1
	17	黒曜石		1							1
	29	ホルンフェルス							1		1
	計		1	1	1	1	0	8	1	0	13
合計			8	1	6	7	1	62	130	2	217

第２表　寺尾遺跡第Ⅱ文化層ブロック別個体別資料表

4　槍先形尖頭器文化期のムラ

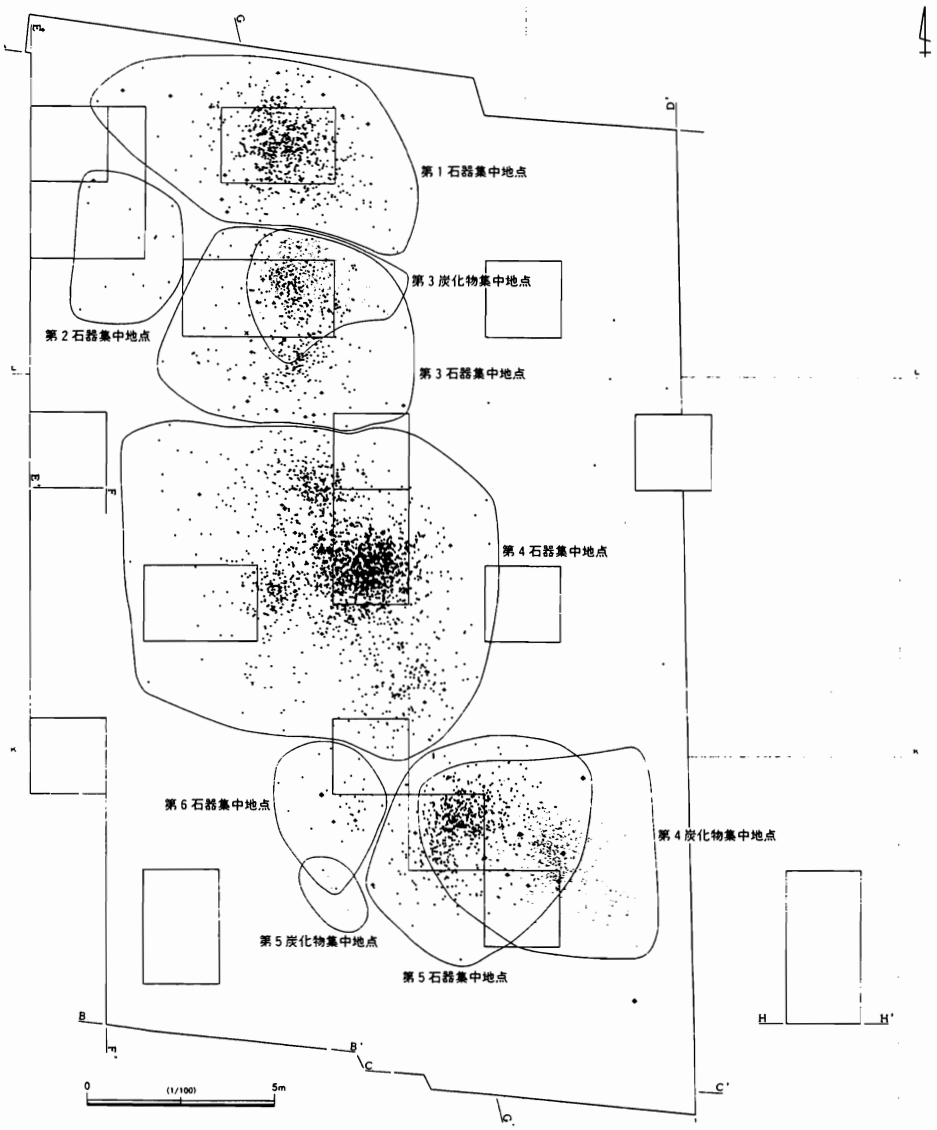
ここで取り上げた宮ヶ瀬遺跡群サザランケ遺跡第Ⅲ文化層と寺尾遺跡第Ⅱ文化層は、各ブロックの遺物分布状態や個体別資料のあり方が対照的な内容を示している。

まず、出土層位から先行すると考えられる寺尾遺跡第Ⅱ文化層は、礫群３基（第４・５各ブロックの礫群は間隔を開けて分布しており、５基と捉えることもできる。）を伴い、小規模な石器製作を行った４箇所のブロックと石器製作の痕跡を残さない１箇所のブロックから構成される一つのユニットで、石器石材もチャート・ホルンフェルス・硬質細粒凝灰岩・黒曜石・ガラス質黒色安山岩など多様である。相模野台地の槍先形尖頭器石器群を出土する遺跡のブロックとユニットのあり方



第10図　月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅳ文化層２区の遺物分布図

をみると、広範囲の調査が行われた大和市月見野遺跡群上野遺跡第１地点第Ⅳ文化層（第10図）では、台地縁辺部の埋没谷の縁に沿った南北130m×東西40mの範囲から37箇所のブロックと14基の礫群が検出されている。出土石器は、槍先形尖頭器77点（資料数87）をはじめ合計3,608点（同3,632）であり、37箇所のブロックは個体別資料の共有関係等により７つのユニット（ブロック群）に区分されている。各ユニットは、①石器製作の痕跡がみられない単一のブロックのみで構成されるもの（遺跡の南端に位置し、隣接地点との関係が想定されている）、②寺尾遺跡第Ⅱ文化層同様、石器製作の痕跡がみられないブロックと小規模な石器製作を行ったブロック３～４箇所から構成されるもの、③ ②に加え集中的に多量の槍先形尖頭器の製作を行ったブロックを含め６箇所～14箇所のブロックから構成されるものに区分され、①が２ユニット、②が２ユニット、③が３ユニット存在する。また、相模原市中村遺跡第Ⅲ文化層では、道路予定地の80m×８mの範囲から13箇所のブロックと礫群２基が検出され、槍先形尖頭器42点をはじめ1,064点の石器が出土しており、13の



第11図　用田南原遺跡第Ⅱ文化層全体図

ブロックは個体別資料の共有関係等により２ユニットないし３ユニットとしてとらえられている。これらのユニットも、前述の②及び③に相当する内容を示している。そして上野遺跡第１地点第Ⅳ文化層と中村遺跡第Ⅲ文化層は、ともに寺尾遺跡第Ⅱ文化層と同じく多様な石材構成を示す。このように、寺尾遺跡第Ⅱ文化層は、わずか１ユニットではあるが、ブロックのあり方や石材構成から槍先形尖頭器文化期（相模野第Ｖ期）の標準的な遺跡（ムラ）としてとらえることができる。それは、前段階のナイフ形石器文化期後半と共通した数ブロックから構成されるユニットである。

一方、層位的に寺尾遺跡第Ⅱ文化層に後続するサザランケ遺跡第Ⅲ文化層は、１ないし２ブロックからなるユニット（ムラ）が回帰的な移動による複数回の居住により残された遺跡としてとらえられ、ユニットの規模は、寺尾遺跡第Ⅱ文化層などに比べて小規模になっている。そして、その中には、槍先形尖頭器製作の拠点的な性格をもつユニットも認められる。同様の遺跡としては、やはり出土層位がＬ１Ｈ層上部～中位ととらえられる藤沢市用田南原遺跡第Ⅱ文化層があり、南北25m×東西15mの範囲に６箇所のブロックが南北方向に互いに接するように帯状に分布し（第11図）、槍先形尖頭器77点（資料数98）、剥片・砕片4,334点など合計4,420点の石器が出土している。この遺跡も石材の98%がガラス質黒色安山岩で占められ、粗割した大形剥片や槍先形尖頭器の素材となる剥片を多量に持ち込み、４箇所のブロックにおいて細部加工の初期工程から最終工程まで一貫した製作作業が行われている。そして、槍先形尖頭器の明瞭な製作痕跡を残さない２箇所のブロックを含めブロック間の接合関係が認められ、６箇所のブロックが同時に存在した一つのユニットとしてとらえられる。まさに槍先形尖頭器製作の拠点的な性格をもつユニットである。寺尾遺跡第Ⅱ文化層などに後続する槍先形尖頭器石器群としては、ほかに月見野第ⅣＡ遺跡上層（Ｌ１Ｈ層上部）や栗原中丸遺跡第Ⅲ文化層（Ｂ０層）があり、ともにガラス質黒色安山岩を主要石材とする。このうち栗原中丸遺跡第Ⅲ文化層は、槍先形尖頭器の完成品が単独で７点ほど出土したもので槍先形尖頭器を製作した痕跡を残さない。こうした遺跡の存在は、その背景として槍先形尖頭器製作の拠点的な遺跡が存在し、完成した槍先形尖頭器の供給が行われていたことを示している。このように、槍先形尖頭器文化期後半には、上野遺跡第１地点第Ⅳ文化層・中村遺跡第Ⅲ文化層・寺尾遺跡第Ⅱ文化層などによって示される槍先形尖頭器文化期の標準的な遺跡（ムラ）のあり方が大きく変化したと考えられる。

参考文献

神奈川県教育委員会 1980 『寺尾遺跡』 神奈川県埋蔵文化財調査報告 18
神奈川県立埋蔵文化財センター 1984 『栗原中丸遺跡』 神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告 3
(財)かながわ考古学財団 1996 『宮ヶ瀬遺跡群 Ⅵ サザランケ（№12）遺跡』 かながわ考古学財団調査報告 8
(財)かながわ考古学財団 2004 『用田南原遺跡遺跡』 かながわ考古学財団調査報告 168
鈴木次郎 1999 「寺尾・栗原中丸両遺跡の石器石材の再検討」『かながわの考古学 研究紀要』4
中村遺跡発掘調査団 1987 『中村遺跡』
大和市教育委員会 1986 『月見野遺跡群上野遺跡第１地点』 大和市文化財調査報告書 21

細石刃文化期のムラ

―細石器石器群の諸活動―

砂田　佳弘

1　はじめに

列島の細石器研究は傘寿を迎えようとしている。江上波夫・水野清一等による microlith の訳出による「細石器」、そして八幡一郎らによる細石器(中石器)存否論をひも解くまでも無く、岩宿の発見こそ「細石器」と土器の共伴の有無を明らかにしようとした戦前からの構想の賜物であった。

1953年、矢出川遺跡の発見後、「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」において、根の上・栗原・曽根等「小形石器の一群を、縄文文化とは別の、無土器文化の伝統の中において理解したい」とし、矢出川の石器を細石刃(small-blade)、細石核(micro-core)、幾何学形態の細石器(geometric　microlith)を伴わない、沖積世初頭で、土器・石鏃を伴わない、縄文時代に先行する石器文化(芹澤1954)とした。その後、井島Ⅰ(上層:細刃器)、井島Ⅱ(下層:幾何学形態の細石器)の提示(鎌木1957)、さらに荒屋型彫器の発見は矢出川対荒屋を西日本対東日本という図式(芹澤1959b)に対応させようとした。また、北九州と瀬戸内の資料(鎌木1959)から①船底形、②円錐形、半円錐、③台形石器など幾何学形態の細石器の三つにグルーピングされ、①と②が「北九州のかなり接近した地域に、遺跡を異にして発見されるということは、両石器群が同時代的な存在ではない」とし、矢出川と荒屋の組成差とは異なり、石器文化の編年を細石核の形態に求めようとした。この意識の下1960年以降の福井洞穴の発掘において、細石器に土器が伴い、細石核が半円錐(第4層)から船底(第3・2層)という層位的な変遷を事実として示したのである。同時期、北海道では白滝遺跡群の調査から湧別技法(吉崎 1961)、が提唱されるが、同時期置戸遺跡(藤川 1959)や蒙古ホロン・バイルの資料(佐藤 1960)から「両面石器」を利用した「石核」を想定していた。

爾来半世紀、細石器研究の基本的な構造が提示された後、細石核の形態、型式、技法ならびに細石刃製作工程の追及は母岩別資料、個体別資料、接合資料ならびに観察要件の多様化によって技術論的な研究は大きく進展した。さらに、姶良 Tn 火山灰(AT)の再発見(町田・新井 1976)同様、恵庭 a 降下軽石堆積物(En-a)(小野・平川 1975)を鍵層とした北海道島における柏台、美利河、白滝遺跡群をはじめとする石器群の内容と変遷は道島内石器研究の画期をもたらした。また、九州島や四国島における新たな資料群の蓄積は、畿内・中国地方における削片系細石器石器群の発見もあいまって、近年の AMS 分析による年代測定によっても列島と日本海沿岸地域との細石器石器群の編年対比も進展している。

2　相模野の細石器(砂田1988, 1990, 1993ab, 1994ab, 1996ab, 1997ab, 1999, 2001, 2003, 2007)

今回の課題となるキーワードは「分布状態、細石刃生産、その他の活動、礫器、他器種、空間利用」等である。分析対象としたのは68遺跡１２７石器群であり、同一遺跡での所謂重複文化層位単位である。ただし、どの石器群にも細石器関連遺物が出土しているわけではなく、相模野台地を中心とする神奈川県内における細石器石器群が出土する同一層位の石器群である。そのうち細石核、細石刃が出土するのは57遺跡石器群であり、23(1988年)→44(2001年)→57(2010年)と分析対象が漸増推移している。

従来の視点・論点は、１.細石核のみによる型式設定の問題点と「細石刃製作工程」による分析方法の確立。２.細石刃の大形化、石材種・原産地と付帯施設の変遷。３.細石刃製作工程の出現過程。そして、４.の細石器遺跡の分布推移であった。今回の課題は４.の遺跡内における集中地点の分布状況と器種組成の差異等から当該期の活動と生業を探ろうとする。

細石刃の大きさは、出現期の長さ１センチ余りから、最終末には２センチ半と、幅、重さともに倍化している。ただし、この長さ倍増は漸移的とは言え、全文化層位を相対化した上での全体的な傾向を示すにすぎない。中でも、L1H 層上部の柏ケ谷長ヲサ－Ⅳの細石刃の大きさは、ＢＢ０層上位の値であり、BB ０下底の上野第１－ⅢもＬ１Ｓ層下部の値である。こうした古期大形細石刃に対して、L1S 下部の下鶴間長堀－ⅠやＬ１Ｓ層下部の栗原中丸－Ⅱの黒曜石製細石刃などはＢＢ０層下半部に相当する長さであり、L1S 層最上面の上和田城山－Ⅰの細石刃は新期小形も存在する。下鶴間長堀－Ⅰでは、非黒曜石製は黒曜石製に比較し長大だが他遺跡よりも短小である。

ただし、新期細石器遺跡同一文化層位の中でも、FBL 層の三ノ宮・下谷戸－Ⅰはガラス質黒色安山岩製の細石刃が長大であるものの、総ての黒曜石製細石刃が小形なのではなく、大形から小形まで９つに分類され、硬質頁岩製が小形であるほかは、全体は中形の大きさである(三瓶 1999)。

細石器の石材原産地は、時期的変遷とともにその原産地とその組み合わせが変容するが、吉岡遺跡群Ｂ区が19,850CalBP(Ｌ１Ｈ層上部)、宮ケ瀬 No.11遺跡が15,425 CalBP(Ｌ１Ｓ上面)として、実年代幅で約５千年間が細石器石器群の消長と言えよう(砂田 1999)。

第１段階のＬ１Ｈ層上部では、伊東から中伊豆を結ぶ柏峠の黒曜石を限定的に利用する。

第２段階のＬ１Ｈ層上面は、伊豆七島神津島産の黒曜石が加わり細石刃の大形化を生み出す要因となる。また、ＢＢ０層下位で信州系の黒曜石を新採用し、和田峠産を主体に麦草峠、柏峠産が混在する。

第３段階のＢＢ０層中位からＬ１Ｓ層下部で、神津島産黒曜石を中心に、ＢＢ０層中位ではチャート、Ｌ１Ｓ層下部ではさらに凝灰岩が加わる。

第４段階・第５段階のＬ１Ｓ層上部以降は、ガラス質黒色安山岩、凝灰岩、チャート、粘板岩、砂岩を使用する。L1S 層の寺尾－Ⅰの細石刃1点は神津島産黒曜石製である(鈴木 1999)。

相模野細石器の層位的時期的な石材利用のうち、とりわけ L1H 層上部からＢ０層下部間に至る

黒曜石原産地の変遷は、伊豆系→伊豆系・信州系→神津島系→信州系・伊豆系→神津島系と目まぐるしい。

その間、細石刃製作工程の打面調整、打面再生といった石核調整が目立ってくる。とりわけ神津島系黒曜石の利用を契機に遺跡数の増加、細石刃製作工程の調整の多様性と、石器群の分布状態や遺構の遺存状態に変化を認めることができ、また、全ての遺跡型（砂田 1997b）が出そろうこととなる。

L1H 層上部に始まる相模野細石器の前段階には、細石刃様剥片や類細石刃石核と呼称できる類細石器石器群の一群が連綿と存在する。列島初源期 B5層吉岡遺跡群 D 区チャート製に始まり、B4層中位同 C 区ガラス質流紋岩製、B1層中位栗原中丸Ⅴ黒曜石製・凝灰岩製、B1層上部上野1-Ⅴ黒曜石製・チャート製、B1層上面中村Ⅳ黒曜石製、B1直上寺尾Ⅲ黒曜石製、B1上部代官山Ⅳ黒曜石製、深見諏訪山Ⅲ黒曜石製、L1H 中位上野1-Ⅳ安山岩製等々である。

かつて、列島内での原遺跡や百花台遺跡など発見期で議論された、台形石器の帰属問題、ナイフ形石器の小形化か細石器化か幾何形化などといった議論に通じるが、ナイフ形石器自体を細石器として捉えなおす議論もまた必要であろう。それは細石刃の発生要因とも関連し、時期的には小形ナイフ形石器をナイフ形石器の範疇でなく、細石器として議論すべきかである。細石器（幾何形ナイフ形石器・台形石器）と細石刃といった異器種間相互の検討はあらためて議論せざるを得ない。日本の細石器研究が細石刃（マイクロブレイド）を中心進展した経緯があるものの、所謂日本列島における石器研究、石器の形態・形式・型式の見直し、これら石器群・遺構群の境界の問題である。

3　集中地点の平面分布（砂田 2001, 2003）

出現期 L1H 層上部の吉岡遺跡群Ｂ区は、北側に開口部のある径４メートル前後で分布核のある集中地点が４カ所、代官山－Ⅲでは西北方向に開口する径２メートル～３メートルの分布核を持つ集中地点が３～４カ所隣接する。また、三浦半島南部西海岸に位置する長井台地には相模湾を望む「海の手」に打木原遺跡 SX02・03・04が位置する。相模野台地 L1H 層上位相当層で南北方向に開口する径３メートル前後の集中地点３カ所が隣接する（佐藤 2002）。

これら相模野細石器出現期の集中地点は数点の礫や疎らな集中を見せるが、直前の L1H 層中位～下位では礫群中心に配石が稀に伴う。直後の L1H 層上面以降には配石や大形礫が目立ち礫や礫群が伴う。集中地点数は出現期細石器石器群直後で単一集中、以降は単一～10地点以上である。

ＢＢ０層下部の田名塩田遺跡群 B 地区第Ⅰ文化層には、1.7×1.7メートルのコ字状の南側と東西に開口する配礫から東側へ東西６メートル、南北４メートルの範囲に石器群が分布する。配礫内は外部より遺物が散漫となる（麻生 1999）。石器群の分布が一箇所に広がり、大形礫の配置もこの時期の特徴である。

BB ０層下底部の宮ケ瀬サザランケⅡ b では西側に、ＢＢ０層上面の台山－Ⅱでは北側に希薄な

集中地点を付属するようである。また、単独あるいは集中地点として分離できない場合も含め径３～８メートルと、出現期の分布範囲に比較し広範である。しかし、代官山－ⅢのＢ集中、吉岡Ｂ区の第２集中など、平面分布の形態がダルマ状態を呈するように、分布の重複状態を示す集中地点は、分布の切り合い関係の分析と判別が可能かもしれない。Ｌ１Ｓ層下部の下鶴間長堀－Ｉは断続的時間を示す分布状態の一様態であろう。さらに、L1H 層上部の柏ケ谷長ヲサ－Ⅳが径４メートルの単独分布であることもＢＢ０層以降の集中地点に類似し、石材組成の相違はもとより、出現期細石器石器群との分布状態を画している。

４　おわりに

各遺跡における石器群・礫群の集中地点と、その器種・石材組成の差異等から細石器石器群の活動と生業を如何に明らかにするか。判断材料は、出土層位、遺跡型、集中地点数、分布範囲、礫群構成、器種組成、石材組成であり、これら各属性の組合せと変遷である。出土層位が相模野基本土層の自然堆積層内における生活面としての文化層位の把握、さらには出土遺物群を構成する石器群・礫群と文化層位の整合性が必要である。遺跡型は河川と遺跡立地の状態と方向であり、A ～ Gの7区分である。山地、丘陵、海浜、河川、湧水地、台地の張り出しなどから日照、利水、配水、障害物、緩斜面、急斜面などを読み解く手がかりである。集中地点数・分布範囲・礫群･配礫は発掘調査上の制限もあろうが、各時期の行動類型の一端を示そう。器種組成のみで器種単位の詳細な観察無くしては生業活動に迫ることなど不可能である。出土石器の母岩別・個体別・接合資料分析と使用痕跡や付着物分析との切り合い関係と遺存位置、ハンマーモード(鈴木・五十嵐ほか2002)の抽出などが必要である。

ここでは器種組成から想定される場として、1.細石刃・細石核・細石核素材、2.槍先形尖頭器を狩猟具・加工具としての場、3.礫器、打製石斧を大きな身振りとしての加工具の場、4.加工痕、使用痕を有する剥片・掻器・削器・磨石・台石を小さな身振りとしての加工具の場、4.砕片を石器製作の場、5.石材組成の偏在性の有無から各時期の場の特徴を抽出した。さらには、対象遺跡の当時の気温、地形、動物相、植物相といった自然環境復元のための自然科学分析データの集約も不可欠である。

以下、相模野細石器石器群の出現から消滅にともなう各種属性の特徴を示したが、各時期の遺構と器種の関係、場の機能の想定と設定は分析過程にある。編集の鈴木次郎さんに感謝致します。

１　細石器出現直前期のL1H層下位から中位

①槍先形尖頭器、小さな身振りの加工、石器製作を行うが、槍先形尖頭器の多寡と小さな身振りの加工具の多寡が比例する。また、集中地点数と広がりの大きさも比例するが、４メートル前後の５集中地点数までが多い。ただし、礫群は散漫である。

	遺跡名	層位	遺跡型	集中地点	分布範囲		総計	細石刃	細石核	細核素	削片	礫器	石斧	叩石	調整器	砕片	残核	剥片類	尖頭器	石鏃	ナイフ	加工剥片	使用剥片	掻器	削器	錐器	彫器	楔	磨石	台石	剥片	調整剥片	原材	その他
1	吉岡B区	L1HU	B	4:谷頭部	径6～8m		4620	1022	72	12		2	1	7		2118			5	1											1316		64	
2	柏ケ谷長ヲサーⅣ	L1HU	C	1	径4～5m		718	155	2			3				271	4					4	2		2			2			269		4	
3	用田鳥居前－Ⅰ	L1S-L1H	E	3	8×9、6×9、7×13		441	172	4			1				146															117			1
4	上草柳第1－Ⅰ	BBOM	G	2	径5～8m		499	147	6	5		1			2	107	4		4		1	4	4	1	3						79	131		
5	宮ヶ瀬ｻｻﾞﾗﾝｹｰⅡb	BBOL	C	2	径2～4m		230	67	12		6	1		3		84							12		2						40		3	
6	用田大河内	L1S-L1H	E	1	径2m	礫10点	62	10				2				12	2								1						35			
7	三ノ宮・下谷戸－Ⅲ	BB0M	B	1	18×14m	配礫1:28点	7065	825	36			8		7			51	3050				110	49	1	7	2	1	16	1	10	2757	134		
8	上野第1－Ⅲ－Ⅱ	BBOM	F	16	径2～6m	礫3点	304	95	5	2		1					1						28	1	3						168			
9	栗原中丸Ⅲ	BBOM	A	1	3×5m	散漫な礫群1	13	1				1		1					7												3			
10	長堀南－Ⅱ	L1HUU	E		散漫		14	1				3							3			1	1								2	2		1
11	上野第1－Ⅲ－Ⅲ	BBOLL	F	3	径2m	破砕礫1点体	547	5	4			14										1	4								518		1	
12	座間市栗原中丸	BBOLl	A	5	径2～6m		93	3	3			8											5								74			
13	上野第3－Ⅰ	BBOLl	A			大形礫6点、破砕礫45点	6		1			1											1								3			
14	宮ヶ瀬中原－Ⅱ	BBOL	E	1	2～5m		21					4		2			2												1		12			
15	宮ヶ瀬ｻｻﾞﾗﾝｹｰⅡa	BBOU-L	C				7					4		2																	1			
16	宮ヶ瀬ｻｻﾞﾗﾝｹｰⅢ	L1HU	C	4(2)	径2～6m	礫片2点	2823					1		3		2079			47			4	4		4					1	679			1
17	上野第5－Ⅲ	L1HU	F				1035					4		1		476	11		26		3	52	13	1					4		444			
18	代官山－Ⅲ	L1HU	D	6	6×9m	疎らな礫集中3、32点	1497	461	36	8				1		689	1					3	3	1							72	216	6	
19	打木原－SX02・03・04	L1SL-L1H	A	3	径2×3m	礫3点	626	150	11							269	8					4	8								22	150	4	
20	上草柳第3中央－Ⅰ	BBOLl	A	1	6×7m	大形礫6点、破砕礫45点	418	96	7	2						86	2				2	1	10		3			2			86	121		
21	吉岡遺跡群D区	L1H	B	2	径1.5,1.5×3.5m		62	1		1						23	2	27			1		2		3	1						1		
22	かしわ台駅前－Ⅱ	L1HUU	E	1:南部集中	6×2m	礫群:5～20点体の焼け礫	121	93	1							12															8	7		
23	上野第1－Ⅲ－Ⅰ	BBOLL	F	6	径2～7m		537	225	5													8	15		2		1				281			
24	かしわ台駅前Ⅰ	BBOM	E	1:西南側集中	7～8m		199	193	5								1																	
25	上和田城山Ⅱ－4区	BBOLl	B	3	各4×8m	礫器と調整剥片	89	44	3					2			2		8		2		2	5	2	3	1			1	1	6	7	
26	横山坂	BBOLL	G	3	径4m前後	礫52点	156	11	2								1	81	1			1		1				1						57
27	中村Ⅱ	BBOM	F	1	4×6m		248	10	5								1				1		12	2				1		1	212		3	
28	栗原中谷Ⅰ	BBOM	A	1	1.4×5m	配石1	10	4									1														5			
29	上和田城山Ⅱ－1区－1ブ	BBOLL	B	1		礫群(16点体)に伴う	4	3																			1				0			
30	慶応SFC－Ⅰ	L1HUU	D	2:隣接	径3m	石囲い炉2基	29		1										1			1									26			
31	上野第3－Ⅱ	L1HU	F	6	径4m	礫群1:29点	952												18		1	1	10			1	2				919			
32	上和田城山Ⅱ－1区－2・3ブ	BBOM	B		3×5m	炉址状	3												1		1						1				0			
33	早川天神森－Ⅱ	BBOLL	D	2	2×5m		4									2			1												1			
34	柏ケ谷長ヲサーⅢ	BBOL	C	1	径16m	完形礫1点、礫片7点	39										1		1								1				36			
35	上草柳第3西	L1HUU	A				2																								2			
36	上草柳第3東－Ⅰ	L1HUU	A	1	径3m	礫群:46点の焼け礫で構成	22										1														21			
37	田名塩田原	BBOM	G			配石1基:28点	0																											
38	川尻－Ⅱ	BBOM	F			礫群2、配石2	2																											2
39	葛原滝谷－Ⅰ	BBOL	E		径4m		33											30					2		1									
			総計	92			23551	3794	221	30	6	59	1	29	2	6374	96	3188	123	1	12	195	187	13	33	7	8	22	6	13	8209	768	92	62

表　出現期細石器石器群属性

②配石・炉址には石器群が分布しない。

③礫器・打製石斧という大きな身振りの加工が伴わない。

④安山岩、黒曜石、チャートと粘板岩、凝灰岩、砂岩が主たる石材。

2　L1H 層上部の細石器出現後から BB0層中部

①細石器に槍先形尖頭器が伴うが、細石器が圧倒的であり、石器製作の有無に関わらず礫器が伴い、小さな身振りの加工も活発である。BB ０層下部から配礫や大形礫が目立ってくる。

②細石器、槍先形尖頭器、礫器はそれぞれで小さな身振りの加工を伴う。

③細石器のみ、礫器のみの残され方がある。

④黒曜石、安山岩と凝灰岩、砂岩が主たる石材である。

3　BB ０層上部から L1S 層中部

①細石器に槍先形尖頭器が僅かに伴うが､礫器と小さな身振りの加工は石器製作に伴う方が多い。集中地点数は10未満、分布範囲は10メートルまでで５メートル未満が多い。

②細石器、槍先形尖頭器、礫器の順番で小さな身振りの加工と結び付く傾向がある。

③前時期に比較し大きな身振り小さな身振りの加工具が増大し、打製石斧が加わる。

④配礫や土坑等の施設のみが設置される。

⑤黒曜石、安山岩、凝灰岩とチャート、頁岩、ﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ、砂岩、粘板岩が主たる石材である。

4　L1S 層上部以降

①槍先形尖頭器と大きな身振りと小さな身振りの加工具に石器製作の有無が結びつき、有舌尖頭器、石鏃が参入する。集中地点数とその広がり方も多様であり、礫群は散漫貧弱となる。

②礫器を伴わない①の活動がある。

③槍先形尖頭器のみの活動があり、土器を伴わない。

④石斧、槍先形尖頭器の増大、細石器の激減と礫器の減少がある。

⑤安山岩、凝灰岩、砂岩とﾎﾙﾝﾌｪﾙｽ、粘板岩、チャート、黒曜石、頁岩が主たる石材である。

(2010. 2. 11)

参考・引用文献

麻生順司 1999「B地区の調査」『神奈川県相模原市田名塩田遺跡群Ⅰ発掘調査報告書』307-337頁

小野有五･平川一臣 1975「日高山脈における恵庭a降下軽石堆積物の発見とその意義」地質学雑誌81-5　333-334頁

鹿又喜隆2007「細石器集団の移動と生業活動―細石刃の二次加工にみる遺跡間の関係から―」考古学談叢131-149頁

鎌木義昌1957「西日本の無土器文化 特に瀬戸内を中心として」私たちの考古学13 15-22頁

鎌木義昌1959「細石器問題の進展(三)」貝塚 88　1頁

栗原伸好 2002『かながわ考古学財団調査報告128用田鳥居前遺跡』824頁

佐藤明生 2002『横須賀市埋蔵文化財調査報告書第10集　打木原遺跡「(仮称)長井海の手公園整備計画に伴う埋蔵文化財発掘調査」』160頁

佐藤達夫 1960「ホロン・バイルの細石器文化」考古学雑誌46-3　93-101頁
鈴木次郎1999「寺尾・栗原中丸両遺跡の石器石材の再検討」　かながわの考古学　研究紀要 4 110-133頁
鈴木美保・五十嵐彰・大沼克彦・門脇誠二・国定貞克・砂田佳弘・西秋良宏・御堂島正・山田哲・吉田政行 2002「石器製作におけるハンマー素材の推定－実験的研究と考古資料への適用－」第四紀研究41-6 471-484頁
砂田佳弘 1988「相模野の細石器ーその発生と展開に向けてー」神奈川考古 24　31-64頁
砂田佳弘 1990「ナイフ形石器と細石器の分布 神奈川県下における主要遺跡の分布と問題点」かながわの考古学 1　4・5頁
砂田佳弘 1993a「細石器技法の発達」考古学の世界 古代を拡大する②関東・中部88-89頁
砂田佳弘 1993b「細石器の出現－相模野の検証－」細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ 21-59頁
砂田佳弘 1994a「相模野細石器の出現－器種変遷と石材流通－」國學院大學考古学資料館紀要10 1-41頁
砂田佳弘 1994b「相模野細石器の変遷」神奈川考古30 1-20頁
砂田佳弘 1996a「遺跡群の形成」石器文化研究5　305-320頁
砂田佳弘 1996b「愛鷹・箱根山麓の細石器～相模野からみた編年の覚え書き～」静岡県考古学会シンポジウムⅨ「愛鷹・箱根山麓の旧石器時代編年」収録集83-85頁
砂田佳弘 1997a「日本列島細石器文化の編年へ向けて」第22回　九州旧石器文化研究会「九州の細石器文化細石器文化の開始と編年研究－」415-428頁
砂田佳弘 1997b「遺跡群の空間分布」研究紀要2　かながわの考古学　11頁
砂田佳弘 1999「相模野細石器の暦年補正年代」かながわ考古学財団調査報告49吉岡遺跡群Ⅸ　25-30頁
砂田佳弘 2001「相模野細石器編年の到達点」考古学講座相模野旧石器編年の到達点 73-90頁
砂田佳弘 2003「相模野細石器研究のこれから」考古論叢神奈河11 175-177頁
砂田佳弘 2004「叩き石を見る目」石器づくりの実験考古学　56-74頁
砂田佳弘2007a「相模川流域の細石器から土器が出現する頃～丹沢山地と相模原台地の相克」第2回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集66-69頁
砂田佳弘2007b「総論:叩き石に見る時代相」考古学ジャーナル 556　3-6頁
砂田佳弘2007c「叩き石から読む石器研究とその時代」岩宿フォーラム2007／シンポジウム　敲石・叩き石2-8頁
砂田佳弘2008「<潮流と展望>岩宿フォーラム2007／シンポジウム「敲石・叩き石」」石器文化研究 14 53-57頁
芹沢長介1954「関東及び中部地方に於ける無土器文化の終末と縄文文化の発生とに関する予察」駿台史学 4 65-106頁
芹沢長介1959「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について(予報)」第四紀研究 1-5 174-181頁
千葉英一・吉崎昌一・横山英介1984「湧別技法」考古学ジャーナル229 16-21頁
藤川尚位1959「置戸遺跡出土の擦痕石器の実例と細石核につて」先史時代9
町田　洋・新井房夫1976「広域に分布する火山灰－姶良Tn火山灰の発見とその意義－」科学46　339-347頁
松村信博・山本純代 2001『高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第63集　奥谷南遺跡Ⅲ　四国横断自動車道(南国～伊野間)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』480頁
三瓶裕司 1999『かながわ考古学財団調査報告55三ノ宮・下谷戸遺跡Ⅰ』402頁
御堂島正 2003「石器製作の使用痕－トラセオロジーの視点から－」考古学ジャーナル499　12-15頁
吉崎昌一 1961「白滝遺跡と北海道の無土器文化」民族学研究26-1 13-23頁

田名向原遺跡の住居状遺構とその性格

戸田 哲也・麻生 順司

1 はじめに

田名向原遺跡は、神奈川県相模原市田名塩田に位置する「田名塩田遺跡群」内の地点遺跡の一つであり、住居状遺構が発見されたことにより国指定遺跡となる際に旧石器時代の住居状遺構を代表する遺跡名として付けられたものである。

田名塩田遺跡群全体の調査は平成元年からの試掘調査から開始され、この一連の調査内容については「田名塩田遺跡群Ⅰ～Ⅲ（田名塩田遺跡群発掘調査団　1999・2001・2002)」として正式報告書が刊行されている。また、旧石器時代の住居状遺構が発見された田名向原遺跡については「田名向原遺跡Ⅰ（田名塩田遺跡群発掘調査団　2003)」「田名向原Ⅱ（田名向原遺跡研究会・相模原市教育委員会　2004)」「田名向原Ⅲ（相模原市教育委員会　2006)」として正式報告と研究編及び保存整備事業に伴う発掘調査報告書が刊行されている。

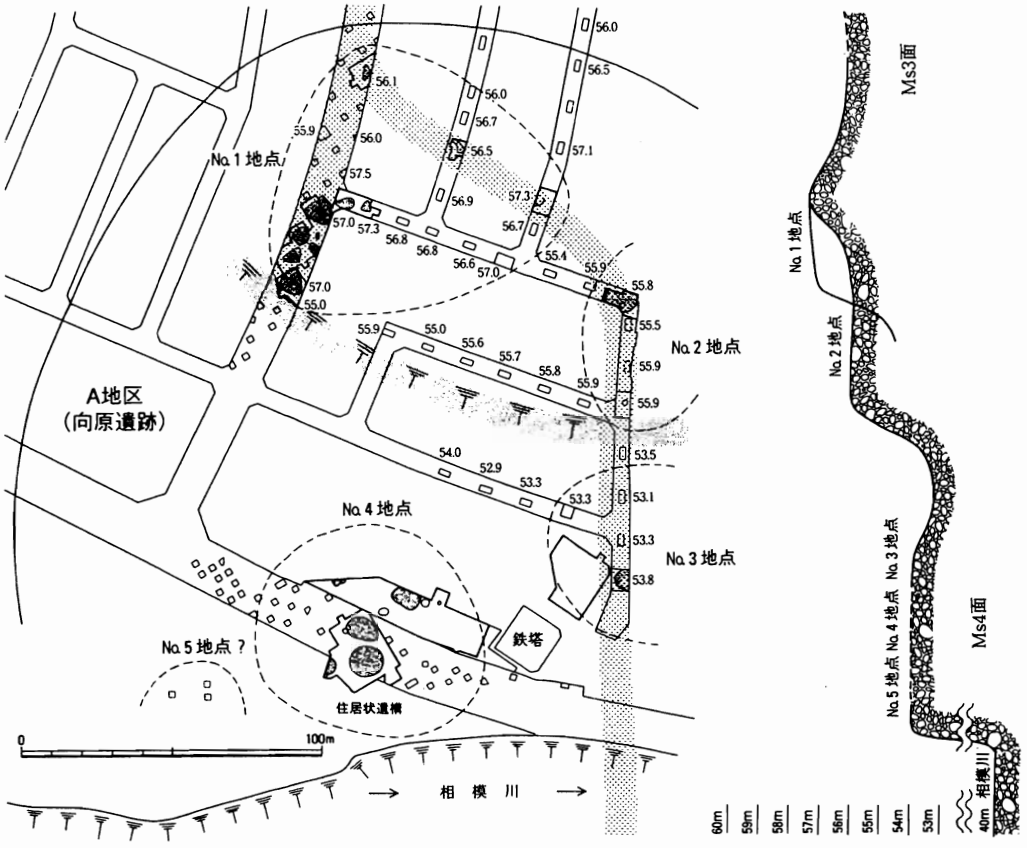
本項では、これらの成果を踏まえて田名向原遺跡の立地条件と出土石器の内容から旧石器時代の住居状遺構について若干の検討を加えてみたい。

2 田名向原遺跡の立地と地点遺跡の分布

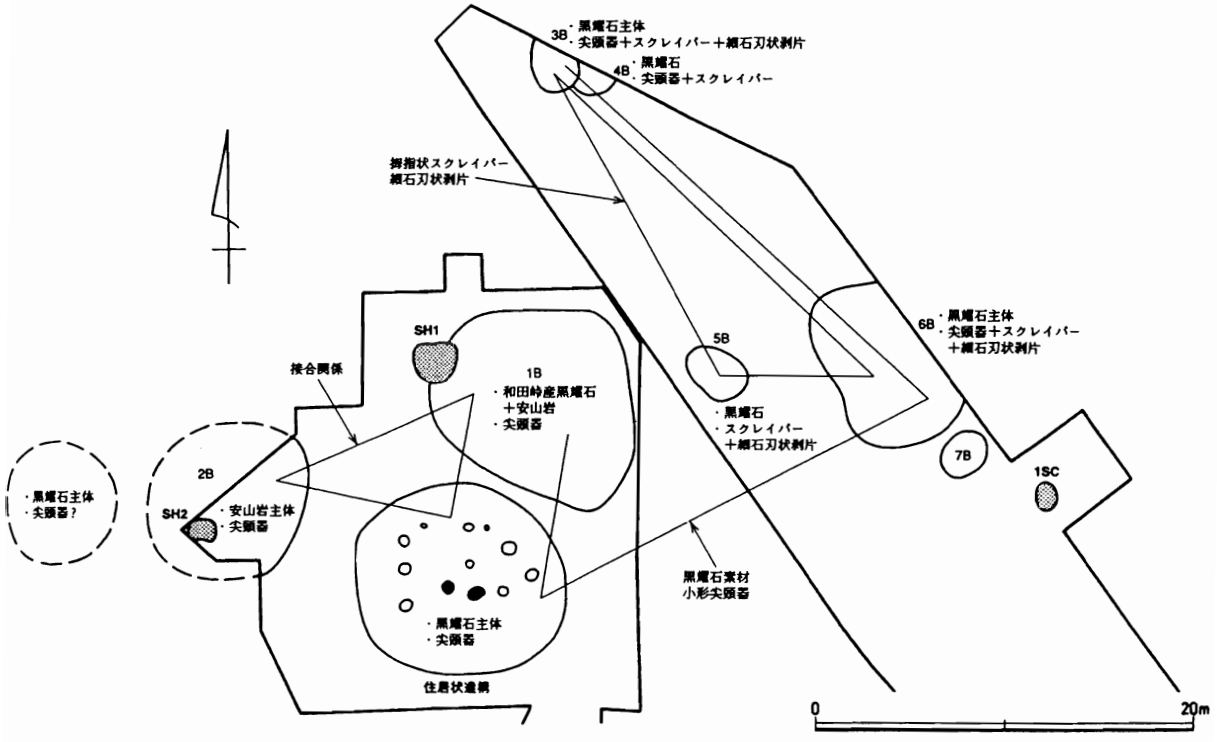
田名向原遺跡の旧石器時代調査では、№1～№5までの5ヵ所の地点遺跡が発見され、住居状遺構はこの内の№4地点に立地しており、それぞれに異なった特徴を持つ遺跡が認められている。また、遺跡の立地する地形的な特徴としても遺跡の中央に相模川と平行する比高差2～3m前後の崖線も発見され、各地点遺跡がこの崖線よりも北東に立地する№1・2地点と、崖線の南西に立地する№3～5地点に分布が分離されることが判明した。この崖線は田名向原遺跡が立地する地形面である陽原段丘を細分する段丘崖であり、№1・2地点が発見された一段高い北東側がMs3面、相模川に近く№3～5地点が発見された一段低い南西側がMs3面よりも新しいMs4面となる（第1図)。

そして、この異なる段丘面上に発見された地点遺跡の石器群の内容としては、№1・2地点ではナイフ形石器を主要な利器とする石器群が検出され、一方の№3～5地点では、住居状遺構の出土遺物としても代表される槍先形尖頭器を主要な利器とする石器群が認められている。

このように本遺跡では台地面の変化による遺跡の新旧関係が明確に認められ、さらに石器群の内容も主要な利器がナイフ形石器から槍先形尖頭器へと大きな変化を示すことが確認された。また、本遺跡の南側を流れる相模川流域には約1万7000年前後に発生したと考えられる富士相模川泥流堆



第１図　各地点遺跡の位置と地形面の変化



第２図　No.４地点の遺構配置と石器群の特徴

積物が確認されており、この堆積物が№.３～５地点の立地する段丘面の低いＭｓ４面の土層堆積に検出され、№.１・２地点が立地する一段高い段丘面のＭｓ３面には堆積していないことも確認された。

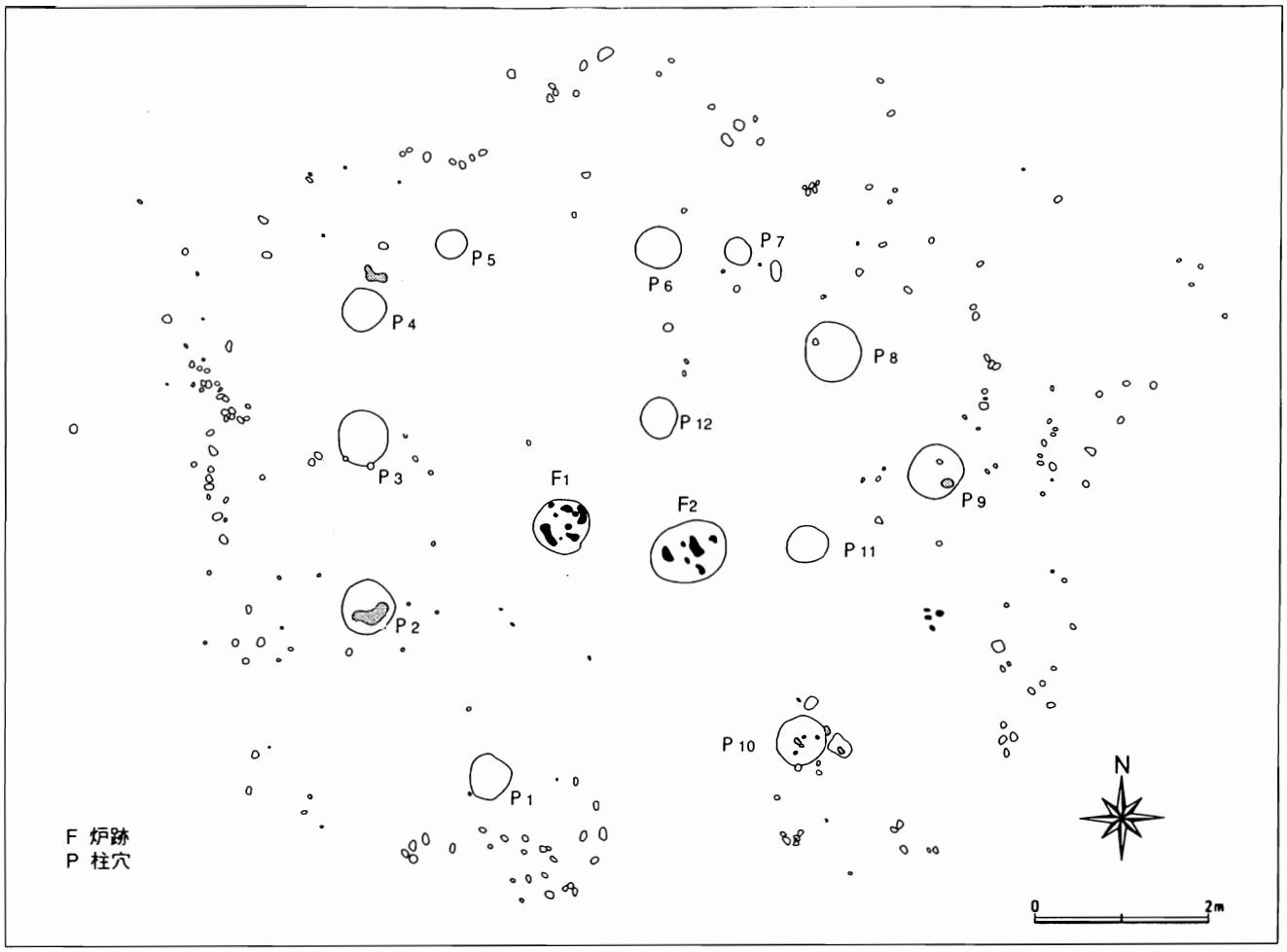
このような状況から田名向原遺跡の環境変化と人間活動の流れをまとめてみると、まずＭｓ３面が相模川から離水して火山灰土が堆積した後に人間が移動してきてナイフ形石器を製作し、№.１地点と№.２地点の遺跡が残される。その後Ｍｓ３面に火山灰土が堆積している途中に富士相模川泥流が発生してＭｓ４面を埋め尽くし、Ｍｓ４面が完全に離水して段丘化した直後に槍先形尖頭器を製作する一群が移動してきて№.３～５地点の遺跡が残されたものと考えられよう。

このように住居状遺構が発見された№.４地点は、石器群を用いた編年的にはナイフ形石器群よりも新しい槍先形尖頭器を主要な定形石器とする段階と言うことができ、地形と土層堆積状態からは富士相模川泥流の発生直後という年代的な位置づけと大河川の川岸という立地条件を持つ遺跡と言うことができよう。

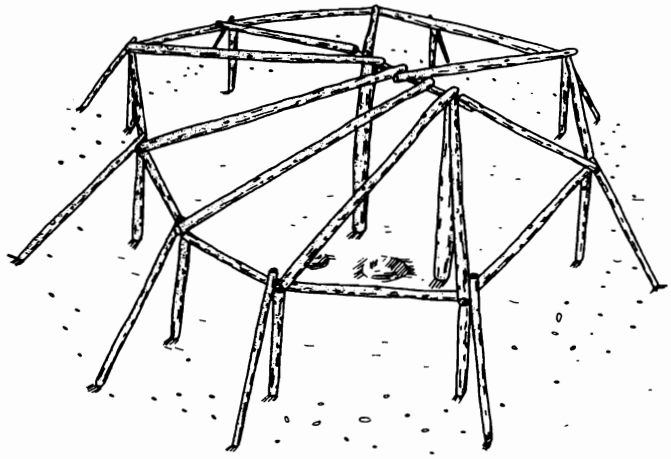
３　住居状遺構の特徴と出土石器群

田名向原遺跡の調査成果としては、本遺跡を大きく特徴付け国史跡指定の契機ともなった住居状遺構の発見が最も大きなものとしてあげられる（第３図）。この遺構は２ヵ所の炉跡と12本の柱穴が発見され、さらに住居としての範囲を示すような形で拳大の礫が約10ｍ×10ｍの環状に配置されている状況が認められた。また、その範囲内には人の生活を示すように集中的に出土した石器群と炭化物も発見されている。このように本遺構からは、まず第１点として施設の範囲を示すような状況が認められたこと、第２点としてその一定の面積を覆う上屋をかけるための支柱と考えられる柱穴が発見されたこと、そして第３点としては施設内に厨房用あるいは暖をとるためのものと考えられる炉跡が確認されたこと、というように「住居状遺構」を想定する上で重要な３つの構成要素が１ヵ所で確認された遺構であり、このような遺構は本邦初の発見といえよう。

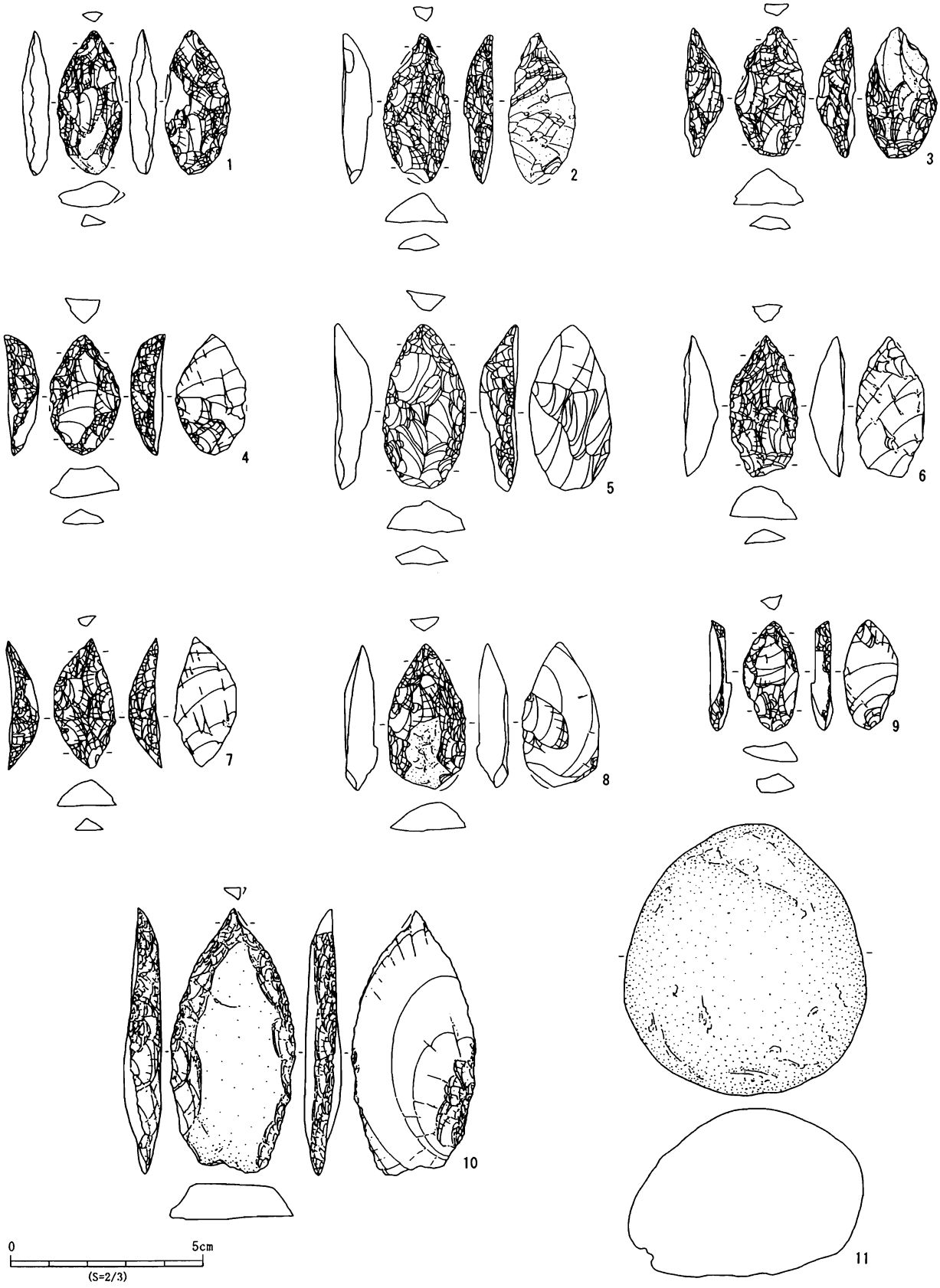
第４図はこれらの調査成果から上屋構造を想定したものである。今後は構築材を含めたこのような上屋構造全体の検討や、住居の範囲を示すものとした外周円礫の位置づけ、さらに生活の主体をなすものと考えられる施設内から発見された大量の石器群の存在とその解析など、多くの課題が残されている。このような課題の中で、本遺構の大きな特徴の一つである外周円礫については、その内容が磨石状の円礫を代表として、石核、敲石、台石、礫で構成されており、遺構内より出土した石器群の素材として大量に用いられた黒耀石以外の在地の石材を多用していることも大きな特徴といえる。特に、意識的に配置されたような状況でまとまって検出された磨石状円礫については、富士山起源と考えられる多孔質の玄武岩が特徴的に用いられており、大きさとしても拳大よりも若干大きめでやや扁平という規格制を持ったものが用いられている。このことからこの外周円礫は石質や大きさによって選択されて持ち込まれている状況が認められている。



第３図　住居状遺構実測図



第４図　住居状遺構上屋復元想定図



第５図　住居状遺構出土石器実測図

さて、田名向原遺跡を見ていく上では黒耀石を用いた小形の槍先形尖頭器の存在ももう一つの大きな特徴としてあげられよう（第５図)。平成９年の調査では、計193点の槍先形尖頭器が発見されており、面積あたりに対する出土量としては突出した傾向が窺われる。これらの尖頭器の内容としては従来から一般的に行われている分類である両面調整・半両面調整・片面調整・周辺調整の各種が認められ、点数的には周辺調整尖頭器が最も多く確認されている。また、これらの尖頭器の素材となった石材としては、長野県の麦草峠産を主体とする信州系を中心に伊豆や栃木県の高原山産など各原産地の黒耀石が持ち込まれていることにも注目される。

尖頭器の調整加工では、両面調整尖頭器や半両面調整あるいは片面調整尖頭器では非常に丁寧で面的な加工を施した精緻な尖頭器も認められるが、周辺調整尖頭器を中心とする器体縁辺部の加工には裏面から表面に向かう比較的急角度の調整が多く認められ、特に素材の縁辺部に細かな調整加工を施しただけの粗雑な周辺調整尖頭器も認められている。このような調整加工のあり方からは従来では未製品として捉えられてきたような尖頭器も含まれることから、このような尖頭器も未製品ではなく尖頭部が作出されたことにより完成しているものとも考えられ、尖頭部さえあればよいと言うような意識までも推測されてこよう。

このように本住居状遺構からは多種多様な尖頭器が大量に発見され、さらに剥片類としては黒耀石のチップを含む大量の剥片が検出されていることから、本遺構内で槍先形尖頭器の製作が繰り返し行われていた様相が強く認められる。また一方では器体の先端部がつぶれた尖頭器や先端方向からの小剥離が観察されるなどの明瞭な使用痕が観察される尖頭器の存在や、柄との装着方法が推測されるような「すれ」状の擦痕が観察される尖頭器なども認められ、さらには刃部に顕著な摩滅痕が観察されるようなスクレイパーなども検出されていることからは、本遺跡においては石器の製作だけではなく実際にその石器を使用していた生活行動までもが推測されてこよう。また、欠損部に再度加工を施している石器や再生品としか考えられないような寸詰まりの尖頭器の存在からは、使用時の欠損後も破損品を持ち帰って再生行為を行うというリサイクル的な行動も想定される。

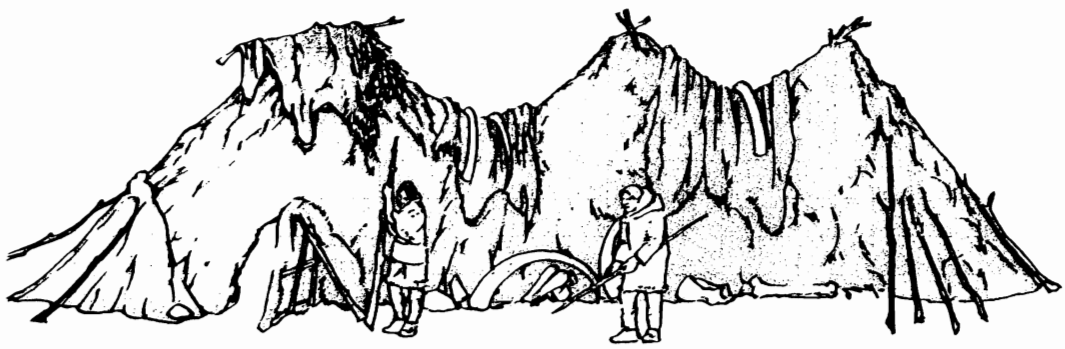
４　まとめ

以上のように、田名向原遺跡から発見された遺構は、その範囲を示す明確な区画が認められ、上屋の存在を窺わせる柱穴の存在、さらに屋内施設としての炉跡の発見という「住居」を想定させる３つのポイントがセットで確認されたものであり、日本旧石器時代の住居状遺構として最も重要な遺跡と言うことができよう。また、本遺構から検出された突出した出土量を持つ槍先形尖頭器とそれに関わる黒耀石製の調整剥片類の大量出土という状況は、住居内における生活の一貫として石器製作作業が行われてきた結果と考えられ、調整加工の各種の存在も含めて多種多様な尖頭器の製作を行っていたことが理解できる。そして尖頭器の使用痕と再生利用の存在や炉址を持つ住居状遺構という特殊性からも考えると、旧石器時代人の生活行動と考えられる移動と回帰の中で本遺跡の地

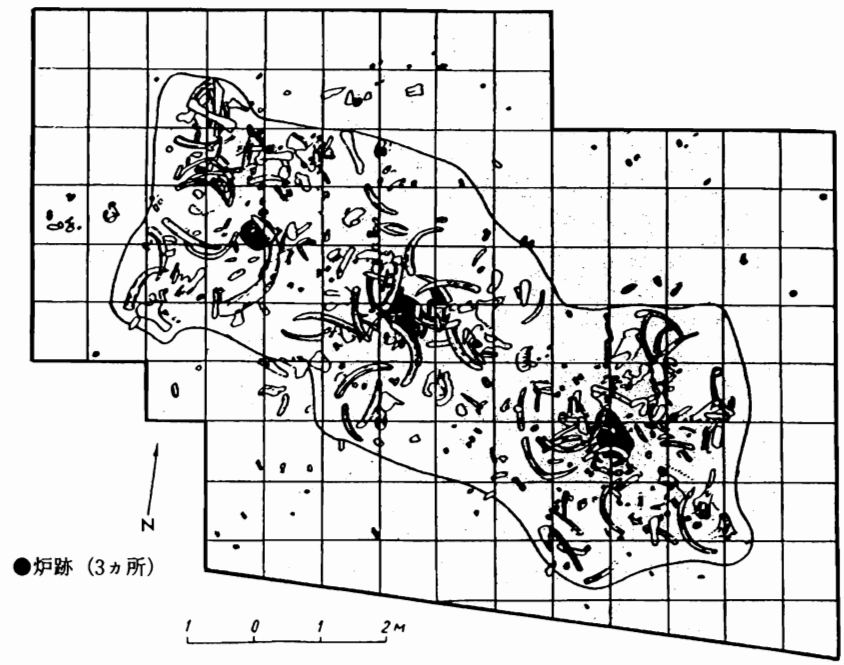
形と環境という立地条件が必要であり、そのために繰り返し戻ってくるための建築物としての存在意味も見えてこよう。

一方で、本遺跡からは住居状遺構だけではなく、通常一般的に旧石器時代遺跡から発見される石器集中部と礫群も検出されている。これらの石器ブロックの特徴としてはやはり槍先形尖頭器を主要な利器としているが、各ブロックによって細かな石器組成や使用石材に特徴が認められ、第２図に示すような住居状遺構と各ブロックとの有機的な関連も認められている。

このように田名向原遺跡の調査ではいくつもの新たな知見を大きな成果として示すことができた。特に本遺跡のような大河川を目前とする低位段丘面に立地するという地形上の特徴も含めてさらに検討していく必要があろう。



第６図　下図の平面プランから描かれたテント型ロングハウス想像図
(after David Lambert and the Diagram Group 1987. *The Field Guide to EARLY MAN*, Facts On File, Inc., Diagram Visual Information Ltd.)



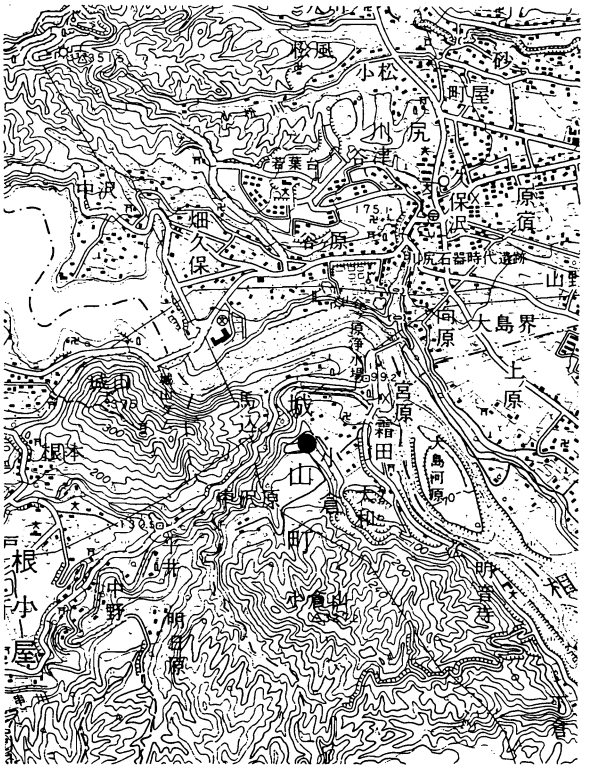
第７図　プシュカリＩ遺跡（ウクライナ）のロングハウス平面プラン（長径10m）
マンモスの骨が散らばっており、住居構築材と考えられる
(after Boriskovskii 1953, Paleolit Ukraini, *Materiali Issledovaniaya po Arheologii SSR40*. Moscow-Leningrad)

小保戸遺跡の環状分布を呈する礫群（速報）

栗原　伸好

1　はじめに

今回の講座のタイトルの一部にある「ムラ」とは、ある一定の範囲内における個々の「住まい」の集合体と言うことが出来よう。このため、今回のように、考古学的な資料から「ムラ」を考える際、その最も基本的な構成単位である家族の生活の場としての「住まい」を検討することが必要である。しかし、旧石器時代は、他の時代とは異なり、狩猟採集を中心とした遊動的な生活を送っていたと考えられことや、縄文時代以降の様な明確な掘り込みを持った「住まい」の発見が極めて乏しいことから、「住まい」そのものの構造は遺構としての痕跡を明確に留めない程度の比較的簡易なものが主体であったと判断出来よう。このため、旧石器時代の「住まい」の発見は極めて困難であり、同時にその認定も同様であると言えよう。



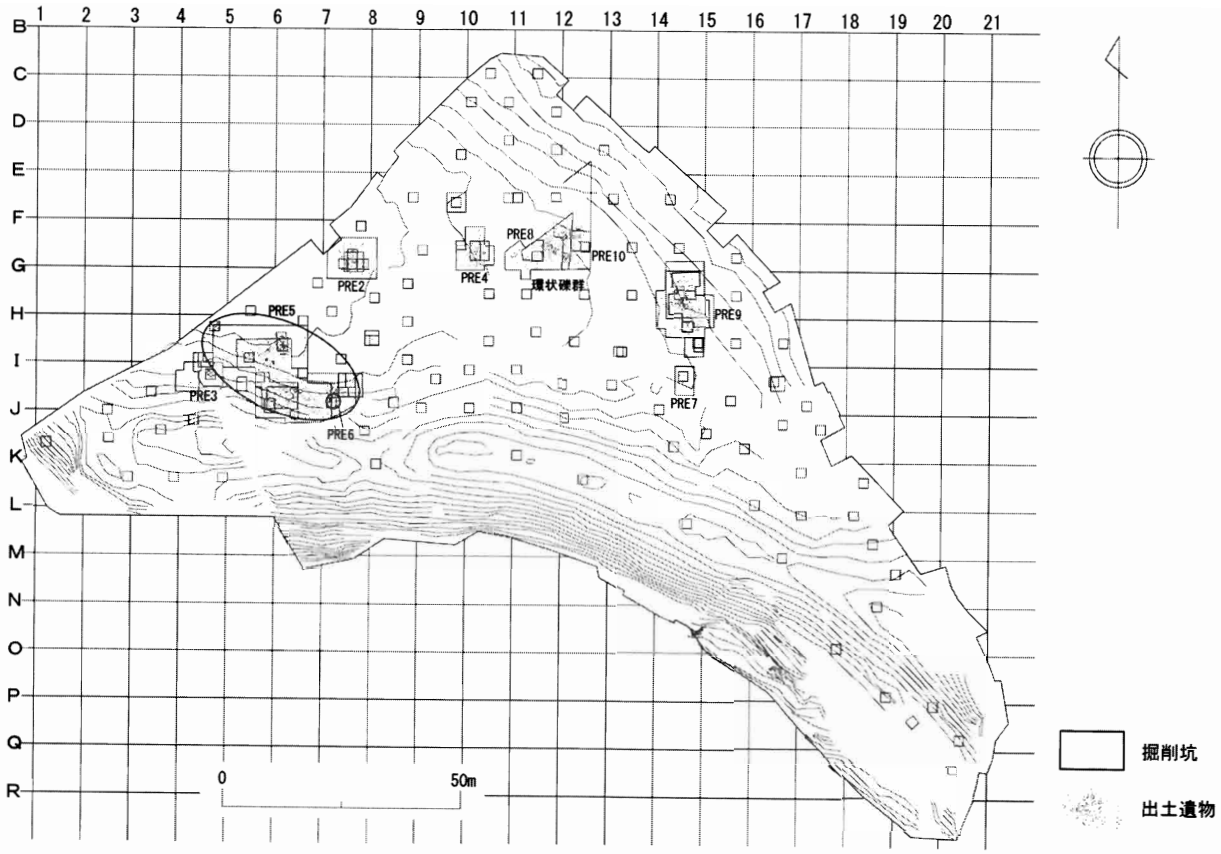
第１図　遺跡位置図（S＝1/50,000）

しかし、今回、小保戸遺跡から発見された遺構は、その当時の人々の「簡易な住まい」である可能性も示唆されることから、現在出土品整理作業中ではあるが、速報的にその事例報告を行い、今回の講座の一つの検討材料とする。

2　遺跡の概要

小保戸遺跡の調査は、一般国道468号（さがみ縦貫道路）建設事業に伴う事前の発掘調査として、平成19年２月より平成21年11月まで断続的に実施され、現在は出土品整理作業中である。

本遺跡は、相模原市城山町小倉字大保戸に所在し、神奈川県を東西に大きく二分する相模川と串川の合流地点のすぐ西側に位置している。遺跡は串川により形成された河岸段丘上（田名原面）に立地しており、標高は現地表面で約132m前後を測る（第１図）。本遺跡のすぐ西側には、やはり串川により形成された比高差約30mを測る高位段丘面が広がっており、大保戸（おおほど）遺跡が位置している。また、串川を挟んだ北側には、津久井城跡（馬込地区）が位置している。



第２図　旧石器時代　遺物分布図

本遺跡の南端部からは、ローム層の上面で遺跡内をほぼ東西にはしる埋没谷の存在が確認されている。また、遺跡の北～東側に掛けては、串川により形成された段丘崖が下位に形成され、これとは逆に遺跡の西～南側には大保戸遺跡に至る高位段丘面に向かう段丘崖が形成されていることから、本遺跡、取り分け埋没谷の北側は一種の狭小な独立丘陵の様な地形的独立性を持っていると言えよう。

層位的には、相模川左岸に広がる相模野台地にほぼ相当する土層が堆積しており、詳細は現在分析中であるが、基盤礫層のすぐ上部には姶良 Tn 火山灰を含んだ層位が存在しているようであることから、本遺跡は姶良 Tn 火山灰の降灰直前に陸地化したものと考えられる。

３　旧石器時代調査の概要

旧石器時代の石器群は、埋没谷の北側の平坦部または緩斜面上から大きく９箇所の地点に分かれて発見された。これらの石器群は、出土層位・石器組成から第Ⅰ～Ⅳの４つの文化層に区分できる（第２図）。第Ⅰ文化層は、L1H 層から出土した石器群であり、槍先形尖頭器の製作に伴う石器群である（第２図 PRE2・3）。第Ⅱ文化層は、B1層上部から出土したナイフ形石器を伴う石器群である。第４・７～９石器集中地点および第５石器集中地点の一部から出土している（第２図 PRE4・5・7～9）。

第Ⅲ文化層は、B1層下部から出土したナイフ形石器を伴う石器群である。第５石器集中地点の一部および第10石器集中地点から出土している（第２図 PRE5・10)。石材組成は、凝灰岩・チャートなどの非黒曜石系の石材が主体をしめる。第５石器集中地点は、石器・礫合わせて900点以上の資料が出土しているが、遺物の平面分布や礫群の検出レベル等から、第Ⅱ・Ⅳ文化層と一部重複して出土している可能性が考えられる。これに対し、第10石器集中地点は、発見当初、第Ⅱ文化層中の第８石器集中地点の一部として捉えていたが、遺物の平面分布や大形礫の出土面、石材組成の差異などから、両者は明確に区分することが可能である。また、第10石器集中地点からは、焼礫が環状に分布する特異な平面形態を呈する礫群？が検出された。今回主体的に取り上げるのは、この礫群についてであり、次項でその概要を述べる。

第Ⅳ文化層は、B2U 層から出土した石器群であり、第６石器集中地点がこれに当たる（第２図 PRE 6)。本遺跡の中で最も古い文化層であり、角錐状石器を伴う石器群である。

４　環状分布を呈する礫群について

さて、これまで述べてきた通り、本遺跡は極めて地形的に限られた空間でありながら、旧石器時代の人々に繰り返し利用されてきた場所であったことが理解出来る。この中でも、今回特に注目する必要があるのは、第Ⅲ文化層第10石器集中地点から検出された４基の礫群である（第３図)。

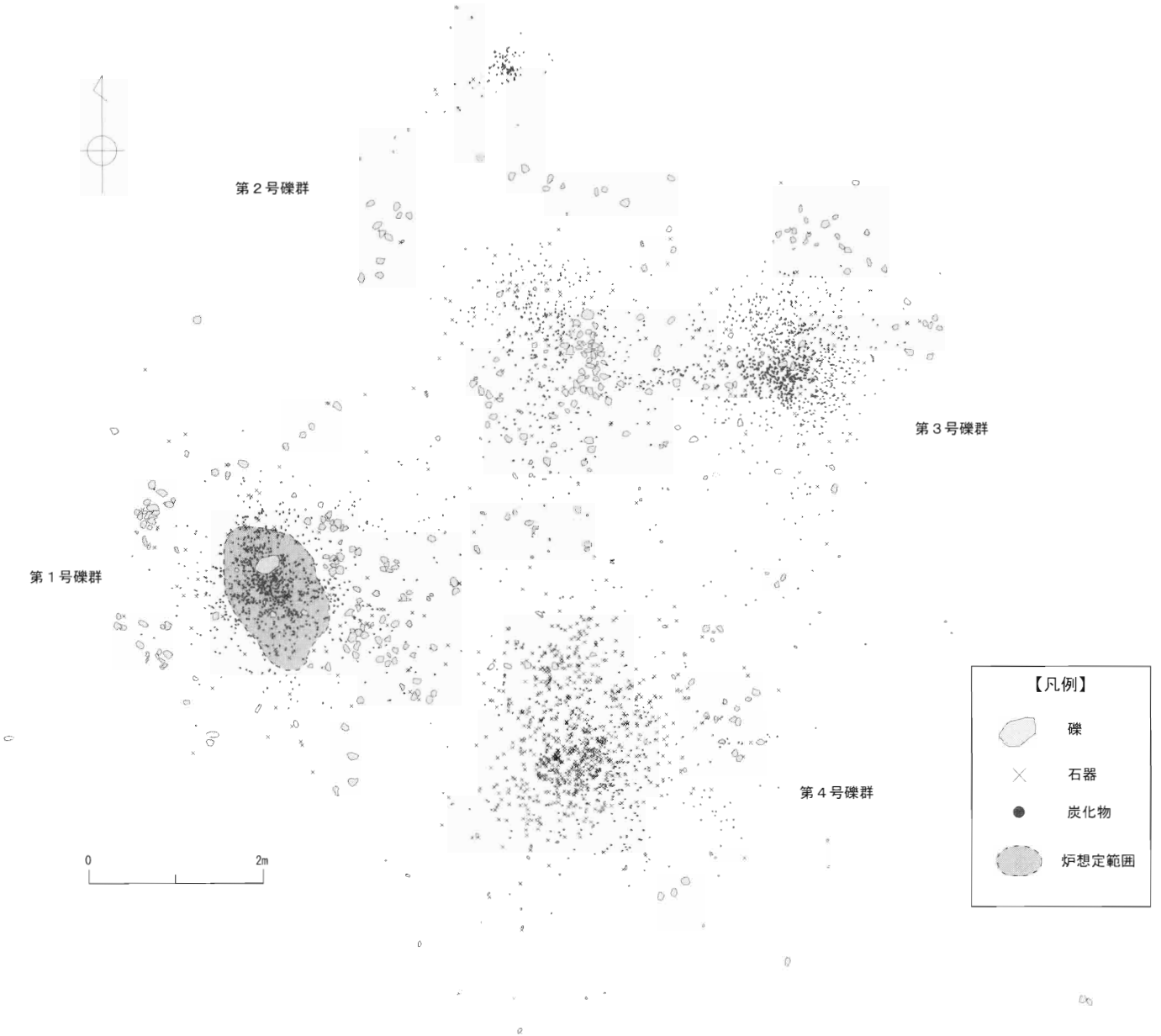
第10石器集中地点は、Ｆ－10・11グリッド中の B1層下部、約13m×10mの範囲から発見された石器群である。当初は、複数の礫群が近接した状態で発見されたものという認識でいたが、掘削範囲が拡張されると、複数と把握していた礫群が直径2.5～3.5m程の環状を呈して分布していることが把握できた（第１号礫群)。さらに調査を進めると、同様の分布状態を呈した礫群がその北東側からさらに２基（第２・３号礫群)、南東側には礫を伴わない状態で石器製作址が１基発見されたものと認識していた（第４号礫群)。この段階では、第１～３号礫群内から出土する石器数は、石器製作址（第４号礫群）内から出土する石器に比べ量的には少なく、砕片がほとんど出土していなかったことから、礫群の内側では必要最低限の石器製作しか行われておらず、石器製作の主体は礫群の外側で実施されていたものと考えていた。

環状に配された礫のほとんどは、赤または黒く変色していることから、被熱を帯びた可能性が高いと考えられる。このため、現段階では、これらの遺構に「環状分布を呈する礫群」という名称を付している。

第１号礫群は、最初に発見された礫群であり、４基の中で礫の環状分布が最も顕著に観察できる礫群である。環状に囲まれた礫の内側からは63点程の石器が出土しており、中央部やや北側からは大きな台石状の礫が１点出土している。この台石状の礫は、断面が三角形状を呈していたものの、その出土状況は平坦な面が上面となっていた。断面形状から判断すると、この面を自然の状態で上部に配することは困難であると考えられ、この礫の置き方には人為的意図があった可能性が高かっ

写真１　環状分布を呈する礫群出土状況

写真２　第１号礫群出土状況



第３図　環状分布を呈する礫群 遺物出土状況

たものと考えられる。また、礫群内からは微少な炭化物片が台石状の大形礫の周囲を中心に713点程出土しており、礫の検出面より約10cm前後掘り下げた段階で、周囲に比べやや色調が暗く、若干であるが軟質な土層の存在が確認された。この範囲は、炭化物片の分布範囲と比較的重複することから、火の使用により形成された炉址の痕跡である可能性も示唆される。

第２号礫群は、第１号礫群の北東側に隣接した礫群である。石器は43点、微少な炭化物片は279点出土している。石器・炭化物片の出土範囲は、北側に配された礫との間に若干の無遺物空間を形成し、中央部から南側を主体に分布している。また、中央やや南東寄りの一部には、礫の分布が比較的密集している箇所があり、いわゆる「礫群」が環状分布を呈する礫群内に取り込まれて分布していると捉えることも出来よう。その礫の密集部の北端からは、周囲の礫より一回り大形の台石状の礫が出土している。

第３号礫群は、第２号礫群の東側に隣接した礫群である。礫の分布は第１・２号と比較しやや散漫であるが、北東側および南西側を主体に石器40点、微少な炭化物片732点を取り囲む様に分布していることから、第１・２号礫群と同様に環状分布を呈する礫群と位置付けた。

第４号礫群は、第１号礫群の南東側に隣接した礫群である。石器503点、微少な炭化物片331点を出土する。調査当初は、微少な炭化物片の存在を把握することが出来ず、礫の分布についても他の礫群の様に比較的まとまった状態を把握することが出来なかったことから、礫群には伴わない石器製作址と捉えていた。しかし、調査の進捗と共に、数量的には第１～３号礫群に比べ少量であるが、北・北東・南東側から礫が出土し、北と南東側の礫の距離が３m前後を測り第１～３号礫群と規模的に大きな差異が無いこと、石器・炭化物片の出土状況の中心がほぼ礫の内側に存在していることから、この部分についても第１～３号礫群と同様、環状分布を呈する礫群として位置付けることとした。本礫群内からは、第１～３号礫群に比べ石器の出土量が多く、砕片も顕著に出土していることから、他の礫群とは異なり、積極的な石器製作が行われていたものと考えられる。

これまでのところ、前述のように上記の４基の礫群には、以下のような共通点が確認されている。

①礫がほぼ同一面上から、2.5～3.5m程の円周外縁部に沿って環状に分布している

②使用されている礫は、拳大程度の河原石が主であり、大部分が被熱している

③石器の分布範囲は、大部分が各礫群の内側に認められている

④微細な炭化物の分布範囲も、そのほとんどが各礫群の内側に認められている

また、複数の礫群間で共通性が認められている点としては、以下の様な点が認められる。

（a）第１～３号礫群の内側から出土する石器は、比較的少量である

（b）第１・２号礫群の中央部付近からは、台石状の大形の礫が出土している

５　ま と め

本遺跡で検出された環状分布を呈する礫群は、田名向原遺跡とは異なり明確な炉址や柱穴は有しておらず、規模も明らかに小形であり、複数の遺構が近接して存在している。しかし、各遺物の出土状況から、各々の礫群の「内」と「外」とでは、明らかに両者間に場の利用に対する差異が存在していたものと考えられる。今後の各種分析・作業の結果によるが、礫による一定空間の仕切り、その内側における道具の使用・製作、火の使用等は十分想定されよう。なお、現段階でこの様な状況を示すものとしては、何らかの居住に関する施設が想定されるが、取り分け遺物量の少なさや、柱穴や明確な炉址といった付帯施設がほとんど検出されていないことから、長期的な利用を目的としたものではなく、「テント」の様な一時的な簡易な居住施設として利用されていた可能性が高かった遺構であったと想定しておきたい。

但し、これまでの数多くの旧石器時代の調査成果を見る限り、全国的に見てもこの様な「一時的」と我々が現状で便宜的に捉えている居住形態の方が、むしろ当時の社会には一般的なものであった可能性が高かったのではないかと考えらる。このため、やはり旧石器時代の「住まい」（住居址・住居状遺構を含む）を検討する際には、縄文時代以降の「住まい」の認定基準とは異なった基準が必要である。筆者が以前述べたように、やや広範な定義とはなってしまうが、旧石器時代の「住まい」とは、「雨・風・暑さ・寒さ・外敵などから身を守るために構築された前後・左右および上部の一定空間を人為的に囲ったもの」と捉え、「洞穴などの自然地形がこの様な条件を満たし、且つ当時の人間の生活の痕跡が認識される」のであれば、これも広義に「住まい」と捉えることが現状に最も即した考え方であると認識出来よう。

その様な視点から小保戸遺跡発見の環状分布を呈する礫群を観察すると、本遺構の発見の意義は田名向原遺跡と同様、当時の「ムラ」と「住まい」を探る上では、大変貴重な発見であると考えられる。しかし、これらの遺構の発見も、視覚的に最も礫の環状分布を把握しやすい第１号礫群が最初に発見されたという偶然からであり、これが第２～４号礫群から発見されていたら、この様な認識を持つことが出来たのは、現地でではなく、出土品整理作業に入ってからであろう。

旧石器時代の「ムラ」と「住まい」を探ることは、旧石器時代研究者にとって極めて魅力的なテーマである。しかし、その個別事例の現地での具体的把握には、前述の様に多くの困難さと偶然が伴う。今後もより慎重な視点および調査、そして柔軟な思考が調査担当者・行政に求められている。

参考文献

田名塩田遺跡発掘調査団　　2003　『田名向原遺跡』Ⅰ　　相模原市教育委員会
相模原市教育委員会・田名向原遺跡研究会　2004　『田名向原遺跡』Ⅱ　相模原市教育委員会
栗原伸好・戸羽康一・木村吉行　2009　「小保戸遺跡」『石器文化研究』15　石器文化研究会
吉田政行　1998　「旧石器時代の「住居遺構」集成を通して」『公開セミナー記録集　「用田バイパス関連遺跡群ローム層中出土の炭化材」「旧石器時代の住居遺構を探る」』　（財）かながわ考古学財団・神奈川県立埋蔵文化財センター

平成21年度考古学講座

かながわの旧石器時代のムラと住まいを探る

編集・発行　神奈川県考古学会

印　　刷　　株式会社　アルファ

平成22(2010)年3月7日